令和２年度

生活文化調査研究事業(茶道)

報告書

文化庁地域文化創生本部事務局

令和２年度生活文化調査研究事業(茶道)報告書

序　本調査研究事業について.....1
１章　茶道の歴史と現状について.....2
　１節　日本における茶道の歴史について.....2
　　１－１　茶の伝来と日本における喫茶の流れ.....2
　　１－２　「茶の湯」の成立.....4
　　１－３　「茶道」の広まり.....5
　　１－４　近代の茶道.....5
　２節　「茶道」の概要.....8
　３節　現代における茶道の現状と社会的な位置付けについて.....13
　　３－１　教養・趣味としての茶道.....13
　　３－２　国民意識調査について.....17
　　３―３　現代における茶道の社会的位置付けについて.....20
　４節　学校の授業及び部活動などで行われる茶道について.....26
２章　茶道団体・茶道教室の活動について.....29
　１節　茶道団体の活動について.....30
　　１－１　茶道団体へのアンケート調査の実施概要.....30
　　１－２　茶道団体へのアンケート調査の結果概要.....31
　　１－３　まとめ.....46
　２節　茶道教室の活動について.....48
　　２－１　茶道教室へのアンケート調査の実施概要.....48
　　２－２　茶道教室へのアンケート調査の結果概要.....49
　　２－３　まとめ.....60
結　本調査研究事業のまとめ.....61
参考資料　文化創造アナリスト(茶道)及び有識者会議検討経過.....65
参考資料　茶道具について.....66
参考資料　国民意識調査の結果.....80
参考資料　茶道団体調査アンケート配布先.....86

序　本調査研究事業について

1　本事業の目的

文化庁では、平成 27 年度以降、生活文化を把握するための調査研究事業等を行っている。平成 27 年度は、生活文化の保護を検討していくための調査研究を、また、平成 29 年度から令和元年度までは、文化芸術基本法及び文化芸術振興基本計画に基づき、生活文化等の振興策を検討するための調査研究を行った。

今年度実施した本調査研究事業は、これまでに実施した上記調査結果等を基に、生活文化分野の中でも茶道についてより詳細に実態把握するための調査研究を行うことによって、生活文化分野の保護・振興策の検討に資することを目的としている。なお、本事業報告書でいう茶道には、煎茶道を含んでいない。

※文化芸術基本法（平成 13 年法律第 148 号）

第十二条　国は，生活文化（茶道，華道，書道，食文化その他の生活に係る文化をいう。）の振興を図るとともに，国民娯楽（囲碁，将棋その他の国民的娯楽をいう。）並びに出版物及びレコード等の普及を図るため，これらに関する活動への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。

2　本事業の概要

本事業は、茶道がおかれている現状等について詳細な実態把握を行うため、

・茶道の成立、変遷を把握するための文献調査
・茶道への興味関心等に関する国民意識調査
・茶道の流派団体（以下この報告書では「茶道団体」という。）へのアンケート調査
・茶道教室へのアンケート調査
・茶道具・原材料に関する製造業者等へのヒアリング調査

を行い、３回の有識者会議を経て、報告書としてまとめたものである。

なお、今回の調査では、茶道具・原材料に関する調査が十分に行えず、網羅的な調査にならなかったことから、これらの調査結果の分析を含め参考資料への掲載にとどめた。

１章　茶道の歴史と現状について

１節　日本における茶道の歴史について

１－１　茶の伝来と日本における喫茶の流れ

・茶の伝来

茶は日本に自生していない植物であり、8 世紀から 9 世紀にかけて、遣唐使によって中国からもたらされたと考えられている。弘仁 7 年（816）に最澄が弟子の泰範に宛てた消息には、「茶十斤」を送るという一文がある。ここから 9 世紀の初頭には、比叡山東山麓の坂本周辺で、既に茶の栽培が始まっていたことが推定される。

確実な記録としては、『日本後紀』の弘仁 6 年（815）4 月 22 日の条に、近江国滋賀韓崎（滋賀県大津市）へ行幸した嵯峨天皇に対し、梵釈寺の僧侶・永忠が「手自ら茶を煎じ奉御」したことが見られる。同年 6 月には「畿内ならびに近江・丹波・播磨等の国に茶を植え、毎年これを献ぜしむ」ともあり、嵯峨天皇の在位時に、畿内において茶の栽培が広められたことも確認される。永忠は最澄と同じ入唐留学僧の一人であり、嵯峨天皇も三筆の一人に数えられる唐文化愛好者である。この嵯峨天皇の時期に、茶は唐文化の一つとして受容された。

・当初の喫茶形式

平安時代初期に日本で受容された茶の飲み方は、俗に「団茶」の名前で知られている。団茶とは中国唐時代に盛行した喫茶法であり、その詳細については陸羽の著書『茶経』にまとめられている。それは茶の新芽を餅状にしてから固めた固形茶（団茶）を、いちど焙ってから粉末状にし、湯に入れて煮出すというものである。このことから、団茶とは保存形態の名称であり、飲み方としては「煎茶法」と呼ぶ方が正確であるとも指摘される。ただし、平安時代に日本で飲まれていた茶が、どこまで『茶経』に記される唐式に則していたのかは、史料が不足しているため明らかにし得ない。

ところで、茶は『伊勢物語』『源氏物語』など平安時代の王朝文学に登場しないため、早い段階で廃れていたとする見方もあった。しかし、室町時代に著された一条兼良『公事根源』には、茶を用いた儀式である「季御読経」の記述がある。季御読経とは、平安時代に行われていた宮中の仏教法会であり、春と秋に僧侶が国家安泰を祈願して大般若経を転読するというものである。この時、僧侶に煎茶に甘葛や生姜などを入れた「引茶」が供されたとされる。また、密教寺院でも茶が儀式に用いられていたことが確認され、近年では、平安時代を通じて煎茶法の習慣が継続されていたことが明らかとなっている。

・抹茶の伝来と、栄西の「喫茶養生記」について

鎌倉時代には、貿易で訪れていた中国人商人たち、あるいは中国に留学した僧侶によって、新しい喫茶の方式である抹茶（点茶）がもたらされる。その担い手の一人が、臨済宗の開祖として知られる栄西であった。『吾妻鏡』の建保 2 年（1214）2 月 4 日の条には、将軍・源実朝の体調が優れなかったところ、栄西が良薬として「茶一盞」、すなわち抹茶を勧めたとある。当時の栄西は宋からの留学から帰国し、北条政子によって鎌倉に寿福寺を与えられていた。留学していた仏教僧侶が、最新の中国文化を為政者に紹介するという形は、平安時代の団茶と共通する。また栄西は茶と一緒に、「茶の徳を誉める所の書」を実朝に献上したとされ、これが日本最初の茶書として知られる『喫茶養生記』と考えられている。

この時期の抹茶は、客にあらかじめ粉末状の茶（抹茶）を入れた天目を持たせ、浄瓶（湯瓶）と茶筅を持った給仕がまわり、湯を注いで撹拌するというものである。こうした茶法が中国宋時代に行われていたことは同時期の茶書である伝徽宗『大観茶論』などに記録されており、建長寺や建仁寺といった古い禅宗寺院で行われる儀式「四頭茶礼」は、実際にその古様を伝えている。

・喫茶文化と仏教

鎌倉時代を通じて、抹茶は寺院から武家や公家へと普及していった。正平 6 年（1351）奥書の絵巻物『慕帰絵詞』（西本願寺蔵）には、歌会に伴う食事の準備の場面が描かれており、その傍らでは抹茶の茶道具が準備されている。この段階で、茶は既に薬用から脱し、嗜好品となっていた。

なお、この時期の茶の栽培は禅宗寺院に限ったものではなく、むしろ、生産地としては真言宗と天台宗の密教寺院、あるいは、律宗寺院の名前が記録されており、最もよく知られているのが京都栂尾の高山寺である。栄西から高山寺の明恵に茶の種が贈られたという伝承は、近年では否定されているものの、鎌倉時代には既に栂尾の茶は高級茶としてその名声を確立している。

また、横浜市金沢の称名寺は、幕府執権を世襲した北条家の連枝である金沢氏の菩提寺であり、同所に伝えられた「称名寺聖教／金沢文庫文書」（称名寺蔵）には、鎌倉時代末期の東国における茶の受容をうかがわせる記述が散見される。当時、称名寺周辺でも茶の栽培が行われていたが、栂尾茶は高級品として高い需要を持ち、金沢氏では京都の人脈を用いてその入手に腐心している。この時期、茶は武家社会の贈答品となっていた。

１－２　「茶の湯」の成立

・喫茶の広まり

このように嗜好品として広まった茶は、次第に遊興的な側面を強くしていく。『太平記』には討幕を計画する後醍醐天皇が催す無礼講が「飲茶の会」であったと記されている。

特に遊興的な茶を特徴づけるのが、栂尾産の「本茶」と、別の産地の「非茶」を飲み比べて当てるゲーム、「闘茶」である。闘茶に関する文献として、『喫茶往来』には豪華な唐物によってきらびやかに飾り付けられていた茶席の様子が記されている。豪華な景品が賭けられていたことは『太平記』『看聞御記』などに見えており、これは南北朝時代の浪費を好む刹那的な時代相「婆娑羅」を説明する上での重要な要素となっている。このような茶が流行していたため、興国５年（1344）刊行の夢窓疎石『夢中問答』において、既に奢侈へと流れた茶の有様を厳しく糾弾する一節が登場している。

・名物茶道具と会所の茶

室町時代には、足利将軍家の周辺において茶道具が吟味されるようになり、『満済准后日記』の永享６年（1434）の条には、「九重」と名付けられた茶壺が登場している。また、将軍家周辺で命名された茶入としては、「付藻」「玉垣」「朱衣」などの銘が確認される。これらは、貿易によってもたらされた大量の中国製陶器（唐物）の中から選び抜かれた、形や釉薬の調子などが優れている作例であり、後には「名物」と呼ばれ、茶道具の規範となっていく。

やがて、こうした茶道具は、寄り合い等に用いる座敷「会所」の飾り付けに用いられるようになった。足利将軍家の同朋衆によって編纂された『君台観左右帳記』には、茶道具の価値についての記述があり、後に「皆具」と呼ばれる茶道具一式が、書院造りの部屋の床脇の棚に飾り付けられている図も確認できる。この飾り付けは、現在の茶道流派で重んじられる「台子荘」の原型となるものであるが、この段階で、台子点前の作法が確立して実際に客の前で行われていたのかについては、諸説が分かれている。

・珠光（村田珠光）から千利休に至る「茶の湯」の展開

15 世紀後半には、奈良の茶人である珠光（村田珠光）の周辺で、新しい美意識の茶が萌芽していた。それは、将軍家周辺で評価された名品とは異なる、下手に分類される道具をあえて用いるというものであり、こうした美意識は、後に「わび茶」と呼ばれることになる。珠光に関する確実な記録は少ないものの、「古市播磨法師宛一紙（心の師の文)」と呼ばれる珠光の消息文には、連歌などの美意識を咀嚼し、高度な芸道論が確立しつつあった様子が示されている。

16 世紀に入ると下京、さらに、貿易で栄えていた和泉国堺へとその影響が広まり、重要な担い手として、十四屋宗伍、武野紹鷗などが登場する。この珠光から紹鷗にかけての時期に、茶室において軽食と茶道具鑑賞を伴う喫茶の形式、「茶の湯」が整備されていった。

さらに、堺からは今井宗久、津田宗及、そして、千利休といった茶人が登場し、彼らは織田信長、次いで、豊臣秀吉に仕えることで、その影響を全国へと広めていく。中でも、秀吉に重

用されたのが、利休であった。利休は、釣瓶水指、竹花入、楽茶碗といった、身近な材料や京都近辺で製作できる茶道具を創出し、唐物名物の茶と対照的な茶の湯を様式として確立させた。

１－３　「茶道」の広まり

・さまざまな流派

千利休の没後、文禄慶長期には、利休の弟子である古田重然（織部）、細川忠興（三斎）、また、寛永期には、後水尾上皇周辺の王朝文化を取り入れた小堀政一（遠州）や金森重近（宗和）が、主要な茶人として登場する。彼らは、茶道具や茶室において、利休に対する独自色を示す形で新しい茶風を確立していった。さらに、彼らは、陶磁器の生産現場に指示を出すことで、国産陶磁器の改革を先導するという役割を担った。

一方、利休の孫にあたる千宗旦は、利休の美意識を更に先鋭化させた極侘びの茶風を確立させた。また、宗旦の息子たちはそれぞれ表千家、裏千家、武者小路千家という三つの茶家を独立させ、これら「千家流」の茶は武士階級のみならず町人階級にも普及していった。

こうした茶人の個性に基づく多様な茶の湯が展開し、それぞれが門弟を抱えることで、現在まで続く茶道流派が成立していった。それぞれの流派を率いる一部の家は「家元」と呼ばれるようになり、また、精神修養を目的とする茶の湯として、次第に「茶道」の呼称も用いられるようになる。

・「茶道」の成熟

江戸時代中期を迎えると、各地方都市の発達に伴い、富裕な町人たちが茶道の主要な担い手となっていく。18 世紀後半には、表千家の高弟である川上不白が江戸に下向し、千家流の大流行を生み出していた。特にこの時期の千家流は、「七事式」と呼ばれる大人数で楽しみながら行う稽古方式を工夫することで、茶道人口の増加に対応することに成功している。

19 世紀初頭には、松江藩主の松平治郷（不昧）が名物道具の蒐集に力を注ぎ、大規模な名物集『古今名物類聚』を編纂させている。名物道具の価値観を再編成させた同書は、版本として刊行されて、後世まで大きな影響を与えることとなる。また、幕末の大老として知られる井伊直弼（宗観）も、石州流の茶人としてその理論整備につとめ、その茶道論は著作『茶湯一会集』によって集大成される。同書で確立された「一期一会」「独座観念」といった概念は、近世における茶道理論の到達点であり、現代に至るまで茶道界で重んじる規範となっている。

１－４　近代の茶道

・茶人たちの近代

明治維新による社会制度の変革は、江戸の幕藩体制に適応していた茶道界を大きく変貌させることになる。各地の大名家に仕えていた茶道流派の家元などの場合は、禄を失って経済的な苦境に立たされた。茶道家元たちは、主体的に近代社会に適応するための様々な改革を模索す

るが、その一つとして、椅子式の茶会「立礼式」の創案が挙げられる。この立礼式は、日本を訪れた外国人への対応を想定したものと考えられており、裏千家で考案した「点茶盤」は明治5年（1872）の京都博覧会で使用されたことが確認される（注：「点茶」は抹茶を点てることの意）。以降、立礼卓は茶会の会場を茶室の外へ拡張する手段となり、現在でも屋外やデパートなど畳のない場所に仮設の茶席を設ける際などに用いられている。

また、明治11年（1878）には藪内家が北野天満宮で「献茶式」を行っている。献茶式は寺社で家元かそれに準じる宗匠が、神仏に茶を点てて捧げる儀式のことである。それまでの茶会が少人数で行われていたのに対し、献茶式は大勢の門弟が集まり、点前の空間を共有できる点に大きな特徴があった。こうした大規模参加型のイベントは、流派組織の拡張の重要な足がかりとなっていく。

・学校教育との結びつき

明治初頭の大きな変化としては、茶道が学校教育と結びついた点が挙げられる。その端緒を開いたのが跡見花蹊であり、明治 8 年（1875）に跡見学校（現学校法人跡見学園）を開校し、その教育カリキュラムの一部として「点茶」を取り入れた。これは女性にお辞儀の仕方から畳の歩き方に至る礼法を教育するに当たり、茶道を通じて身に付けさせようとしたことがうかがわれる。京都でも明治5年に女紅場（現京都府立鴨沂高等学校）が開校し、何年からかは未詳であるが、裏千家家元夫人の千猶鹿子（真精院）が点茶の指導を行っている。こうした女子教育との結びつきにより、それまで男性中心であった茶道が、次第に女性のたしなみとして認識されるようになっていった。

さらに、日清戦争、日露戦争の両戦争は数多くの戦災寡婦を生じさせた。女性が単身で生計を立てようとする中で、茶道の師範は主要な選択肢の一つとなった。

・数寄者の活躍

維新以降の茶道界を再活性化させた重要な担い手が、新興の財界人たちであった。彼らは、旧大名家や寺社から流出した名物茶道具を蒐集しながら豪華な茶会を催したことから、現代では彼らを特に「近代数寄者」と呼んでいる。

その中で絶大な存在感を持っていたのが、三井物産創業者である益田孝（鈍翁）である。益田は明治29年（1896）に弘法大師の名筆を展観する「大師会」を催すが、この会は財界人の社交場としての側面を帯び、現在まで続く「大寄せ茶会」の形式を確立したと位置付けられる。また、大師会では仏教美術や絵巻物などが茶道具に転用され、茶会が美術展覧会の様相を帯びていくこととなる。

さらに、益田の茶友であった野崎廣太（幻庵）や高橋義雄（箒庵）は、新聞誌上に数寄者の茶会を記事として掲載しており、上流階級のステータスとしての茶を社会へ認識させる役割を担った。

・茶道と学問

茶道の近代化を考える上で重要なのは、それが近代教育を受けたインテリによってどう見られていたのかという点である。明治 39 年（1906）に書かれた夏目漱石『草枕』には、作法を守ることに固執した茶道への辛辣な評価が記されている。しかし、同年には、岡倉覚三（天心）が英語で“*The Book of Tea*”を刊行している。同書は昭和 4 年（1929）に岩波文庫から『茶の本』として翻訳刊行されるが、茶道の理論を、英語を介して近代的語彙へと再解釈することは、近代日本人が茶道を知的な教養として再認識する上で重要なステップとなった。

また、大正期から昭和戦前期にかけて、歴史学の桑田忠親、陶磁器研究の奥田誠一、茶室研究の堀口捨己などが登場し、学術的な視点から茶道へ言及している。彼らのアプローチは、昭和 10 年（1935）に刊行を開始する創元社『茶道全集』において統合され、領域を横断した新しい研究領域としての「茶道史」を誕生させている。

・戦後の茶道ブームについて

益田孝をはじめとする近代数寄者は、昭和 10 年代に相次いで逝去し、第二次世界大戦後の財閥解体によって、その影響力を大きく低減させる結果となった。逆に、高度経済成長期を背景に、千家を中心とする茶道流派は門弟を増大させ、家元が茶道界の中心となる時代が到来する。

特に、昭和戦後期には近代数寄者たちのコレクションが美術館へと移管されると、名品茶道具は茶席で使用されるよりも、美術品として鑑賞するものという認識が強くなる。また、出版業界も巨大化した茶道界を有望な市場として捉え、さまざまな茶道書籍を刊行している。この茶道人口の増加と美術館における茶道具の展示、そして、書籍の刊行は相互に影響し合い、社会に文化的・教養的な趣味として茶道を認知させる結果を生み出した。

＜参考＞

・神津朝夫『茶の湯の歴史（角川選書)』角川書店、平成 21 年
・永井晋『中世日本の茶と文化―生産・流通・消費をとおして（アジア遊学 252)』勉誠出版、令和 2 年

２節 「茶道」の概要

・茶事・茶会について

鎌倉時代に中国から日本へともたらされた抹茶を飲む習慣は、四百年の時間をかけて日本人の生活に合わせて変化を遂げ、現在は主に「茶道」と呼ばれながら、日本全国で多くの人間が参加する一つの文化を形成している。この茶道の世界で行われている活動は、主に日常的な修練である「稽古」と、特別な折に客を招いて行われる「茶事（茶会)」の二つに分けられる。

まず、「茶事（茶会)」についてであるが、現在の茶道界では、懐石料理を伴う本式の集まりを「茶事」、懐石が伴わない集まりを「茶会」と呼び分けることが多い。茶事は約 4 時間をかけて行われるのが基本で、客も 5 名程度の小規模な集まりである。茶事は亭主が客に招待状を出すところから始まり、終わった後に客が礼状を出すまで、細かな約束事が多い催しである。茶事の形式は 16 世紀に概ね定まっており、代表的な炉の正午茶事（しょうごのちゃじ）の場合は、以下の手順で行われる。

・席入り、挨拶
・初炭（しょずみ）点前
・懐石
・中立（なかだち）
・濃茶点前
・後炭（ごずみ）点前
・薄茶点前
・挨拶

中心となるのは、あくまでも濃茶である。濃茶のために炭火を起こして湯を沸かし（初炭点前)、湯の沸く合間に軽食を出し（懐石)、席中を改めるために客に一度退出を願い（中立)、再度入室した室内では厳粛に濃茶が出される。濃茶の後には一度炭を直し（後炭点前)、薄茶を点てて、再度の挨拶を経て客が退席するのを見送るという構成である。

茶事の原型は、中世社会における来客への応接である。特に格式の高い「真の茶事」は台子点前や懐石の形式において、室町時代のものを再現しようとする要素が強い。しかし、通常の茶事であっても、毛筆の書状のやり取りや漆器の膳椀の準備など現今の日本人の生活との乖離が大きく、簡単に催せるものではない。その労力も相まって、現在では茶事が催される頻度は減ってきている。

茶事の目的とは亭主（ホスト）が客（ゲスト）を応接し、もてなすことにあり、一服のお茶を通じて亭主と客との心の交流をより豊かに深める。来客のために選りすぐった道具を用いるのも、もてなしの一部である。亭主の側では客の嗜好や時節に合わせた趣向を凝らすことが重要となり、客の側でも亭主の心入れを理解する対応が求められる。このやり取りが成功した際の、亭主と客の心が合致した状態は「一座建立（いちざこんりゅう）」などと呼ばれており、茶道における目指すべき到達点と位置付けられている。

この茶事の一部を取り出し、抹茶のみを供する形式を、現在では一般に茶会と呼んでいる。濃茶席を中心に薄茶席が複数伴う茶会もあるが、全体的には薄茶席のみのものが多い。これは、現代において、会場や時間等の制約がある中で運営されるためであると考えられる。本式の茶事は参加者が制限されるが、茶会は一席に 20 名程度の客を入れる大規模な催しとなるケースが多い。一日に数百人を入れる茶会も珍しくなく、このような大規模イベント化したものを特に「大寄せ茶会」と呼んでいる。茶会は、毎週全国各地で催されており、事前の招待状も必要ない。多くの場合、開催当日にその場で入場券を購入し、私服で参加できる比較的、気軽なものが多く、大多数の人々にとって、最初に茶道に触れるのはこうした茶会となる。また、こうした茶会は客の人数が多いため、運営を個人で行うことは難しく、多くの場合は地域、地区などの流派（社中）が協力して組織的に行っている。

・茶道における稽古

基本的に茶道の稽古は、各流派に所属する指導者が全国に持つ稽古場で行っている。現在でも指導者の自宅が用いられるケースが多いが、都市部の住環境の変化に伴って和室が減少した結果、近年では公民館や貸し茶室で行われることも多くなってきている。通常は月に 1～3 回程度の頻度で行われ、月ごとに定額の月謝を熨斗袋で納めるほか、正月に年賀、7 月に中元、年の瀬に歳暮として金封を渡す習慣も根強く残っている。

茶道における稽古は、正座の仕方、お辞儀の仕方、畳の歩き方、菓子のいただき方に至る、広範な内容を含んだものである。その内容は、床の間の飾り付け、正装としての着物の選び方、更には熨斗袋や手紙の書き方までを包括しており、近世以前の日本人の生活文化を保存する上で、極めて重要な位置を占めている。

稽古の中でも重要な目標となるのが、茶を点てる動作を意味する「点前」の習得である。点前は主に濃茶を客にふるまう「濃茶点前」、薄茶をふるまう「薄茶点前」、また、初座に炭火を起こす「初炭点前」、濃茶の後に炭を直す「後炭点前」の四種に大別され、全て茶事の一部を抜き出した形となっている。この四つの点前も、通常の「平点前」を基本としながら、別に道具を飾るための棚を用いた「棚物点前」がある。これに加えて、茶室の形状、棚の種類によって点前が変わるため、点前の種類だけでも膨大な種類に上る。

さらに、上位の点前として、唐物茶入を用いる「唐物」、天目を台にのせて用いる「台天目」、名物茶入を盆にのせて用いる「盆点」、二種の濃茶を客にもてなす「茶通箱」といった点前があり、これらは一種の秘伝として、それぞれを習うための許状の申請が必要となる。そして、これらを習得することにより、最も格式の高い「台子」を用いた点前の稽古が許される。台子にも何種類かの点前があり、流派によって異なるが基本的に最上位のものは家元と特別な高弟のみに許される。

・稽古を通じて習得する型（所作）の位置付け

点前を稽古する目的とは、原義的には茶事を行えるようになることである。稽古で習得すべき各種の点前の「型」とは、茶を点てる、あるいは炭をつぐために必要な動作を洗練させたものとなっている。こうした点前の成立過程については不明な点も多いが、16 世紀の段階で既にかなり成熟していたことが諸資料から見てとれる。茶道界では最も古様を伝えているのが「真台子」の点前であると位置付けているが、極めて複雑な型を持ち、これが初期段階からあったかどうかについては研究者によって見解が分かれる。現行の茶道の点前の型の大部分は、16 世紀に堺や奈良で行われていたものを原型とし、江戸時代を通じて流派ごとに変更が加えられたものと考えられる。共通する部分は多いものの、現在では流派によってかなりの相違が確認される。

また点前は一度習得すればよいというものではなく、稽古場では同じ点前の稽古が繰り返し続けられる。このように稽古を続けることで、用いない手足を動かさないよう神経を全身へと行き届かせることに始まり、正座した際の身体の重心の安定、深い呼吸、茶室全体を把握する集中力などが養われる。やがてその積み重ねは各茶人の個性へと昇華され、そこから茶席の雰囲気を作り出す技量は、時として名人芸のように認知されるに至る。

また、茶と禅宗の結び付きが強調されるように、稽古そのものを一種の精神修養として目的化する態度も生まれている。すなわち、点前を無意識に行えるように訓練した上で、半自動的に行われる点前を通じて、自己の存在を忘却する瞑想状態をつくりだそうというものである。特に近代以降は、学校教育と結び付いた結果、点前の修練を続けることに重点が置かれる傾向が強くなっている。さらに、日本人の生活の変化に伴い、茶事を行うことが困難となってきたことも、稽古の比重が大きくなった重要な要因と考えられる。このため、現在の日本社会では、茶道は教室に通って稽古そのものを目的とした「稽古事」であると捉えることが一般的となってきている。

・茶道流派と家元

茶道には各種の流派があり、それぞれの流派は独自に「家元」を頂点とした組織をつくり、活動を展開している。

家元とは、茶道の流派の最高権威伝承者又はその家系を指しており、流派の統率、点前や稽古、茶会の開催等活動内容の掌握と規範性の保持を行っている。そして、家元を特徴付ける重要な業務が、流派の持つ各種の点前に関連した許状（免状）・資格の発行、更には師範の養成等である。

流派によって差異はあるが、「許状（免状）」とは、点前の作法をはじめとした知識や秘伝について学ぶこと（相伝）を家元が許可した証書であり、各段階の稽古を履修し終えて指導者として活動することを許可する際に発行されるのが講師や教授といった「資格」となる。

相伝に関する権利を家元以外の人間が得ることは特殊なケースを除いてはほとんどなく、稽古の段階を進めるためには家元の許可が必要となる。この相伝に関する仕組みは家元の権能であり、家元を頂点とする流派組織を確立させる基盤となっている。

・茶道流派の種類と歴史

茶道の流派を大別すると、千利休以前の系統を残すとされる古市古流（ふるいちこりゅう）や肥後古流、また、利休の系統を直接に引く三千家、江戸千家といった「千家流」、そして、利休以降に武家社会の要請に合わせて変化を遂げた藪内流、遠州流、宗箇流（そうこりゅう）、石州流などの「武家茶道」の三種に分けられると考えられる。

江戸時代中期までは、茶道の知識や秘伝についての相伝は、最終的な許状の発行権を含めた全ての権限を弟子に与える免許皆伝制が取られていた。自立するだけの技量を認められた弟子は「免許皆伝」となり、自分の弟子に相伝を行う権利を持つことになるので、皆伝を受けた弟子は次々と分派を繰り返していく。表千家から独立した流派としては宗偏流（そうへんりゅう）や庸軒流（ようけんりゅう）が挙げられ、特に片桐石州を祖とする石州流は分派が多く、伊佐派、宗猿派（そうえんは）などの多数の支流を生み出している。このように支流が分派していく家元の在り方を、西山松之助は「完全相伝性」と名付けている。

江戸時代中期に入ると、表千家などでは相伝に関する最終的な権限を後嗣のみに継承させる仕組みをつくり、先の「完全相伝性」に対して「不完全相伝性」と名付けられている。不完全相伝性は多くの権限を後嗣にのみ継承させることで家元の権威を高めると共に、分派を止めることで流派組織の拡大が進んでいく。

この茶道流派の拡大に伴い、中間教授者層が整備される。それまで家元自らが指導していた地方の弟子を中間教授者層が指導するという組織化が図られ、同時に職業としての茶道師範も成立していった。

・茶道流派の活動

現在の日本で個人が茶道の活動を行う場合、自宅や職場に近い茶道教室や、学校でのクラブ活動、カルチャーセンターなどで行われている稽古に参加した時点で、その流派の門弟となり、流派を運営する組織の一員として登録されるのが一般的である。

各種の稽古は、基本的には一人の指導者を中心に弟子たちを集める形で行われており、こうした組織を家元制度の中では「社中」と呼ぶ。社中の弟子たちは、指導者を通して家元から許状を得ることで家元と間接的につながり、各流派で伝承されている点前や作法等の保存と継承は社中単位で行われている。

各社中は流派の方針に則った稽古を月数回行うほか、地域、地区等の単位で行われる研究会や大会への参加等を通じて実践や知識、情報の交換を行い、流派の組織運営に参加している。また、各流派はそれぞれの社中を対象とした会報誌の発行や、茶道に関する出版活動等も行っているケースが多く、メディアを通じて組織の統制が図られている。

茶道指導者の育成は、家元からの許状（免状）と資格の発行制度に基づき、社中単位で行われる。資格取得の流れは各流派で少しずつ異なるが、基本的には各段階の稽古の履修を認める許状の取得を続けていき、一定の技量に達したと認められると、家元への推薦を経て資格を取得することとなる。こうして指導者となり、稽古場を開いて自分の弟子を持つようになれば、そこに新たな社中が発生し、収益を得ることが可能となる。

・茶道で用いられる道具及び茶室

茶道という文化を特色付けるのが、茶会を催すために必要となる様々な道具である。主なところでは床の間を飾る掛軸・花入からはじまり、濃茶と薄茶の点前に用いる茶入・釜・茶碗・茶杓、茶葉を詰めておく茶壺、炭点前に用いる炭斗・香合・火箸・灰器などがある。茶事（茶会）とは、茶人が常日頃から蒐集した道具を、趣向に合せてどのように取り合わせるか工夫するという、一種の自己表現という側面を持っている。例えば寒い時期に口の広い釜を用いて湯気を見せる、あるいは追悼の茶会であれば経筒を花入にする、といった具合である。

この他、懐石を伴う茶事の場合は、膳椀、向付、煮物椀、飯器、湯斗などの懐石道具が加わる。これら客に見せる道具を「表道具」と呼ぶが、さらに水屋で用いる「水屋道具」があるため、茶会のために必要となる道具は膨大な数に上る。

また、こうした茶道具は、その種別においても多彩である。釜は鋳物、茶入・茶碗などは陶磁器であり、薄茶器・膳椀は漆器、棚類は指物、仕覆や帛紗は染織と、日本のほぼ全ての工芸ジャンルを網羅する。特に、茶道具に用いる道具を専門に製作する職人の家柄があり、流派に出入りしている場合は「職方」などと呼ばれる。しかし、特に陶磁器や漆器の市場では茶道具は高級品として扱われ、一部には個性的な創作物として芸術作品であると認知されるものもある。このため、職方以外であっても、茶道具の製作を行っている工芸家は多い。さらに、茶席では着物が正装として扱われるため、織物産業も茶道界と密接に結びついている。

また、茶事（茶会）を行うための特別な建物として「茶室」があり、この茶室の意匠を取り入れた住宅建築などを含めて「数寄屋建築」と呼ぶ場合もある。茶室には様々な約束事があり、その設計は専門の建築家、あるいは茶人によって行われる。大工や左官においても特殊な技術が求められるほか、茶室（数寄屋建築）をつくるための特殊な建材を扱う銘木店があり、特殊な市場をつくっている。

さらに、茶会に用いる菓子、茶事で供する懐石（会席）を専門とする菓子屋、仕出し屋といった飲食業も、茶道界に密着した業種に位置付けられる。

このように、現今の日本の伝統工芸、また伝統建築の世界において、茶道の需要に支えられている比重は無視できないものとなっており、茶道が総合芸術であると形容される所以伴っていると考えられる。

＜参考＞

・西山松之助『家元の研究』校倉書房、昭和 34 年

３節　現代における茶道の現状と社会的な位置付けについて

１章１節では、抹茶がどのように日本に伝来し、喫されるようになったか、また、茶道が礼儀作法やたしなみとして、明治以降、学校教育の中にも位置付けられてきたこと、近代数寄者の登場以降、社会に文化的･教養的な趣味として茶道を認知させることになったことなどを整理した。

この節では、茶道が生活の中での趣味・教養の文化として、どのような状況にあるかについて確認する。

３－１　教養・趣味としての茶道

茶道を趣味や娯楽として行う者（茶道指導者や、学校の部活動などで茶道を行う者を除く）の人数については、昭和 51 年（1976）から 5 年毎に実施されている「社会生活基本調査」からその推移を読み取ることができる。（図１、図２）

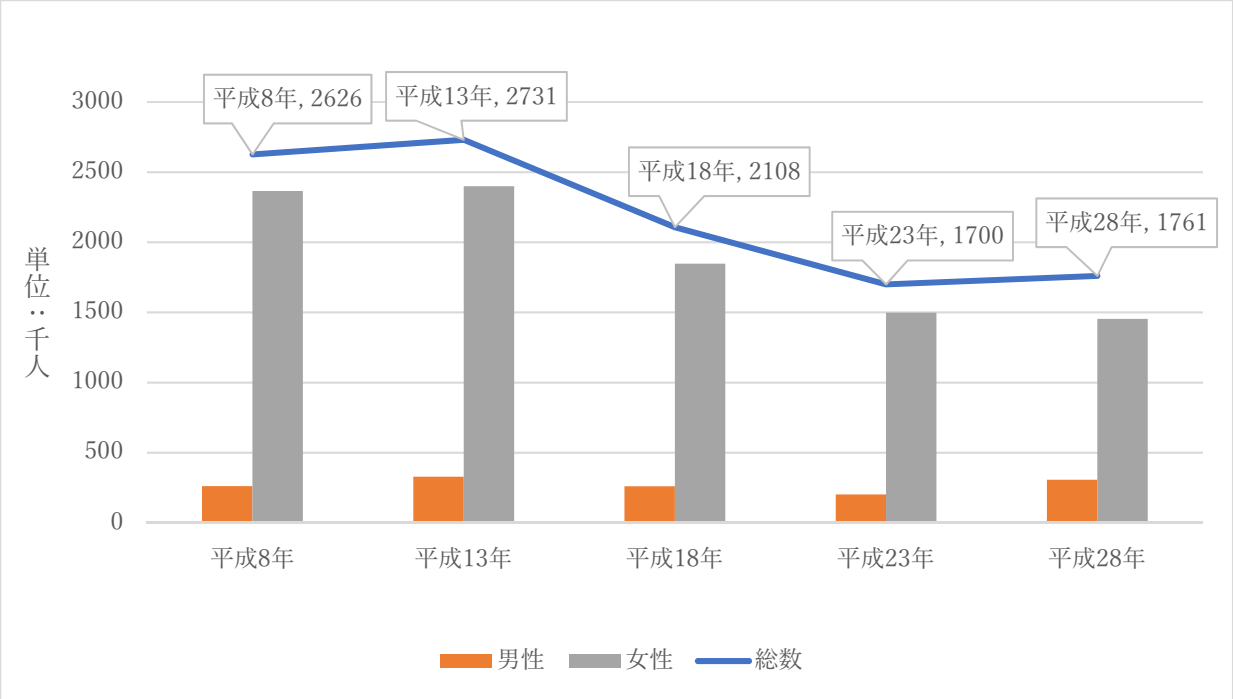


図１　茶道を趣味とする人の行動者数（総数及び男女別）の変化

出典：平成８年から平成 28 年の「社会生活基本調査」（総務省統計局）

（URL: https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200533&result_page=1）

を参照し作成した

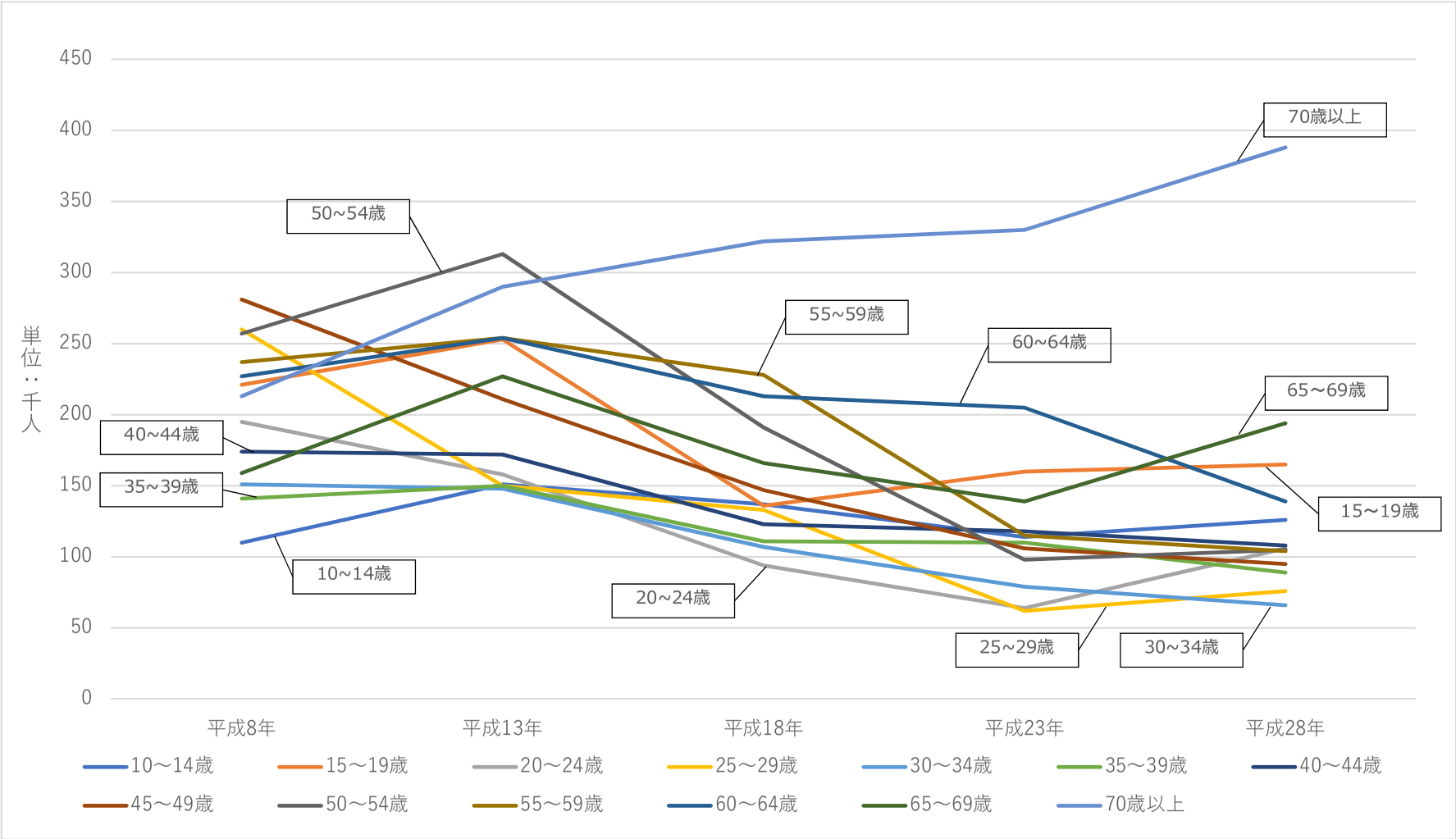


図２　茶道を趣味とする人の行動者数（年齢別）の変化

出典：平成８年から平成 28 年の「社会生活基本調査」（総務省統計局）

（URL: https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200533&result_page=1）を参照し作成した

図１によれば、平成 28 年（2016）の調査時点では約 176 万人が茶道を行っていることが確認できる。また、男性と女性で茶道を趣味・娯楽とする者の人口に大きな開きがあることが分かる。さらに、平成 8（1996）年から平成 28 年に至る 20 年間の推移の中で、平成 8 年から平成 13 年（2001）、平成23 年（2011）から平成 28 年には、全体の総数は一時的に増加の傾向を見せているが、直近平成 28 年の人数を平成 8 年当時に比べると約 3 割の減少となっていることが分かる。

男性と女性の人口推移をそれぞれ別に見ると、男女ともに平成 8 年から平成 13 年にかけて増加している点は共通しているが、女性人口は、平成 13 年から平成 28 年まで逓減の一途を辿っているのに対して、男性人口は平成 23 年から平成 28 年にかけて増加に転じていることが見て取れる。

次に、図２の年齢別の行動者数を見ると、平成 8 年から平成 28 年の 20 年間、70 歳以上の年齢層において唯一行動者数が延び続けているほかは、全体的に下降傾向にはあるが、平成 23 年から平成 28 年には 10~14 歳、15～19 歳、20～24 歳、25～29 歳、50～54 歳、65~69 歳の年齢層において茶道を趣味・娯楽とする者の人数がわずかに増加している。この要因は、若年層において学校教育や課外活動などで茶道に親しむ機会が増加したこと、高年齢層においては人生 100 年時代の到来が視野に入ってきたともいうべき時代背景の中で、趣味や習い事として携わる機会が増加したことが考えられる。

このように、茶道を趣味・娯楽とする者が全体として減少傾向にあること、また、65 歳以上の高齢者層が茶道愛好者人口の多くを占めているという結果については、平成 27 年に文化庁が実施した茶道の流派団体に対するアンケート調査（平成 27 年度「伝統的生活文化実態調査事業報告書」）において、会員の高齢化や会員数の減少を現状の問題点として挙げる団体が多かったこととも一致する。

併せて、経済産業省大臣官房調査統計グループが実施している「特定サービス産業実態調査報告書」（教養・技能教授業編）を見てみると、直近の令和元年の結果のうち、「生花・茶道」の教養・技能教授業務の事業従事者数が、平成 21 年の結果に比して大幅な減少を見せていることが分かる（表１、表２）。このことから、茶道を趣味・娯楽とする者の減少が、教養・技能として教授される機会の減少へとつながっていることが見て取れ、茶道教授を生業とする茶道指導者の生活にも大きな影響を与えていることとなる。

表１　生花・茶道教室の事業所数の変化

	平成21年	平成22年	平成25年	平成26年	平成27年	平成29年	平成30年
事業所数	6935	6070	5099	4381	4615	3698	3534

出典：平成 21、22、25、26、27、29、30 年の「特定サービス産業実態調査」（経済産業省大臣官房調査統計グループ）（URL:https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&toukei=00550040&tstat=000001023224）を参照し作成した

表２　生花・茶道教室の従業者数の変化

	平成21年	平成22年	平成25年	平成26年	平成27年	平成29年	平成30年
教養・技能教授業務の事業従事者数（人）	8908	8475	6789	5553	6883	7006	5000

出典：平成 21、22、25、26、27、29、30 年の「特定サービス産業実態調査」（経済産業省大臣官房調査統計グループ）（URL:https://www.e-stat.go.jp/stat-search/database?page=1&toukei=00550040&tstat=000001023224）を参照し作成した

以上のように、茶道は、総務省統計局の調査では趣味・娯楽の一つとして、又、経済産業省の調査において「教養・技能教授」の一つとしてその状況が把握されている。このような背景には、テレビ放送において教養・趣味講座が大きな役割を果たしてきたことが考えられる。

NHK では、女性向け実用番組（NHK アーカイブスによれば、「午後の家庭婦人向け教養実用番組」）として、『婦人百科』が昭和 34 年（1959）より放送開始され、放送開始当初から「お茶」が扱われ、昭和 39 年（1964）には、「初歩の茶道」というタイトル名で 30 分番組が全 13 回にわたって放送されている。この「初歩の茶道」においては、茶席の入り方や、お菓子の食べ方、薄茶点前などが扱われていた。その後も、昭和 42 年（1967）に「茶の湯」としても放送が重ねられ、平成 5 年（1993）の放送終了まで、様々な流派から講師を迎えながら継続的に番組提供された。当時は時代背景もあり、「婦人」向けと銘打っていたが、平成 2 年（1990）から NHK 教育で放映が開始された『趣味百科』以降も、男女関係なく「趣味」という分類の下で、茶道がしばしば取り上げられている。これらから、茶道が教養や趣味として国民生活の中に根ざしていることが分かる。

このように、国民生活の中に根ざしてきた茶道については、その愛好者の人口減少と、高齢化、指導機会の減少等により、教授業としても縮小を余儀なくされていることが分かっている。

＜参考＞

・「社会生活基本調査」（総務省統計局）
・「特定サービス産業実態調査」（経済産業省大臣官房調査統計グループ）
・NHK アーカイブス（URL：https://www.nhk.or.jp/archives/　閲覧日：令和 3 年 3 月 1 日）

３－２　国民意識調査について

３－２－１　調査の概要

３－１では、現在も暮らしの中で茶道が趣味や教養としての位置付けを持ちながらも、その人口が減少していることが明らかとなったが、そのような現代において、国民が茶道に対してどのような意識を持っているかを知り、茶道振興のきっかけを探るために、茶道の経験の有無、興味を持ったきっかけ、茶道に持つイメージや習うに当たってのハードル等について、次のとおりインターネット調査を実施した（詳細は参考資料 80 ページ～85 ページ参照）。

■　調査設計

<table>
<tr><td>調査方法</td><td>インターネット調査（調査業者：株式会社クロス・マーケティング）</td></tr>
<tr><td>調査地域</td><td>全国</td></tr>
<tr><td>調査対象者</td><td>12 歳以上の男女（12 から 14 歳は親による代理回答）</td></tr>
<tr><td>サンプル数</td><td>1,500 サンプル
<table>
<tr><td></td><td>12～
14 歳</td><td>15～
19 歳</td><td>20 代</td><td>30 代</td><td>40 代</td><td>50 代</td><td>60 代</td><td>70 代
以上</td></tr>
<tr><td>男性</td><td>50</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td></tr>
<tr><td>女性</td><td>50</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td><td>100</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>調査期間</td><td>2020 年 10 月 1 日（木）～ 10 月 5 日（月）</td></tr>
<tr><td>設問文</td><td>Ｑ１：過去の茶道経験、経験内容
Ｑ２：現在の茶道経験、活動内容
Ｑ３：茶道を辞めている理由
Ｑ４：茶道を始めたきっかけ
Ｑ５：茶道の魅力・面白さ
Ｑ６：茶道をすることで得られるもの
Ｑ７：茶道への興味関心を持ったきっかけ
Ｑ８：茶道をやってみたいと思う理由
Ｑ９：茶道意欲がある人のハードル
Q10：茶道に対する印象
Q11：茶道を辞めた人が当初持っていた興味関心
Q12：茶道が現在まで引き継がれている理由</td></tr>
</table>

３－２－２　調査結果概要

調査結果は以下のとおりである。

Ｑ１　過去の茶道経験、経験内容【全調査対象者への設問】

茶道の経験機会としては、「これまでに経験したことがない」が 66.3%と最も多かった（以降では「茶道未経験者」という）。茶道未経験者は 30 代から 40 代が最も割合が多い。

一方、茶道を経験したことがある者（以降では「茶道経験者」という）の経験機会としては、「茶道教室で経験した」が 9.5%、「学校の授業で経験した」が 8.7%、「文化団体や地域のイベント等で経験した」が 6.6%、「家族や親族がしていたので経験した」が 5.7%、「学校の部活動で経験した」が 5.1%、「カルチャーセンターで経験した」が 2.5%、「大学・専門学校の講義で経験した」が 1.1%、「通信教育で経験した」が 0.9%、「大学・専門学校のサークルで経験した」が 0.8%、「その他」が 1.8%、となっている。

茶道の経験機会の全ての項目において、女性の割合が男性の割合を上回る、もしくは並んでおり、特に「茶道教室での経験」は女性の経験割合が高くなっている。

Ｑ２　現在の茶道経験、活動内容【茶道経験者への設問】

茶道経験者の現在の茶道活動について、全体の 88.5%が「現在活動していない」と回答している。また、現在活動している者（16.6%）は、20 代が最も多く、「茶道教室に通っている」や「カルチャーセンターに通っている」との回答が多い。

Ｑ３　茶道を辞めている理由【茶道経験者で現在茶道活動をしていない人への設問】

現在茶道活動を辞めている理由として、「興味関心が無くなったから」との回答が 26.2%と最も多い。次いで「環境が変わり、茶道を続けられらなくなったから」、「学校を卒業したため、する機会が無くなったから」がともに 19.9%となっている。また、年代別で見ると、70 代以上では「環境が変わり、茶道を続けられらなくなったから」の割合が特に高くなっている。

Ｑ４　茶道を始めたきっかけ【茶道経験者(興味関心がなくなった人、あるいは、学校を卒業し現在茶道活動をしていない人を除く)への設問】

茶道を始めたきっかけとして「お茶（抹茶）が好きだから」との回答が 39.5%と最も多く、次いで「家族や親族、友人から勧められて」、「茶会や茶道のイベント等に参加して興味関心を持ったから」、「興味はないが、家族や親族、友人から勧められたから」となっている。また、年代別に見ると、「お茶（抹茶）が好きだから」の割合は、20 代、40 代で高くなっている。

Ｑ５　茶道の魅力・面白さ【茶道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在茶道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】

茶道のどのようなところに魅力や面白さを感じているかについては、「お茶（抹茶）を飲んで楽しめる」が 55.1%と最も多く、次いで「集中力を高める、心を落ち着けることができる」、「伝統的な日本文化への理解を深めることができる」の順となっている。

Ｑ６　茶道をすることで得られるもの【茶道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在茶道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】

茶道をすることで得られるものの回答については、「礼儀作法などが身についた」が最も高く、次いで「伝統的な日本文化への興味関心が深まった」、「普段の集中力や心の落ち着きが高まった」の順となっている。

Q７　茶道への興味関心を持ったきっかけ【茶道未経験者あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心がある人への設問】

茶道に興味関心を持ったきっかけとしては、「お茶（抹茶）が好きだから」が 62.8%と最も多く、次いで「雑誌や漫画、テレビ等で」、「家族や親族、友人から勧められて」、「学校の授業で」、「茶会や茶道のイベント等に参加して」興味関心を持つに至っている。

Q８　茶道をやってみたいと思う理由【茶道未経験者あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心がある人への設問】

茶道をやってみたい理由について、「お茶（抹茶）を自分で点てられるようになりたい」との回答が 56.5%と最も多く、次いで「集中力を高めたい、心を落ち着けたい」、「わびさび等の美意識を学びたい」の順となっている。

Q９　茶道活動に意欲がある人のハードル【茶道未経験者あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心があり、条件等が整えば茶道活動をしたい人への設問】

茶道活動を始めたい人のハードルについての設問は、「誰でも気軽に参加できる体験教室・イベントがあれば」との回答が 57.9%と最も高く、次に、「経済的に余裕が出来たら」「行きやすい時間帯で通える教室があれば」、「交通的に通いやすい教室があれば」の順となっている。解決が難しい経済面や時間面を要因に挙げる回答が多いほか、機会(場)が提供されればやりたいという人もかなり多いことが分かった。

なお、年代別では、「誰でも気軽に参加できる体験教室・イベントがあれば」が、10 代、30 代で高くなっている。

Q10　茶道に対する印象【茶道未経験者で茶道に興味関心がない、あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心がない人への設問】

茶道に対する印象は、「礼儀や作法に厳しそう」との回答が 55.0%と最も多い。次に、「普段の生活に必要を感じない」や「教室の月謝や道具等にお金がかかりそう」を選んでいる回答の順になっている。

年代別では、15-19 歳で「先生が厳しそう」、「技術的に難しそう」といった項目が高くなっている。また、60 代以上で「礼儀や作法等に厳しそう」、「普段の生活に必要性を感じない」といった項目が高くなっている。

Q11　茶道を辞めた人が当初持っていた興味関心【茶道経験者で現在茶道活動をしておらず、茶道に興味関心がなくなった人への設問】

茶道に興味関心がなくなった人が、当初茶道に持っていた興味関心としては「伝統的な日本文化への理解を深めることができる」との回答が 41.9%と最も高く、次いで「お茶（抹茶）を自分で点てられるようになる」が 31.6%、「集中力を高める、心を落ち着けることができる」が 23.1%となっている。

Q12　茶道が現在まで引き継がれている理由【全調査対象者への設問】

茶道が現在まで引き継がれている理由については、「日本の様々な伝統文化に深く関わり続けている」が 44.6%、「日本独自の芸術性を持っている」が 42.7%と高く、次いで「日本文化のもつ精神性や礼儀作法を追及するものである」の順となっている。

３－２－３　調査結果のまとめ

国民意識調査から、茶道経験がない人が 7 割近く存在し、経験したことがある人の中でも 9 割近くの人が「現在は活動していない」状況で、継続的に茶道を実践する人が限られていることが分かる。茶道を辞めている理由として、「学業・仕事が忙しくなったから」、「家事や介護などで時間が取れなくなったから」、「経済的な余裕が無くなったから」、「環境が変わり茶道を続けられなくなったから」など合わせて 42.7%の人が環境の変化やそれによる時間や場所の制約があることを挙げている。

茶道を始めたきっかけは「お茶（抹茶）が好きだから」が圧倒的に高い割合を占め、また、茶道の魅力・面白さは「お茶（抹茶）を飲んで楽しめること」が多く選択されている。加えて、茶道に興味を持ったきっかけとしては「お茶（抹茶）が好きだから」が 62.8%、茶道をやってみたいと思う理由として「お茶（抹茶）を自分で点てられるようになりたい」が 56.5%を占めており、お茶（抹茶）の美味しさそのものに訴求力があることが分かる。さらに、「集中力を高める、心を落ち着けることができること」を魅力として感じる割合も高く、「わびさび等の美意識を学びたい」など、茶道の精神性や芸術性に魅力を感じていることも分かった。

茶道に興味はあっても、実際に体験するには至っていない人にとって「誰にでも気軽に参加できる体験教室・イベントがあれば」など、外的な要因に起因することが多く、茶道を辞めている理由と近いことが分かる。茶道を中断している人や未経験者が茶道を始めるに当たっては、経済面や時間面等が大きなハードルとなっているが、機会が適切に提供されることで茶道を始めるきっかけになる可能性も見えてきた。その場合、行きやすい時間帯や交通に便利な場所、近所にあるといった利便性の確保が重要である。また、オンラインでの受講についても、若者世代では需要がある。さらに、若者世代では、先生が厳しそう、技術的に難しそうなどのイメージを持っているため、その心理的ハードルを下げることも茶道人口増加への取組としては必要である。

現在まで茶道が引き継がれている理由としては、「日本の様々な伝統文化に深く関わり続けているから」を選ぶ割合が高く、次いで「日本独自の芸術性を持っているから」、「日本文化のもつ精神性や礼儀作法を追及するものであるから」が選択されており、茶道が日本文化を総合的に包括する生活文化であることは認識されている。

３―３　現代における茶道の社会的位置付けについて

３―３－１　茶道や茶道家に対する国内的評価

国の顕彰制度として、叙勲や褒章等の栄典制度が存在する。また、文化庁が実施する文化庁長官表彰や地域文化功労者表彰といった顕彰制度もある。

栄典は、国家又は公共に対し功労のある者、社会の各分野における優れた行いのある者などを表彰するものである。茶道においては、叙勲は、家元や流派団体の理事等を務め、茶道の振興や普及に永年にわたり貢献してきた人々が受章しており（表 3 参照）、褒章は、芸術文化分野における優れた業績を挙げた者として認められた茶道流派の家元に対して紫綬褒章が授与されている（表 4 参照）。

文化功労者制度は、文化の向上発達に関し特に功績顕著な者に年金を支給し、これを顕彰するために昭和 26 年（1951）に設けられた制度であるが、平成元年（1989）に茶道家として千宗室

（茶道裏千家 15 代家元）（注）が表彰されている。同氏は文化の発達に対して勲績卓絶な者に対して授与される文化勲章を、平成 9 年（1997）に茶道界において初めて受章している。

また、平成元年から実施されている文化庁長官表彰は、文化活動の振興や文化発信に貢献した者を表彰しており、表 5 のように、茶道流派の家元だけではなく、茶釜や菊炭の製造を担う職人も表彰されている。さらに、地域の文化振興に貢献したことによって表彰される地域文化功労者表彰においても、各地域において活動する茶道家たちが多く表彰されている。

このように多くの茶道関係者が、茶道の振興や普及啓発に貢献し、また、茶道家としての業績が我が国あるいは地域の文化向上に寄与したとして評価されているなど、現代社会において、茶道は日本の文化芸術分野の一つとして確固たる位置付けを持っている。

注）※氏名及び主要経歴は受章当時の表記に従っている

表 3　叙勲受章者一覧

受章年	氏名	主要経歴	叙勲の種類
昭和 48 年（1973）	浜本　俊	茶道教授　茶道裏千家淡交会理事	勲五等瑞宝章
平成　3 年（1991）	塩月弥栄子	茶道家　(社)茶道裏千家淡交会理事	勲四等宝冠章
平成　4 年（1992）	千　　宗安	元(財)官休庵理事長	勲四等旭日小綬章
平成　5 年（1993）	小堀　宗慶	茶道家　現(財)小堀遠州顕彰会理事長	勲四等旭日小綬章
平成　6 年（1994）	千　　宗室	(財)今日庵理事長　裏千家家元	勲二等旭日重光章
平成　7 年（1995）	納屋　嘉治	元(財)国際茶道文化協会理事長	勲三等瑞宝章
平成　9 年（1997）	久田　宗也	(社)表千家同門会専務理事	勲五等双光旭日章
平成 10 年（1998）	櫻井　良子	(社)茶道裏千家淡交会理事	勲四等瑞宝章
平成 11 年（1999）	千　登三子	(財)国際茶道文化協会会長	勲三等瑞宝章
平成 28 年（2016）	川上　閑雪	茶道家　(一財)江戸千家茶道会理事長	旭日双光章
平成 30 年（2018）	藪内　紹智	茶道家　古儀茶道藪内流 13 代家元	旭日双光章
平成 30 年（2018）	千　　宗旦	茶道家　表千家 14 代家元	旭日小綬章
平成 30 年（2018）	日暮　宗豊	元裏千家メキシコ出張所長	旭日双光章
令和　元年（2019）	千　　宗守	茶道家　茶道武者小路千家第 14 代家元	旭日双光章
令和　2 年（2020）	松永　義明	茶道裏千家淡交会シドニー協会長	旭日双光章

※氏名及び主要経歴は受章当時の受章者名簿の表記に従っている

表 4　褒章受章者一覧

受章年	氏名	主要経歴	褒章の種類
昭和 32 年（1957）	千　　宗室	茶道家（裏千家 14 代家元）	紫綬褒章
昭和 38 年（1963）	千　　宗左	茶道家（表千家 13 代家元）	紫綬褒章
昭和 55 年（1980）	千　　宗室	茶道家　裏千家家元（裏千家 15 代家元）	紫綬褒章
平成 12 年（2000）	千　　宗左	茶道家（表千家 14 代家元）	紫綬褒章
令和　元年（2019）	千　　宗室	茶道家　茶道裏千家 16 代家元	紫綬褒章

※氏名及び主要経歴は受章当時の受章者名簿の表記に従い、括弧書きは補足として入れている。

表５　文化庁長官表彰一覧

表彰年	氏名	経歴
平成 27 年（2015）	川上　閑雪	茶道家　江戸千家宗家十世家元蓮華庵
平成 29 年（2017）	２代目　長野　垤志	釜師
平成 30 年（2018）	今西　勝	菊炭生産者
令和　2 年（2020）	小堀　宗実	遠州茶道宗家 13 世家元

※氏名及び主要経歴は表彰当時の被表彰者名簿の表記に従っている

３－３－２　茶道の国際的な評価と国際発信について

１　海外から捉えた茶道

外国人が茶道をどのように捉えていたのかという点については、外国語の文献から推察することが可能である。

既に 16 世紀の段階で、日本に訪れた宣教師の記録に、茶事についての記述が登場する。永禄 7 年（1564）にルイス・フロイスと共に訪日したルイス・デ・アルメイダの書簡には、茶事が極めて清潔かつ整然と行われていることについて記載がある。また天正 7 年（1579）に訪日したアレッサンドロ・ヴァリニャーノも、茶事についての記述を残している。茶事が招かれた客に対して歓待と愛情を示すものと説明している一方、抹茶の味は口に合わなかったという感想も記す。この他、ジョアン・ロドリゲスが記した“*Histoire Ecclésiastique Des Isles Et Royaumes Du Japon*”（邦題『日本教会史』）も、茶事について詳しく記した史料として知られている。

宣教師以外でも、日本を訪れた外国人が茶道や茶事について記述した文献は多くある。16 世紀後半に活動したオランダ人の探検家であるリンスホーテンによって記された“*Itinerario, voyage ofte Schipvaert*”（邦題『東方案内記』）では、茶事の様子に関して茶入や茶碗などを貴重なものとして扱っていることを取り上げ、珍しい文化として捉えている。また 17 世紀末に長崎出島のオランダ商館に勤務したドイツ人医師のエンゲルベルト・ケンペルも、著作“*The History of Japan*”（邦題『日本誌』）において茶事における作法や所作に注目し、欧州のマナーと近似するものと記述している。

このように、茶道や茶事については、抹茶という珍しい飲料を飲むこと、茶入などの茶道具を珍重していること、茶事や茶会での作法が厳格であることなどが強調され、当時の外国人にとって不思議な文化として映っていた事実が確認される。特に、宣教師の間では日本での布教活動において知っておくべき知識の一部と位置付けられていたものの、この段階において茶道が文化的に高く評価されていたとは言い難い。

近代には多くの外国人が日本に訪れるようになり、日本に関する外国の文献も増加してくる。例えば明治 6 年（1873）に英語教師として訪日したバジル・ホール・チェンバレンの“*Things Japanese*”（邦題『日本事物誌』）は、明治 23 年（1890）に出版されて以降 6 版を重ねており、日本に関する書籍として広く外国人に読まれていたものの一つである。茶道に関しては「Tea Ceremonies」という項を立項しており、当時欧州において茶道具を含めた日本の器物を熱心に

収集する人々がいたことを紹介している。そのようなコレクターの具体例としては、明治 10 年（1877）に訪日した動物学者のエドワード・シルベスター・モースが挙げられる。日本陶磁器の体系的蒐集を目指したモースは茶入、茶碗、水指といった茶道具を熱心に集め、その成果を“*Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery*”として公刊、コレクションそのものはボストン美術館に寄贈している。

また、チェンバレンは、器物的関心だけではなく、茶道に哲学的な意味を求めている外国人も当時から少なからずいた事実も記している。こちらの具体例としては、米国ポトマック河畔に桜の植樹事業を行ったエリザ・ルアマー・シドモアの例が挙げられる。シドモアは日本滞在時、東京の星岡茶寮において表千家の茶匠であった松田宗貞（まつだそうてい）に入門して学んでおり、その体験を著作“*Jinrikisha days in Japan*”（邦題『シドモア日本紀行』）に記している。シドモアの記述からは、日本独特の社交術として茶道に関心を持ち始め、やがて審美的かつ宗教的な修練であるという理解に至った状況がうかがわれる。

明治期にはこのような訪日外国人による紹介のみならず、日本人の側でも茶道について発信する事例が登場する。著名なものとしては、明治 33 年（1900）に出版された新渡戸稲造“*Bushido: The Soul of Japan*”（邦題『武士道』）があり、同書では第六章「Politeness（礼）」において茶道を取り上げ、日本における精神修養としての茶道を外国人に紹介する。さらに明治 39 年には、茶道を道家思想、仏教思想から理論化した岡倉覚三の“*The Book of Tea*”（邦題『茶の本』）が出版される。同書は茶道を「審美的宗教」であると要約し、また、茶人を美そのものになろうとする芸術家だと位置付ける。特に、新渡戸と岡倉の著作は多くの国で翻訳されており、茶道の文化的意義を多くの外国人に伝える役割を果たしたと位置付けられる。

また、日本文化研究者で『平家物語』の翻訳や紹介を行っている A・L・サドラーは、昭和 9 年（1934）に“*Cha-No-Yu: The Japanese Tea Ceremony*”を出版している。サドラーは訪日経験を持ち、同書では茶道の概要や茶道に関わる人物、流派や茶事についても詳述する。このような著作も広く世界に茶道についての情報を広めるきっかけとなったと考えられる。

以上のように、近代以降は外国人の茶道や茶道具への関心が質的に変化し、重要な日本文化として積極的関心を持つようになり、今日に至る高い評価が醸成され始めていた状況がうかがえる。

2　現代における茶道流派の国際的活動について

茶道の国際発信については、茶道流派それぞれの海外支部の展開や、茶道家の派遣などを通じて行われている場合のほか、国の施策の一環として行われている場合がある。以下、どのような場面、いかなる目的で茶道の国際発信が行われているかを確認していく。

茶道の国際発信の早い例としては、明治 38 年（1905）に岡倉覚三がボストン社交界の重鎮であったイザベラ・スチュワート・ガードナーに茶道具一式を贈った例、また昭和 10 年に王子製紙社長であった藤原銀次郎（暁雲（ぎょううん））がスウェーデンのストックホルムの国立民族学博物館構内に茶室「瑞暉亭（ずいきてい）」を寄贈した例などが知られる。いずれも欧米人の中に日本文化への高い関心を持つ知識人が登場し始めていたという背景を持つが、この段階では個人的な活動にとどまり、

組織的なものとはなっていなかった。

第二次世界大戦後には、茶道各流派が海外に支部や協会をつくるようになっていく。特に茶道流派の一つである裏千家は、戦後早くから海外への茶道普及を目的として多くの出張所や協会を設立し、海外発信に取り組んできた。昭和 26 年（1951）には当時若宗匠であった千宗興（現　千玄室）が茶道普及を目的としてアメリカ合衆国に渡航し、10 箇月をかけて普及と支部の設立について働きかけを行った。千宗興が 15 代家元として千宗室を襲名して以降は更に海外普及に重点を置くようになり、令和 3 年（2021）現在、(一社)裏千家淡交会では世界 37 箇国・地域 111 箇所に海外出張所・協会を置いている。

裏千家以外では、表千家が昭和 30 年（1955）に表千家同門会のハワイ支部を設立して以降、アメリカ合衆国に 4 支部を置いている。

また茶道流派は、こういった支部や出張所を設立しているほか、茶道家の派遣、海外に在住する茶道愛好者や教授者向けの研修会の開催なども積極的に行っている。例えば裏千家では、家元をはじめとする茶道家が、各国で行われる記念式典での呈茶や、在外公館での日本文化イベントでの呈茶や講演などを行っている。このほか、千宗守（武者小路千家 14 代家元）が若宗匠の頃から海外の大学などに招かれて茶道の実演や講演を行ってきた例や、小堀宗実（遠州茶道宗家 13 世家元）がシンガポール国立大学と長年にわたって茶道を通じた文化交流を続けているような例もあり、各流派は独自に茶道の国際発信に取り組んでいると言える。

3　国が支援する国際発信としての茶道の活動について

国が支援する、あるいは、国主導の国際発信の主要な例としては、外務省において行う、国際文化交流を目的とした専門家派遣の取組が挙げられる。外務省の発行する『わが外交の近況』によれば、昭和 35 年（1960）に、久田和彦（ひさだかずひこ）、塩月弥栄子（しおつきやえこ）が茶道教師としてインド及びビルマ（現ミャンマー共和国）両国に派遣されていたことが確認できるほか、昭和 41 年（1966）に行われたリオ・デ・ジャネィロ四百年祭典に際しては、外務省によって裏千家 15 代家元千宗室（現　千玄室）が派遣され、祭典において茶道の実演や講演が行われた。現在も、在外公館が管轄地域における対日理解の促進や親日層の形成を目的として、外交活動の一環として開催する総合的な日本文化の発信事業である「在外交館文化事業」において茶道のワークショップなどが行われている。外務省所管の独立行政法人国際交流基金においては、「茶道、生け花、武道、食など日本人が生活のなかで生み出した文化を、講演やデモンストレーション、ワークショップの形で海外の人びとに紹介し、体験してもらう機会」をつくる「日本文化紹介のための専門家派遣事業」において、茶道家の派遣が行われている。

また、文化庁においては日本文化への理解の深化や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を趣旨として文化人や芸術家などを海外に派遣する文化庁文化交流使事業を行っている。平成 20 年度には、文化交流使として千宗屋がアメリカ、フランス、イタリア、ドイツ、メキシコ、ベルギーに派遣されている。

これらから、茶道は、外交における対日理解促進等に貢献するものとして、また、日本文化への理解深化や外国人とのネットワーク形成・強化につながる活動として期待されていることが分かる。

4　まとめ

以上のように、外国人が茶道という日本文化に関心を持ったのは 16 世紀という早い段階であったが、その評価が高まっていったのは 19 世紀以降と位置付けられる。その背景には日本に滞在する外国人が増えたこと、また、茶道を取り上げた外国語文献が増えたことが挙げられる。特に戦後は一部茶道流派による海外支部の設置、国による外交への利用など、日本の側からも積極的に国際発信に取り組むようになっている。こうした継続的な努力の成果として、茶道は重要な日本文化の一つとして海外に認知されるようになり、実際に参加する愛好者が増加するという状況を実現したのである。

＜参考＞

・スムットニー祐美『茶の湯とイエズス会宣教師　中世の異文化交流』思文閣出版、平成 28 年
・ポール・ヴァレー編『茶道学大系《全 11 巻》　別巻　海外の茶道』淡交社、平成 12 年
・「わが外交の近況」第 4 号、外務省、昭和 35 年
・「わが外交の近況」第 10 号、外務省、昭和 41 年

４節　学校の授業及び部活動などで行われる茶道について

現代社会において、茶道が授業の一環として取り入れられている例としては、小学校、中学校、高等学校が主であるが、一部の幼稚園においても例がある。また、課外においては、文化部活動が行われている。このことは、後述の茶道団体アンケート調査（第２章参照）において、小学校や中学校、高等学校、大学などに講師を派遣して、茶道の指導や体験を授業や部活動の中で行っているという回答が見られることからも確認できる。

この節では、学校の授業及び部活動などにおいて、どのように茶道に触れたり、学んだりしているのかという点について取り上げていく。

１　小学校、中学校、高等学校、大学の授業における茶道の実施例

現在、小学校や中学校においては、「特別の教科　道徳」や「総合的な学習の時間」において、高等学校では「総合的な探究の時間」において茶道体験を行う例が見られる。これらの授業時に茶道体験などが実施されている理由としては、平成 18 年（2006）に改訂された「教育基本法」における「教育の目標」の一つとして「伝統と文化を尊重」することが掲げられ、平成 29 年（2017）改訂の小学校及び中学校の「総合的な学習の時間」と「特別の教科　道徳」の学習指導要領に「我が国の伝統と文化の尊重」について学習内容に含めることが記載されていることが背景にあると考えられる。

様々な地域において、伝統文化を尊重する教育の一つとして茶道が取り入れられていることは、国立教育政策研究所による「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」、「伝統文化教育実践研究」などにおいて確認することができる。

地域の特色を生かした教育の例としては、京都府、京都市における取組が挙げられる。現在、京都府では、「高校生伝統文化事業」として伝統文化を尊重する態度の育成を目的として、府立の高等学校において茶道の体験授業が実施されている。また、京都市では、所作・礼儀・道具を大切に扱う心等を学んでもらうことなどを目的として、令和元年度より市立小学校 32 校でモデル校として授業内において茶道体験を実施しており、順次、市内の全小学校において体験機会が設けられる予定としている。いずれも体験授業という位置付けではあるが、地域の生活文化を取り入れたものとしての特徴がある。

上記は主に公立の小中学校や高等学校の例であるが、私立の中学校や高等学校においても、必修科目として茶道を設けている場合や、道徳の授業の中で礼法や茶道といった伝統文化に関する授業を設けている例も見受けられる。

一方、大学の例を見てみると、伝統文化関連の講義において外部講師として茶道家を招いて茶道の体験学習の機会を設けている例があるほか、座学と実技を行う講義を設け、免状の取得が可能となっている大学もある。

次に専門学校に目を向けると、茶道流派が運営する専門学校があり、実践的な茶道の学びを行うためのカリキュラムを組んだ課程があるほか、既に茶道教授としての資格を有している者を対象に一層学びを深めるための課程もある。また、和装、福祉関係の専門的な人材の育成を目的とした専門学校において免状を取得できるカリキュラムを組んでいる場合がある。

以上のように、小中学校や高等学校、大学という場において、茶道が授業及び講義の中で行われているが、一部専門学校の茶道教授の養成などの特別な例を除くと、いずれも目的として掲げられているのは、日本の伝統文化を体験し、感性を育むことや、礼儀作法や所作とともに豊かな教養を身に付けることなどである。このことから、茶道における所作や作法の体験や、茶道具などを見たり触れたりするなどの機会を通じて、各教育段階や内容に応じた深浅の相違はあっても、それらの習得が期待されていることがうかがえる。

2　小学校、中学校、高等学校、大学の部活動やサークルにおける茶道について

茶道は各学校種における授業や講義以外に、文化部活動やサークル活動としても行われている。

文化部活動の状況について把握した調査としては、平成 19 年度に実施された学校における鑑賞教室等に関する実態調査がある。この調査は、全国の学校現場における鑑賞教室や文化部活動の実態を把握することを目的として、全国の全ての小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、計 39,804 校（有効回収数は 20,237 校）を対象として行われたものである。この調査からは、各学校種における部活動の総数や外部指導者の有無などを把握することができる。

表６　小・中・高等学校の文化部活動における茶道部について

区分	文化部総数	茶道部の数	割合
小学校	19,379	651	3.4%
中学校	15,134	479	3.2%
高等学校	23,442	1,612	6.9%

出典：社団法人日本芸能実演家団体協議会編『学校における鑑賞教室等に関する実態調査報告書』を参照し作成した

表７　小・中・高等学校の茶道部での学校外部の指導者・講師の割合について

区分	茶道部の数	学校外部の指導者・講師の有無		
		有り	無し	無回答
小学校	651	70.5%	21.4%	8.1%
中学校	479	70.1%	23.2%	6.7%
高等学校	1,612	72.1%	19.4%	8.6%

出典：社団法人日本芸能実演家団体協議会編『学校における鑑賞教室等に関する実態調査報告書』を参照し作成した

表６は、各学校種における茶道部の総数と、文化部総数に占める割合を示したものである。この結果から、各学校種の中でも高等学校が最も茶道部の数が多く、文化部総数に占める割合も高いことが分かる。

続いて表 7 は、茶道部での学校外部の指導者・講師の割合について示したものである。いずれの学校でも 70%以上が指導に際して学校外部の指導者や講師に指導を依頼していることが確認できる。また、この調査から、1 週間の活動頻度については、小学校では「週 1 回未満」との回答が 34.4%と最も多く、中学校は「週 1 ～ 2 回程度」が 61%、高等学校でも「週 1 ～ 2 回程度」が 74.8%と、最も多い回答であることが分かっている。具体的な活動内容については上記の調査事業の対象外であるため、その全様は明らかではないが、外部人材を活用した専門家による指導が行われていることが考えられる。

文化部活動の成果発表の場としては、季節ごとの茶会の開催を実施している場合や、地域の文化イベントでの呈茶が見られる。例えば、文化庁、開催都道府県、開催市町村及び文化団体等の共催により毎年開催される国民文化祭へ参加し、呈茶席を設けるなどの活動に取り組む例や、文化庁、公益社団法人全国高等学校文化連盟、開催県、開催県教育委員会、開催市町村、開催市町村教育委員会の主催により開催される全国高等学校総合文化祭でも、茶道部門が設けられ、茶会や交流会等が行われる場合もある。

また、大学の部活動やサークル活動としても茶道は行われており、各サークル等において茶会の開催などを行っているほか、各流派の支部や青年部と連携して地域イベントへの参画に取り組んでいる例もある。

＜参考＞

・社団法人日本芸能実演家団体協議会編『学校における鑑賞教室等に関する実態調査報告書』平成 20 年
・「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業の研究主題－平成 18・19 年度－」国立教育政策研究所教育課程研究センター（URL https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_l18-21.pdf）
・「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業の研究主題－平成 20・21 年度－」国立教育政策研究所教育課程研究センター（URL https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_l18-21.pdf）
・「教育課程研究センター・生徒指導研究センター関係研究指定校等事業便覧（平成 23 年度）」国立教育政策研究所教育課程研究センター・生徒指導研究センター、平成 23 年（URL https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_l22-23.pdf）

２章　茶道団体・茶道教室の活動について

1　本章の主旨

本章においては、平成 27 年度、平成 29 年度に文化庁が行った茶道分野に関連する調査の概要を整理した上で、本年度、茶道団体や茶道教室に対して実施したアンケート調査結果を中心に、茶道の担い手である茶道団体や茶道教室の活動について現状を分析する。

2　平成 27 年度調査の概要

平成 27 年度、文化庁では生活文化の保護・保全を促進するべく、現行制度の改正等を含めた適切な文化財保護体系の検討を行うため、茶道団体の実態に関する調査を行うとともに、茶道界における評価の状況、地方自治体における生活文化に係る指定状況等の事例調査などを行った。

アンケートやヒアリングの結果、茶道については生活スタイルや価値観の変化による若者の生活文化離れ、会員の高齢化、指導者及び会員数の減少、教室の財政難といった課題が挙げられた。また、茶道が多様な文化を内包する一方で、敷居の高さが茶道の活性化の障壁になっていることや、横断的組織の不在により、斯界のまとまりがなく、情報発信不足などにつながっている可能性があることが分かった。

3　平成 29 年度調査の概要

平成 29 年度は、過年度調査の課題点や検討内容を踏まえた上で、生活文化・国民娯楽（以下「生活文化等」という。）に関して複合的かつ広域的な実態を把握し、生活文化等の振興施策について検討を行うため、生活文化等の国民意識調査を行うとともに、生活文化等の分野・実態について広域的に把握することを目的とした団体アンケート調査などを行った。

調査の結果、男性より女性の方が生活文化のいわゆる「習い事」に興味関心の度合いが高いことが見て取れる中で、茶道はその典型例となっていることや、今後経験したい生活文化等の中では、「和装」「礼法」とともに関心が高いことが分かった。また、生活文化等を経験してみたいと思いながら経験してこなかった理由としては、「単にきっかけがなかったため」が最も多く、きっかけづくりの重要性が浮かび上がった。

団体アンケート調査の結果からは、会員の高齢化や会員数の減少は茶道だけでなく生活文化等を担う団体共通の課題であること、生活文化等の保護・活用のためには、国家レベルでの保護支援や学校教育への導入など、国内における生活文化の認知向上を望む声などが聞かれた。

１節　茶道団体の活動について

１－１　茶道団体へのアンケート調査の実施概要

平成 27 年度及び平成 29 年度の調査結果を踏まえ、より詳細な生活文化の実態等を把握するため、本年度は茶道団体及び茶道教室を対象にしたアンケートを実施した。茶道教室へのアンケートの結果等については次節に譲るが、茶道団体に対しては、茶道の普及啓発、継承等を掲げて活動する団体の具体の活動内容やその現状と課題、茶道のどのような点を大事にしながら継承に取り組んできたのか等を知ることを目的として、以下のような記述式を中心としたアンケート調査を実施した。

なお、令和元年度末から２年度にかけては、新型コロナウイルス感染症の影響が顕著であったため、その影響についても把握するため、記載欄を設けたが、主な調査対象はこれらの影響を受ける以前の活動状況（直近３年）を基本としている。

■　調査設計

調査方法	郵送によるアンケート票の配布、郵送又は電子メールでの回答
調査趣旨・目的	茶道を次世代に継承していくためにどのような方策が必要なのか具体化することを目的として、茶道についての詳細調査を実施
調査対象	茶道団体
調査期間	2020 年 10 月 8 日（木）～2020 年 11 月 6 日（金）
回収数	221 団体　※支部組織含む
設問文	Ｑ１：貴団体について（団体概要・団体の主な目的・定款・団体の沿革） Ｑ２：団体の活動（直近３年）について ①「初釜をはじめとする茶事・茶会」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ②「会員向け研修会、講習会」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ③「一般、学校向け講演会、講師派遣」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ④「機関誌の発行」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ⑤「広報活動」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） ⑥「その他の活動」の実施（活動内容、成果、今後の課題や展望） Ｑ３：茶道の継承について (1)「茶道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素とその理由 (2)（1）で選択した要素に関して、茶道団体としての現状及び守っていく上で必要な取組 (3)茶道を次世代に伝えていく上で、課題と感じていることの有無、及びその理由 Ｑ４：新型コロナウイルス感染症の影響について

１－２　茶道団体へのアンケート調査の結果概要

以下は、茶道団体から得た回答を質問項目それぞれについて整理し、おおまかに傾向分析したものである。

（１）　茶道団体の活動（直近３年）について

①　「初釜をはじめとする茶事・茶会」の実施について

〇活動概要

（実施の時期・頻度）

・活動の時期は、毎月行う月釜のほか、年末年始、四季ごとなどの回答が多く見られた。頻度は、回答があった中では、年１回が多く、ほとんどが年０.５回～１０回程度であった。規模は、数十名から、大きいものでは数百人～1,000 人程度までの規模で実施されている。

（活動場所）

・活動場所としては、茶室で行う場合、文化施設や公共施設、寺社、料亭・ホテル、団体所有の茶道会館、道場、個人宅などの回答が見られた。茶室以外では、商業施設や公園等の回答があった。また、訪問の場合は、保育園、小学校、高齢者福祉施設等が挙げられた。

（活動の目的・種類）

・活動の目的としては、団体の財源確保、稽古の成果のお披露目、会員同士の親睦、歓迎や送別、茶筅供養や物故者供養、広報・宣伝、地域活動（ボランティア）などがある。

・ターゲットを絞った茶会として、若い世代向けには、子供向けにマナー教室や、茶会体験を行う子供教室（文化庁伝統文化親子教室事業等を活用する団体もある）、外国人向けの国際交流茶会や日本語を学ぶ学生向けにマナー教室を兼ねた茶会体験などの例があった。

・学校茶道連絡協議会の茶会や、同じ流派内の支部・青年部・学校茶道で連携した茶会、他流派との合同での茶会などがあった。

・また、行政や民間企業の委託のもとで開催している団体もあった。

・茶事・茶会の工夫としては、野立の設営や、テーマに沿った茶席を設けるといった取組のほか、懐石料理教室、座禅会、道具等のバザーを伴う茶会といった複数の催しを組み合わせた茶会などがあった。

（活動の成果）

・一般向けに様々な場所で茶会を行うことで、茶道への関心を高めることができている。

・茶事・茶会の開催は、会員の団体への愛着の醸成や運営を通じた絆づくりにつながっている。また、会員間だけでなく、幅広いコミュニティからの参加者との出会いや交流の場になり、茶道への学びの場になっている。

・高齢者福祉施設においては、普段と異なる雰囲気をつくることで、刺激を生み出すことや、保育園や学校等においては、日本文化や茶道の作法・マナーに触れることで、教育的な効果がある。

・また、チャリティ茶会の収益は慈善事業等に寄附され、社会貢献につながっている。

○現状と課題

・会員の高齢化、会員数の減少、後継者不足により茶会の亭主（席主）が減っており、運営側に人的な負担が掛かっていること、同時に茶道人口が減少していることで、収益も減っており、以前ほどボランティアで茶会を催すことが難しくなっている実態がある。

・茶会の会場を用意するのが難しく、公共施設は利用料が安価なため競争が激しい一方で、民間施設は利用料が高いことがネックになっている。また、火気使用不可の場所が多いため、炭が使えない等の制限があることが課題である。

・茶道具の所有者が減っており、茶事・茶会において用意することが難しく、若い層などは触れる機会が減っているため、知識の伝承が必要になっている。また、産業としての維持も心配されている。

○今後の展望等

・茶道の良さを広める広報活動を積極的に行う一環として、ボランティア・奉仕活動を通じて、地域の方に接する機会を増やしたい、という回答が見られた。地域奉仕型のイベントについては、人手不足を補うため、学校茶道部との連携を望む声もあがっている。

・既存会員向けの取組として、費用が安く、茶席数が多い参加しやすい茶会の開催や、会員が企画から参加することで、よりお茶を楽しみながら多くの学びや体験を得られる機会の創出、青年部でしかできない青年部らしい茶会の検討、といった意見が寄せられた。

・一方で茶道の普及のためには、開催時期の工夫、一般向け茶会における服装・マナー・作法等の簡略化、テーマ型で飽きにくい茶会、参加費の抑制、子供向けの体験といった取組の必要性も挙げられた。

②　「会員向け研修会、講習会」の実施について

○活動概要

（開催の頻度・規模）

・月に１回程度から年に数回の開催が多く、開催期間としては１日で完結するものから数日にわたって行われるもの（研修旅行等）があり、規模は数十名から多いものでは一度に1,000 名程度の参加がある活動もある。

（研修会等の種類）

・点前の統一や研鑽を目的として、基本点前の研修等がなされているほか、茶道具の実演を含めた講義や鑑賞会等が実施されている。こうした研鑽は、家元等から講師の派遣を受けたり、会員のレベル別に実施したり等の工夫のもとで運営されている。

・座学では、お茶や流派の歴史、仏教・神道や茶道具・茶室・文化財に関することのほか、マナー教室や茶道の実践の場である地域・社会に関する勉強会などの例があった。

・学校茶道指導者を対象にした研修会があり、子供の成長・心理に関する内容を含めたものもある。

・茶道に関連した文化を学ぶため、懐石料理の研修や、道具作り体験、着付け教室や着物に

合う髪型教室、香や煎茶などの講習会の開催例があった。

・研修旅行として、美術館や博物館での観賞、茶筅供養を兼ねた寺の訪問、お茶にゆかりのある場所の見学や同じ流派の他団体との交流訪問などの例があった。

（活動の成果）

・研修会や講習会は、研鑽・上達や日常の稽古の疑問を解決する場となっているだけでなく、点前の統一や継承の機会にもなっている。また、茶道への関心や会員の向上心を高めたり、会員同士の親睦を深めたりしながら、日本の伝統文化や技術を理解していく場ともなっている。

○現状・課題

・会員数の減少により、参加者が減り、一人当たりの経費の負担が重くなっていること、限られた会員のみの行事になってしまっていることで魅力が減っているという意見もあった。

・指導者・会員の高齢化で、身近に講師をお願いできる方が減り、開催が難しくなっており、また、若い人は仕事や生活が多忙のため、参加者が少ない等の課題がある。

・大きな団体特有の課題としては、役員が、年間行事の消化、総本部の行事、青年部、学校茶道の催しへの参加等に追われており、余裕を持った運営が難しくなっているとの声もある。

○今後の展望等

・会員高齢化や会員数の減少に対応するための、社中横断的な研修会の実施や、参加者のみならず会員の増加に向けた取組として、メディアやSNSを活用した茶道の魅力の発信などが挙げられた。また、参加者にとっての敷居を下げるために、会場の交通利便性への配慮、土・日曜での開催、複数回の開催、オンラインの活用のほか、研修内容や講習科目の工夫などが示唆された。

・時代に即したニーズ把握のため、会員にアンケートを行う例や、一人ではチャレンジしづらい内容に皆で取り組んでいる例もあった。研修会・講習会にて修得した知識・手法等を、公的機関の主催するボランティア活動等で発揮する等の社会事業に意欲的な団体もあった。

③　「一般向けもしくは、学校向けの講演会、講師派遣」の実施について

○活動概要

（活動の種類）

・一般向けの活動として、行政や文化連盟からの依頼や自主的なボランティアにより、講演会が実施され、また、文化庁の伝統文化親子教室事業（対象者は原則小中学生）では、実技を伴う子供向けの教室が開催されている。

・学校向けの活動としては、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校、大学と幅広く、正課の授業であったりクラブ活動であったりする。児童・生徒だけでなく、PTA、校友会、教頭会で教員を対象にした活動もあった。

（開催頻度・参加人数）

・活動頻度は週１回から年２回と幅が広く、参加者も数十名から 700 名程度までの規模のものがあった。

（活動の内容）

・内容は講演だけでなく、菓子や道具づくり等のワークショップや、マナー講座も兼ねたもの、礼節を養う意図が組み込まれているものもある。児童・生徒に対しても、普段のお稽古では経験できない本格的な茶席を体験させるものもある。

（活動の成果）

・教育効果として、挨拶ができるようになる、集中力が向上する、思いやりや協調性などが育まれる、所作、言葉遣いが美しくなるといったことが挙げられている。

・マナー講座に参加し、ルールを知ったことで茶会参加へのハードルが低くなったという声や、子供とともに参加した後に、実際に茶道を始めるケースもあるようである。

○現状・課題

・一般向けの活動の現状として、新たな会員を確保するために初心者向けの活動も重要になってきており、企業等へ出前授業のような形の活動も出始めている。

・講師の高齢化に加えて、学校向けの活動の課題として、活動予算が少ない等の理由による費用の捻出等が課題となっている。また、学校で茶道を教える外部講師は、各学校において個々に採用されていて、その立場が不安定であること等も課題として挙げられている。

○今後の展望等

・講演については、ただ話すだけでなく、パソコンを使い、画像や動画を折り込むなど、視覚にも訴えかける資料作成等の取組と、併せて高齢の指導者にはそのサポートの必要性が指摘されている。

④　「機関誌の発行」の実施について

○活動の概要

（機関誌の内容、発行回数・部数）

・行事予定連絡、会員募集、役員紹介、受賞報告といった事務的な事項のほか、団体内の活動報告、各稽古場の状況報告や、茶道に関する特集などが主な内容となっている。年に0.5 回～数回程度が多いが、毎月発行の団体もある。部数は回答があった団体では、50 から 3,000 部程度であった。

（機関誌の目的）

・目的としては、活動内容の周知や、歴史・活動の振り返り、会員の共通認識、一体感を高めることなどがある。また、過去の記録としても活用され、新入会員入会につなげるための広報素材や、休眠会員への連絡手段の一つにもなっている。

○現状・課題

・作成に労力が掛かっているが、パソコンを使える世代が限られており、特定の担当者に負担が掛かっている実態がある。また、活動を伝える重要なツールであると現状を評価する一方で、記事内容のマンネリ化を懸念する声もある。

・印刷費・郵送費が年々高騰してきているため、予算確保が厳しくなっており、印刷物以外での発行形態の検討の必要性も挙げられた。

○今後の展望等

・予算上の制約がある中で、これまでの継続性等を考慮し、従来のままでよいとする見方がある一方で、記事としての魅力を高めるため、読み手のニーズをとらえ、充実していく工夫をしていきたいとする意見もあった。

⑤　「広報活動」の実施について

○活動の概要

（広報媒体等）

・媒体としては、チラシやリーフレット、イベント毎のポスター制作などがあった。作成部数は回答があった中では、数十部から 2,500 部程度であった。オンライン媒体としては、ホームページや SNS、メールマガジンなどがあった。外部機関を活用する例としては、自治体の広報紙、地元新聞やケーブルテレビを活用する例があった。

（広報活動の目的・効果）

・目的は、活動の周知や会員間の情報の共有化、会員募集である。

・行政の広報誌を利用して茶会の参加募集を行い、集客に結びつくケースや、ホームページに目を留めて入門申込みが行われるケースもある。

・ホームページ等により周知をすることで、参加者の応募や新規入会につながっているほか、活動を知った民間企業の協力要請を受け、福利厚生面として社内企画に参画した例もあっ

た。また、ホームページを会員連絡のために使用している団体は、会員の結びつきが強化されている、といった効果を感じている。

○現状・課題

・活動の PR 効果はあるものの、新規加入に結びついていないこと等、紙媒体の広報誌の有効な配布等に課題を抱えている団体がある。

・オンライン媒体については、若者向けには有効であるが、会員は高齢者などインターネットが使えない層が多いこと等から、会員間の情報共有手段としては補助的なものにしかなり得ない。そのため、当面は紙媒体を維持しつつも、並行して会員のＳＮＳ等の活用状況を確認しながら、時代に合った情報伝達を行っていく必要性が挙げられている。また、オンライン発信の強化の必要性は認識されているものの、デザイン性の強化はコストが高いことや、更新の負担が特定の個人に集中しがちなことが課題となっている。

○今後の展望等

・発信内容については、視覚的に魅力なものをつくることや、活動の変化を一つ一つ明確にしていくような工夫の必要性について意見があった。

・また、内容の充実や、特定個人による更新の負担軽減に向けて、複数の者による更新等が図られている。

⑥　「その他の活動」の実施について

・その他の活動としては、企業やガールスカウトマナー教室、美術館、病院での呈茶や、地域の行事や成人式・卒業式、観光客向けのイベント等に合わせた呈茶などが挙げられた。

・こうした活動は概ね好意的に捉えられている一方で、イベントの機会に実施される活動は、イベントがなくなると呈茶も途絶えるといった懸念の声もあった。

・海外事業として外国における茶道普及の試みを行っている団体では、外国人に受け入れやすいお茶の提供が課題として認識されていた。

（２）　茶道の継承について

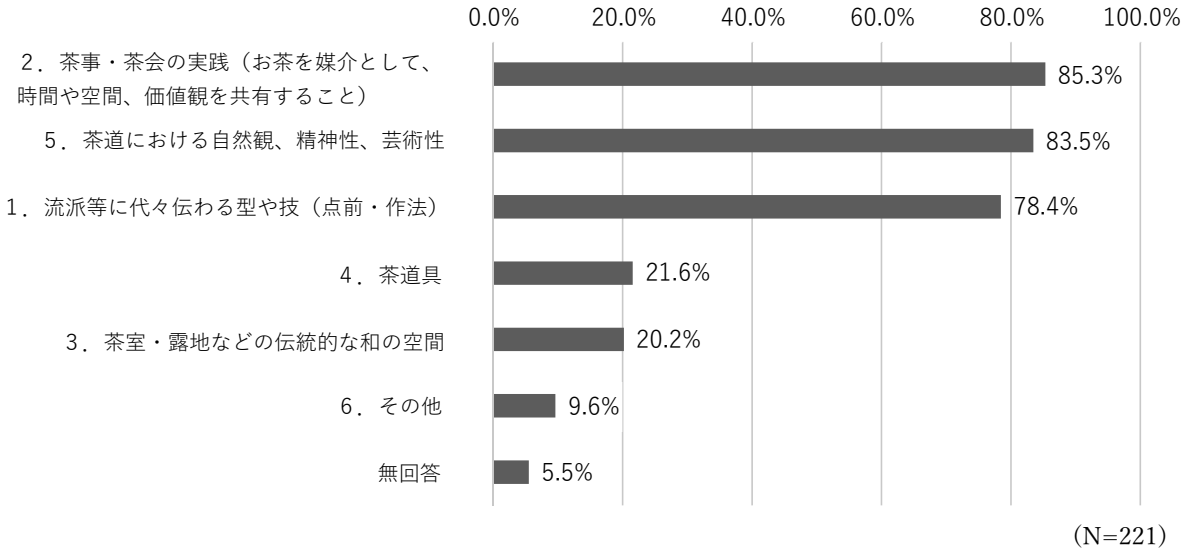
①　継承すべき要素

今日までの茶道の継承において、何が守り伝えられてきたのかを具体的に特定していくために、団体向けのアンケートにおいて、「茶道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素として、以下を掲げ、これらの中で、団体において特に大事だと思われる要素を３点ずつ選んでもらった。

１．流派等に代々伝わる型や技（点前・作法）
２．茶事・茶会の実践（お茶を媒介として、時間や空間、価値観を共有すること）
３．茶室・露地などの伝統的な和の空間
４．茶道具
５．茶道における自然観、精神性、芸術性
６．その他

上記はいずれも茶道の構成要素として欠くことのできないものであり、分けて考えることが難しい選択肢であるが、茶道の何を継承してきたのか、また、次世代に何を伝えていくのかを具体的に知るための試みとして、また、その大事だと思われる要素に対して、茶道団体がどのような取組を行い、何を課題に考えているかを具体的に知るために、あえて細分化して上記のような要素の提示を行った上で、（１）「茶道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素とその理由、（２）（１）で選択した要素に対して、茶道団体としての現状及び守っていく上で必要な取組、（３）茶道を次世代に伝えていく上で、課題と感じていることの有無及びその理由を質問した。

その結果、（１）についての団体の選択は以下の図のとおりであった。



「茶道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素

■「茶道を次世代に伝えていく上で守り続けていく必要がある」と考えられる要素

表のとおり、「２.茶事・茶会の実践（お茶を媒介として、時間や空間、価値観を共有すること）」や「５.茶道における自然観、精神性、芸術性」、「１.流派等に代々伝わる型や技（点前・作法）」が多くの団体から挙げられたところであるが、それぞれ、選んだ要素に対して【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】【現状】【必要な取組】をまとめるとおよそ以下のとおりとなった。

「1. 流派等に代々伝わる型や技（点前・作法）」（78.4%）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

代々伝わる型や技は、茶道の根幹であり、稽古の積み重ねによって、型の習得を超えて、美しい所作、必然的なしぐさへと昇華されていくものである。また、美しい所作で人をもてなすためには、型を習得することが最も必要であるが、代々伝わる型や技を学び続けていくことで、型が血肉となり、精神性を持っていく。そのように、型や技には心の持ち方、道具の扱い方の習得も含められており、茶の心である四規七則（しきしちそく）（和敬清寂の精神や客をもてなす７つの心構え）を学び、伝えていくことの重要性等が述べられている。

【現状】

点前・作法について、社中での稽古や、流派での研修会・講習会などを通じて、型や技の継承が図られているが、近年は、指導者の高齢化に伴う指導者不足、また、親先生といわれる指導者の引退に伴う稽古の質的な変化、会員の高齢化や会員数の減少等による存続の不安等について述べている意見も多かった。また、情報化社会や生活様式の変化のなかで、これまでは場を共有することによって伝えられてきた型や技を、対面ではない方法により伝えていくことの不安も感じられていることがうかがえた。

【必要な取組】

点前・作法の継承は、各自で稽古を重ねるほか、正確に伝えていくために、型・技の統一を図るための研修会等の実施、少人数での稽古の実施、減少傾向にある指導者・後継者の育成や、流派の他の社中との交流による茶会等実践の場への参加機会の確保などが挙げられた。また、指導者の育成のためには、教授者の生活が成り立つための経済的な仕組みづくりが必要といった指摘もあった。会員数減少の要因として、介護や仕事等の忙しさなどがあることから、インターネットを活用した稽古の機会の提供等、新たな取組の実施や、裾野の拡大といった観点から、学校教育での指導等について求める声もあった。

「2. 茶事・茶会の実践（お茶を媒介として、時間や空間、価値観を共有すること）」（85.3%）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

茶道は「もてなしの文化」といわれるように、亭主が心を尽くし、おいしいお茶を点てて客人をもてなすことを眼目としており、稽古は茶事・茶会の実践のために行われている。一期一会、一座建立等の言葉にあるように、時間や場を共有することによって、人を想う心や交流の喜びが生まれ、また、そのような実践によって、季節感や教養、人とのふれあいの大切さ等を知ることができる。更に、茶事・茶会は誰もが参加できる行事であり、参加を通じて茶道を知らしめる機会ともなっている。

このように、茶事・茶会の実践によって茶道全体の姿を捉えることができるため、重要とする回答が多かった。

【現状】

茶事・茶会について、月毎あるいは季節毎などでの定期的な開催に取り組んでいたり、地域行事として開催されていたりする。しかし、会場の制約（畳の空間、炭が使える空間の減少）、指導者の高齢化、参加者の減少、参加費の負担増、指導者の経験不足や道具を揃えることが難しい等、様々な要因により、茶事・茶会の実践が困難になってきている現状がある。

【必要な取組】

茶事・茶会は、重要な実践の場であるため、規模を縮小しても継続すること、中身のある実践が行えるようあまり多人数にしすぎないこと、回数を維持又は増やすようにしていくことの必要性が指摘された。また、参加者を募り、一般に裾野を広げることによって茶道への理解を広げるため、様々な機関や団体と連携しながら気軽に参加できるような、一般向けの大寄せ茶会の実施なども重要とされた。その際、茶会の実施は負担等が大きいことから、流派内の連携協力体制を充実させ、合同での開催や、若い世代にも亭主（席主）になる機会を与えるなどの取組も必要との指摘もあった。

「**3. 茶室・露地などの伝統的な和の空間**」（**20.2%**）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

茶室・露地などの伝統的な和の空間は、茶道を茶道たらしめている要素のひとつとして欠かせないもので、茶室、露地などの場・空間と所作や点前は切り離せないものであり、茶事・茶会を行うための重要な場である。

しかし、自然と伝統が共存する茶室・茶庭等は、生活様式の変化の中で急速に失われつつあり、これらは一度途絶えると元に戻せない。茶室・露地での所作はこれらの消滅に伴って分からなくなってしまうため、茶室・露地などの和の空間それ自体も残していく必要がある。

【現状】

茶室・露地を維持し保全管理を務めている流派等がある一方で、建築費や維持・管理のコストが掛かることが大変との指摘がある。茶室を持つ先生も限られており、露地を通って茶席に入るというような茶会もなくなってきつつあり、会場を借りて茶会等を行う場合も、施設の数が少ない上に、火気の使用禁止等の制限があり、炭を使う茶会ができないなど、本格的にお茶会を開催する場所を探すのにも苦労がある。

【必要な取組】

茶室・露地等の保全のために、既存施設の整備・維持・管理に努め、文化財としての保全や、行政や地域による財政的な支援、学校教育で価値を伝えていくこと等が必要との声がある。

これらの重要性を理解するためには、保全するだけではなく、積極的に活用していくことが必要であるため、見学会の開催や茶会での利用や、それらを所有している団体との連携行事の開催等により、効果的に魅力を伝えていくこと等についての意見があった。

「**4. 茶道具**」（**21.6%**）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

茶道具は日本の伝統工芸の粋が詰まっており、高い芸術性や普遍性、また、機能性や実用性などを備えている。茶道具により茶席や取り合わせ等にも興味を持ったり、茶道の精神を理解したりすることもある。また、歴代宗匠の好み物や、４００年余の先達からのお茶道具等を知ることで、物を大切にする心、価値観や感性等を身に付けることができる。このように茶道具は、単に物としてだけでなく、茶道の価値観等を体現する美術品として、大切に受け継がれてきた。

【現状】

家元においては、代々受け継がれてきた茶道具を大切に継承している一方で、近年は、茶道具を所持し、実際に使う人が減りつつある現状がある。また、若者世代においては、茶道具に関心を示さなくなりつつあるとの指摘もあった。実際、お茶会を開催する場合、親先生が所有しているもの等を借りるケースがあり、これら借り物によって茶会を行う場合は、組み合わせが難しく、また、あり合わせの道具で行う場合は、わびさびの精神が養えない等の悩みがある。炭や竹製品等、入手しづらくなっているものや、購入者が減ったことによる職人の仕事の減少などによって、継承が困難になりつつあることも指摘されている。なお、茶会等において目や肌で直に触れる以外にも美術館等での展示により、目を養う機会は確保されている。

【必要な取組】

茶道具に対する理解を深めるためには、さまざまな道具に接する機会を増やすことが、重要であり、茶道具を取り巻く変化に対し、例えば、気軽に楽しめるような方法を考える等次世代へ茶道具の魅力を伝えていくこと、また、茶道具を大切に扱うための教育・研修の必要性が指摘されている。また、伝統技術の継承のため、茶道具の若い世代の作家を支援すること、今ある道具についても有効活用するために情報の共有を図っていくことの必要性も指摘されている。

「**5. 茶道における自然観、精神性、芸術性**」（**83.5%**）

【大事だ（守り続けていく必要がある）と思われる理由】

茶道は、自然観でいえば、「日常」を大切にし、季節や歳時とともにあること、精神性でいえば、「禅」との深い関わりや、日本人が大切に受け継いできた「和」の心を尊ぶこと、芸術性でいえば茶道具に見る伝統工芸の粋、茶室・露地の伝統建築、和装の装いや懐石料理や和菓子の洗練など、総合芸術ともいうべき文化の凝縮がある。これら茶道で養われる心のありようや価値観などが、次世代へ継承すべき大切な要素と考えられている。

【現状】

稽古や講習会、様々な分野の専門家や講師を招くなどして伝えられているが、茶道における自然観、精神性、芸術性は、言葉や形として目に見えにくいものであるため、共有や伝承が難しく、個人によって差が生じている。特に、型や点前・作法、道具にとらわれたり、また、その稽古が中心となりすぎたりすることによって、実践としての稽古があまりなされていないとの指摘もある。

伝承のための取組としては、講演や研修等の座学や書籍、学校茶道等で伝えること、近年はインターネットも活用され、学び方の自由度が高まっている。

【必要な取組】

茶道における自然観、精神性、芸術性は、稽古や学びを継続する中で伝わっていくものであり、とにかく継続すること、また、お茶の実践だけでなく、座学や各地へ赴いてさまざまなものに触れていくこと、人との交流を行う等、自らによる実践的取組と、指導者による指導の工夫が必要とされている。

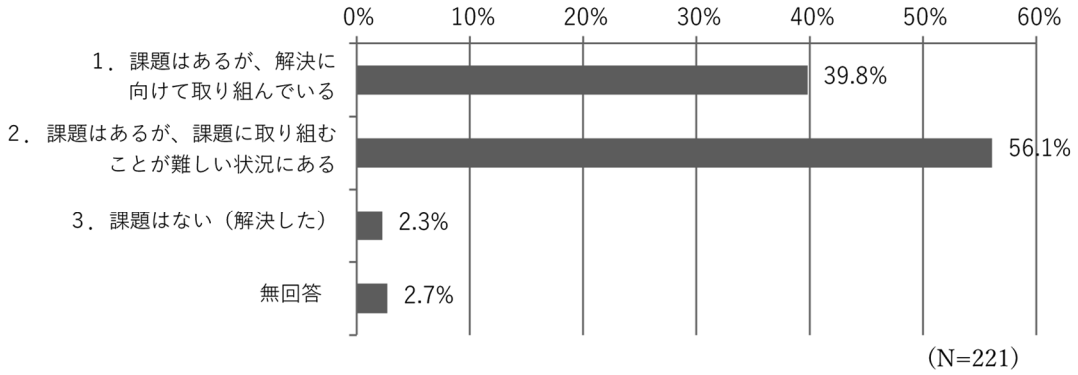
このプロセスを深めていく上で、指導者自らがこれまで以上に知識を得る等、時代の変化や学ぶ人の傾向を理解した取組が必要であるとの指摘もあった。

「**6. その他**」（**5.5%**）

その他の回答としては、茶道で得られる人のつながりや絆が重要であるという意見や選択肢の全てが重要であるという回答も見られる。一方で、必要があれば形を変え進化をして残っていくので、形にとらわれすぎないことが大切という意見も寄せられた。

②　茶道を次世代に伝えていく上で、団体として課題だと感じていること

「茶道を次世代に伝えていく上で、団体として課題だと感じていること」について複数回答で聞いたところ､「2.課題はあるが､課題に取り組むことが難しい状況にある」との回答が 56.1%と最も多く、次いで「1.課題はあるが、解決に向けて取り組んでいる」との回答が 39.8%、「3.課題はない（解決した)」との回答が 2.3%であった。



茶道を次世代に伝えていく上で、団体として課題だと感じていること（複数回答）

上記を選択した団体が挙げた課題と、解決に向けて取り組んでいる内容はおよそ以下のとおりである。

「1．課題はあるが、解決に向けて取り組んでいる」を選択した団体について

〇点前、作法の向上

・反省や疑問点の解消をしていく必要を意識しつつ、カルチャー教室や研究会の開催を行っている。

〇茶道人口の高齢化、減少

・SNS 等インターネットを活用したり、地域の行事で一般向けの呈茶をしたりしながら、茶道の魅力や、各講座や茶会の成果等について、広報・PR していく必要がある、というような課題と取組が挙げられた。また、こうした地域の取組はボランティアに近く、団体としてというよりは個人的に活動している、という意見も見られた。

・学生が進学や就職のため地元を離れて都会に出てしまう、また子育てや介護等で茶道をやめてしまう、退会を余儀なくされてしまうケースがあるが、いつか茶道を再開したいと思える時が来ることを信じて、今は一人でも多くの方へ楽しい事、美味しい事を共有できる行事や経験を伝えたい、という想いなども寄せられた。

〇次世代への継承

・文化庁の「伝統文化親子教室事業」等の取組に参加したり、若年層の会費を下げたり、青年部の活動が魅力的になるように活性化する必要がある、というような課題と取組が挙げられた。

・青年部、学校茶道で活躍をしているが、卒業してしまうと茶道を離れてしまう人がいるた

め、積極的に活動への参加を呼びかけ、つながりを強めていく必要がある、というような課題と取組が挙げられた。

・大人になってからよりは学生の頃から触れていることがハードルを下げるため、部活動の外部講師として活動しているという回答は多く見られるが、各学校の方針により、受入れの積極性に差があり、アプローチに限界がある、というような課題と取組が挙げられた。

・立礼の取り入れや茶道具にこだわらない楽しみ方、教室の開催日時の柔軟性など、初心者が取り組みやすい茶道の在り方を模索していく必要がある、というような課題と取組が挙げられた。

「２．課題はあるが、課題に取り組むことが難しい状況にある」を選択した団体について

〇環境的な難しさ

・仕事や子育て、介護等に追われ、趣味に興じる時間的・経済的な余裕がなくなってきている社会において、茶道の存続の難しさを憂う回答が見られた。

・働き方の多様化の中で、集会して習い事をするために時間を合わせること自体が難しくなっているほか、女性の社会進出でますます茶道人口が減っている、という課題が挙げられた。

・炭の購入が、年々困難になっていると同時に、炭を用いた稽古等ができる施設が消滅しつつある、という課題が挙げられた。

〇団体内部の課題

・着物の高級感、正座、マナー・作法等に厳しい世界という敷居の高いイメージ、マイナスなイメージが定着している一方で、それら払拭するための時代に合わせた新しい試みに対し、内部は保守的で、なかなか進まない、という課題が挙げられた。

・教室人口の減少は団体の財政的な運営を圧迫しており、ビジネスとして立ち行かなくなっていること、さらに支部や青年部等の組織体制の中で、役員・役割の負担が多く、担い手が減っている、という課題が挙げられた。

〇価値観の変化

・趣味の多様化で日本文化に対しての興味を示す方が少なくなっているほか、生活様式が洋風化したため、畳の生活がなくなり、和の世界観が少なくなっていることで、社会全体でますます日本文化への意識が薄くなっている、という課題が挙げられた。

〇学校教育との連携

・学校の正課に組み込んで、日本文化として茶道に触れ、歴史を残していくことが必要である、という課題が挙げられた。

「３．課題はない（解決した）」を選択した団体について

特筆する回答はなかった。

（3） 新型コロナウイルス感染症の影響について

団体の活動全体を横断して、新型コロナウイルス感染症の影響がどのように出ているか、今後不安な点等を挙げていただき、まとめるとおよそ以下のとおりであった。

① 影響

・茶会や茶道の稽古は飲食をともにしながら会話し、心を通わす文化であること、点前の指導や茶室の構造上、ソーシャルディスタンスが取りにくいといった茶道特有の性質があり、活動を当面見合わせざるを得ない団体がほとんどであった。活動休止の影響として、高齢者はコロナを機に退会する例が見られ、会員減少により、財政的な苦況に立たされている。役員会議もリモートでは意見のすり合わせがうまくいかず、運営上の合意形成が難しくなっている。

・規模を縮小しての開催の場合、空間の確保・会場選びが難しくなっている。運営に当たっては、濃茶の飲み回しができないため、一人一碗の準備が負担となっている。また、茶道具や水屋用品、消耗品等、他人と共有しないように衛生面での配慮に追われている。このような対策の結果、「美をきわめる茶道とはかけ離れてしまった」と憂う意見もあった。さらに、対策を取っても、リスクに対する意識はそれぞれのため、活動に参加する人は減少している。

・地域貢献として、地域行事での一般市民向けの呈茶や、老人ホーム等の訪問も不可となり、広報活動も難しくなっている。

・オンラインへの対応を検討する団体はあるものの、人とのつながりや精神性を学ぶのが茶道の本質の一つであるため、躊躇がある。本来の茶道が伝わりづらくなっていく中で、経済的な影響もあり、会員の退会が増えてきている。

・なお、オンライン化の好影響として、育児中等制限のある人も研修会に参加できるようになったことや、不参加の要因となっていた移動時間・移動手段・交通費の面が解消されている。

② 今後不安な点

・活動再開を検討する団体は多いが、衛生管理としてマニュアルやガイドラインがないため、不安を抱えている団体が多い。

・もともと茶道離れが進行している中で、コロナ禍を機に一層進行し、コロナの深刻化、長期化によって、人間関係が疎遠になり、無縁化社会が増長し、人間関係を深める、人へのおもてなし文化といわれる茶道が廃れるのではないかと危惧されている。

・茶道の変化として、「一碗を回し飲み」する所作がなくなることで移ろいを全員が享受する為の「一座建立」の教えがなくなる、といったことが危惧されている。

・茶道を取り巻く産業の負の連鎖が発生し、例えば、菓子やその他の消耗品、備品などお茶に関する生産コストが上がり、値段の上昇により、茶会の費用が上がり、参加者も減るといったことが危惧されている。

・オンライン対応はＩＴに疎い会員を淘汰してしまうほか、全国どこにおいても参加可能になることで、場合によっては地域に根付いた個別団体や小さい流派の存在意義が薄れてしまうことが危惧されている。

１－３　まとめ

■　茶道として継承すべきこと

団体のアンケート結果から、「流派等に代々伝わる型や技（点前・作法)」「茶事・茶会の実践（お茶を媒介として、時間や空間、価値観を共有すること)」「茶室・露地などの伝統的な和の空間」「茶道具」「茶道における自然観、精神性、芸術性」それぞれの重要性が具体的に見えてきた。およそ以下のとおりである。

・点前・作法は茶道の根幹であり、稽古の積み重ねによって「型」の習得を超えて、精神性を帯びていくもので、型や技には心の持ち方、道具の扱い方の習得も含められている。これを通じて、茶の心を学び、伝えていくことが重要。

・茶道は「もてなしの文化」といわれるように、亭主が心を尽くし、おいしいお茶を点てて客人をもてなすことを眼目としており、茶事・茶会の実践はまさにその場となる。茶事・茶会とは、単なる時間や空間の共有だけでなく、価値観の共有や主客の心の和といった人同士のコミュニケーション、人間形成を図る手段ともなる。

・茶室・露地などの伝統的な和の空間は、趣向ある茶事・茶会を行うための重要な場であるとともに、茶道具は、茶席に応じて取り合わせ等が変化し、茶道の精神を理解するのに欠かせない。また、茶道具は茶道の価値観等を体現しつつ、工芸品としても高い芸術性を持つものである。

・自然観でいえば、「日常」を大切にし、季節や歳時とともにあること、精神性でいえば、「禅」との深い関わりや、日本人が大切に受け継いできた「和」の心を尊ぶこと、芸術性でいえば茶道具に見る伝統工芸の粋、茶室・露地の伝統建築、和装の装いや懐石料理や和菓子の洗練など、総合芸術ともいうべき文化の凝縮がある。これらは茶道の継承のために切り離すことができない、重要な要素として、次世代へ継承すべきと考えられている。

■　茶道団体が認識する課題

茶道の伝承や普及啓発に向けて、日々の稽古や、研修会、講習会を重ね、茶事・茶会を催すなど、団体の活動を行うとともに、会員の高齢化や茶道人口減少に対しては切実に捉え、学校や地域との連携や一般向けの広報に積極的に取り組むなどの対応を行ってきているが、その上で、現状団体が認識している課題をまとめるとおよそ以下のとおりである。

・茶道人口の高齢化、減少の中で、点前、作法を伝えながら、技術を継承・向上させていくことは難しく、茶道の本質的な部分は、言葉や形として目に見えにくいため、道具や型にとらわれてしまいがち。

・一方、次世代への継承という点では、入門に当たってのハードルを下げて、若い層を取り入れていくことが必要で、学校や地域活動での実践が行われているが、規模が大きく、イベント性が強いものになりがちで、本来の茶道の心が伝わりにくい。

・また、外部環境として生活様式や価値観の変化、趣味の多様化、社会全体でのゆとりのなさ等で、茶道をたしなんでいく環境が失われつつある。内部環境としては、伝統文化の継承と

いう側面もあるため、変革に対して保守的である。なお、一般向けの広報に積極的に取り組むなどの対応はされ始めている。

・茶道を成り立たせる茶道具や和の空間といった物質的なものについては、コストの高さから所有・維持管理が難しくなっている。産業としても成り立たなくなりつつあり、生産技術が継承されない懸念がある。

２節　茶道教室の活動について

２－１　茶道教室へのアンケート調査の実施概要

茶道教室において、茶道の担い手を育てるために、どのような指導を行っているか、どのような普及活動等を行っているかをより詳しく捉えるため、選択式と記述式を複合化したアンケート調査を実施した。概要は以下のとおり。

■　調査設計

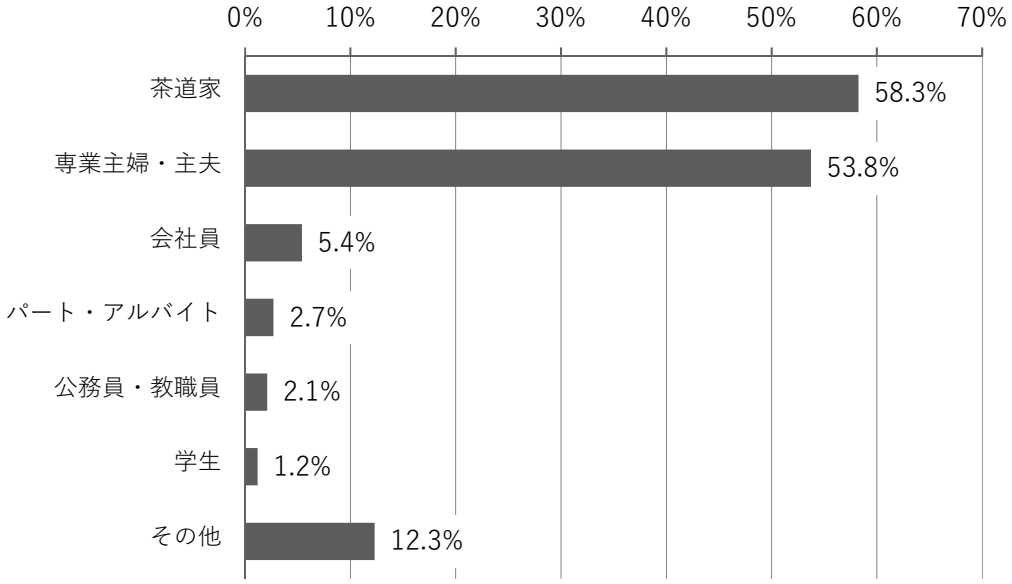
調査方法	郵送によるアンケート票の配布、郵送又は電子メールでの回答
調査対象	茶道教室
調査期間	2020 年 10 月 8 日（木）～2020 年 11 月 6 日（金）
回収数	591 教室
設問文	Ｑ１：教室の概要 Ｑ２：教室の活動状況について ① 指導者の人数 ② 指導者の属性 ③ 教室で指導を受けている人数と属性(年齢別・男女別) Ｑ３：教室での指導について ① 指導内容 ② 指導にあたり利用している教材 ③ 茶道の教育や指導の目的 ④ ③の目的達成にあたり行っている教育や指導内容、工夫点 ⑤ ④の教育や指導内容の効果や成果 Ｑ４：教室の運営について ① 生徒の募集方法 ② 教室見学や体験する機会の提供等 Ｑ５：教室外との関わりについて ① 教室の外で行う活動内容 ② 地域コミュニティ以外で、連携している団体や組織 ③ 教室所在地の地域コミュニティとの連携

２－２　茶道教室へのアンケート調査の結果概要

（１）　教室の活動状況

①　指導者の属性

指導者の属性については、「茶道家」が 58.3%と最も多く、次いで「専業主婦・主夫」が 53.8%となっている。

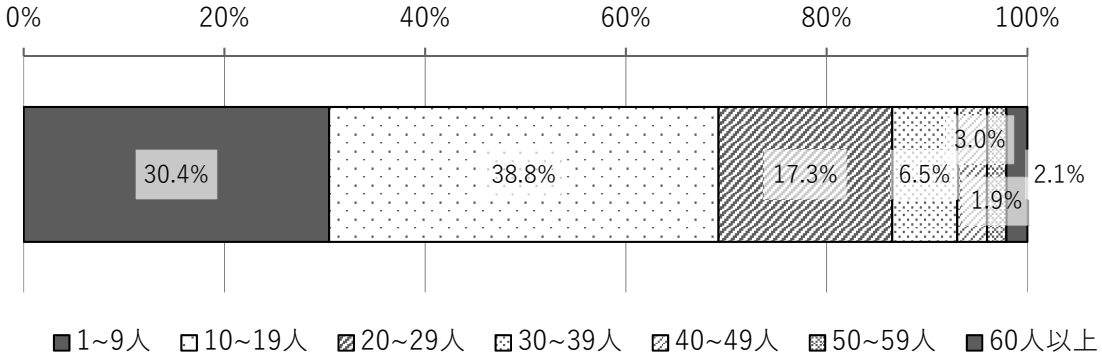


(N=333)

（その他の回答）
自営業・自由業、会社役員、無職　等

②　生徒の人数

生徒の人数については、生徒数 10～19 人が 38.8%、生徒数 9 人以下の教室が 30.4%となっている。



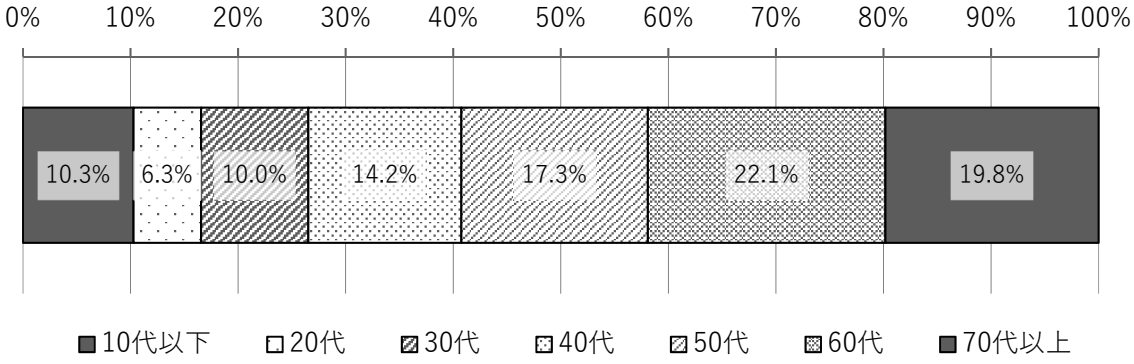
(N=572)

③　生徒の属性

【年齢構成】

生徒の年齢構成については、「60 代」が 22.1%、「70 代以上」が 19.8%、となっており、高年齢層の生徒が多くなっている。

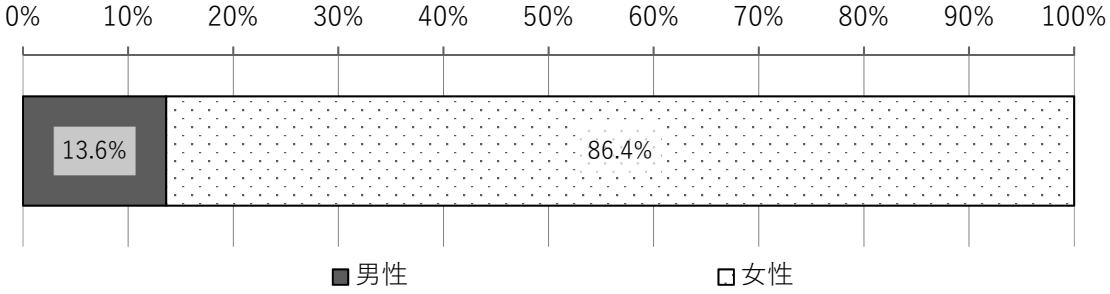
また、「20 代」が 6.3%と最も少なくなっている。



(N=10,135)

【性別構成】

生徒の男女比については、「女性」が 86.4%、「男性」が 13.6%と女性が圧倒的に多くなっている。

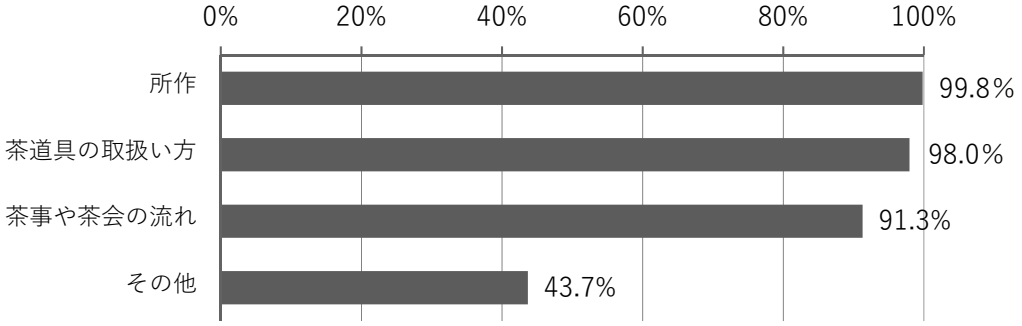


(N=9,805)

（2） 教室での指導について

① 指導内容

指導内容としては、「所作」が 99.8%、「茶道具の取扱い方」が 98.0%、「茶事や茶会の流れ」が 91.3%となっており、どの項目もほぼ必須となっている。



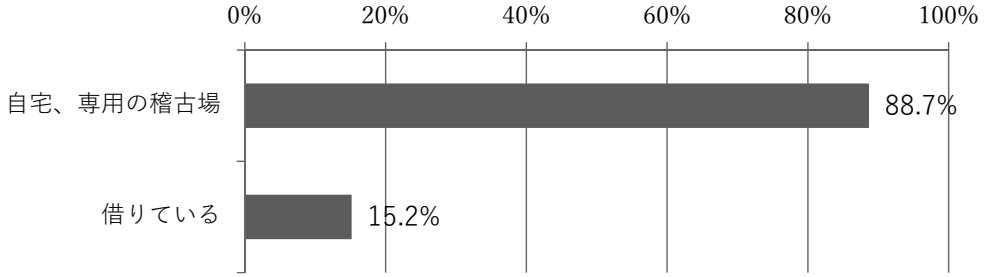
（N=586）

（その他の回答）

精神性、笑顔、お茶の歴史、着付、花、料理、四季の行事、香、焼物体験、禅語の解説、日本伝統文化、陰陽五行の世界、茶室の知識、楽しい仲間作り、茶道検定、和漢朗詠集等の和歌、仏教について、子育て、学校の宿題、掃除　等

② 教室の場所について

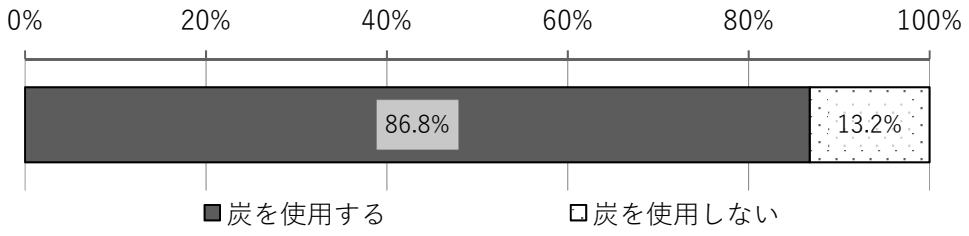
「自宅、専用の稽古場」が 88.7%、「借りている」が 15.2%となっている。借りている場合の具体的な場所は、会議室、ホテルやビルの一室、文化センター、公民館、寺、学校、幼稚園、茶室、個人宅などであった。



（N=566）

③　炭の使用

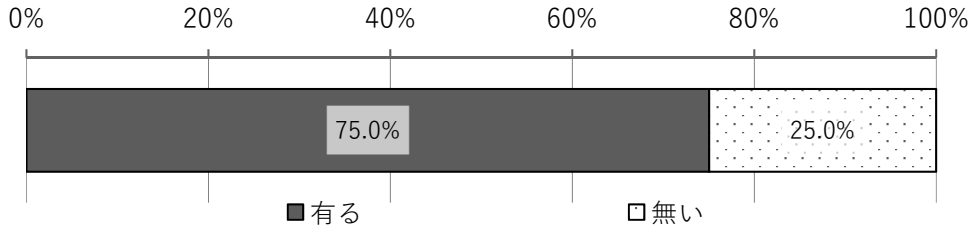
「炭を使用する」が 86.8%、「炭を使用しない」が 13.2%となっている。



(N=559)

④　指導教材

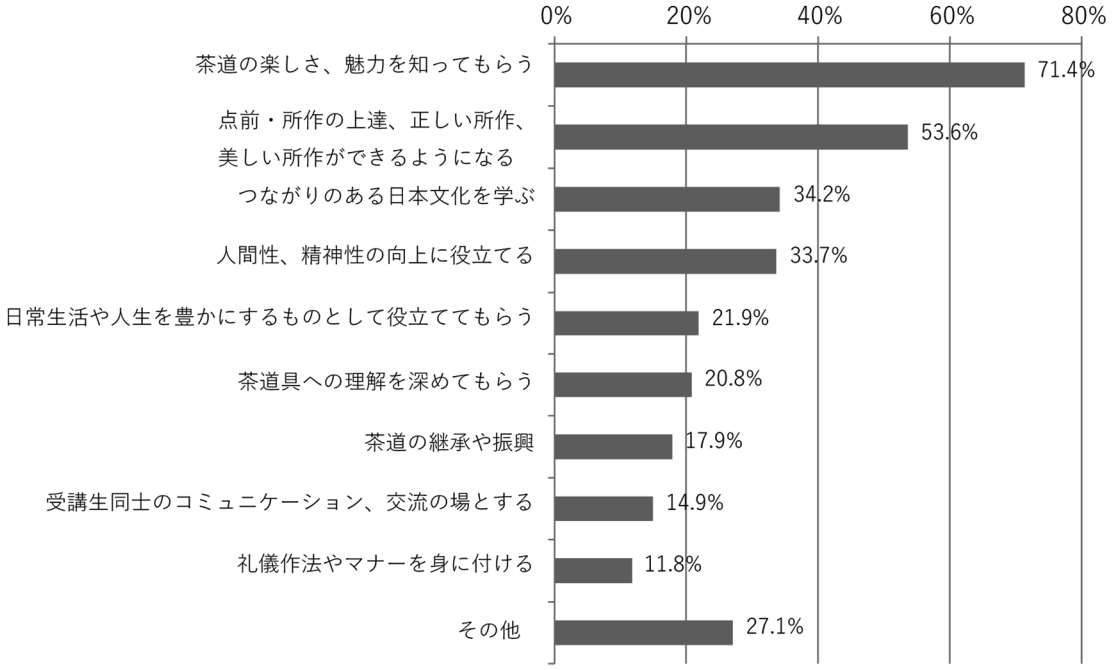
指導教材が「有る」が 75.0%、「無い」が 25.0%となっている。有る場合は、具体的には団体が発行する書籍や学校の教本、そのほか市販の教材やテレビの講座などであった。



(N=533)

⑤　教室等での茶道教育が行われる目的

茶道教室での教育目的としては、「茶道の楽しさ、魅力を知ってもらう」という趣旨の回答が最も多く、次いで「点前・所作の上達、正しい所作、美しい所作ができるようになる」が回答されている。



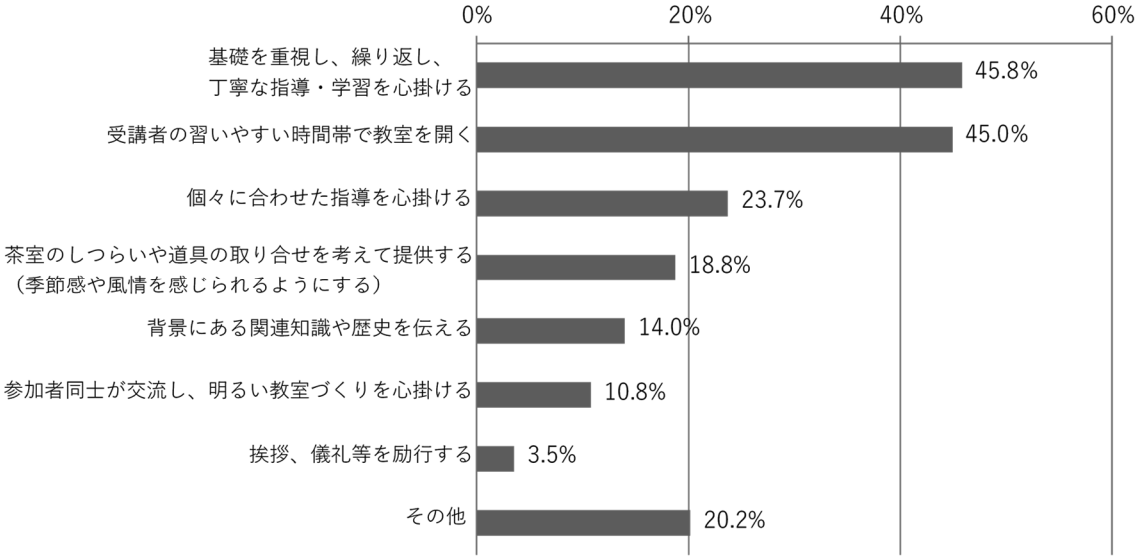
（N=576　※自由回答を分類）

（その他の回答）

- 練習や努力の大切を学び、達成感を得てもらう
- 集中力等を身に付ける
- 指導者の育成や師範資格の獲得を目指す
- 和服を着たり、着る楽しみを味わう
- 茶道を通じた国際交流につながる　等

⑥　目的を達成するために行っている教育や指導内容、工夫点

目的達成のために行っていることとしては、「基礎を重視し、繰り返し、丁寧な指導・学習を心掛ける」という趣旨の回答が最も多く、次いで「受講者の習いやすい時間帯で教室を開く」「個々に合わせた指導を心掛ける」といった回答が多く見られる。



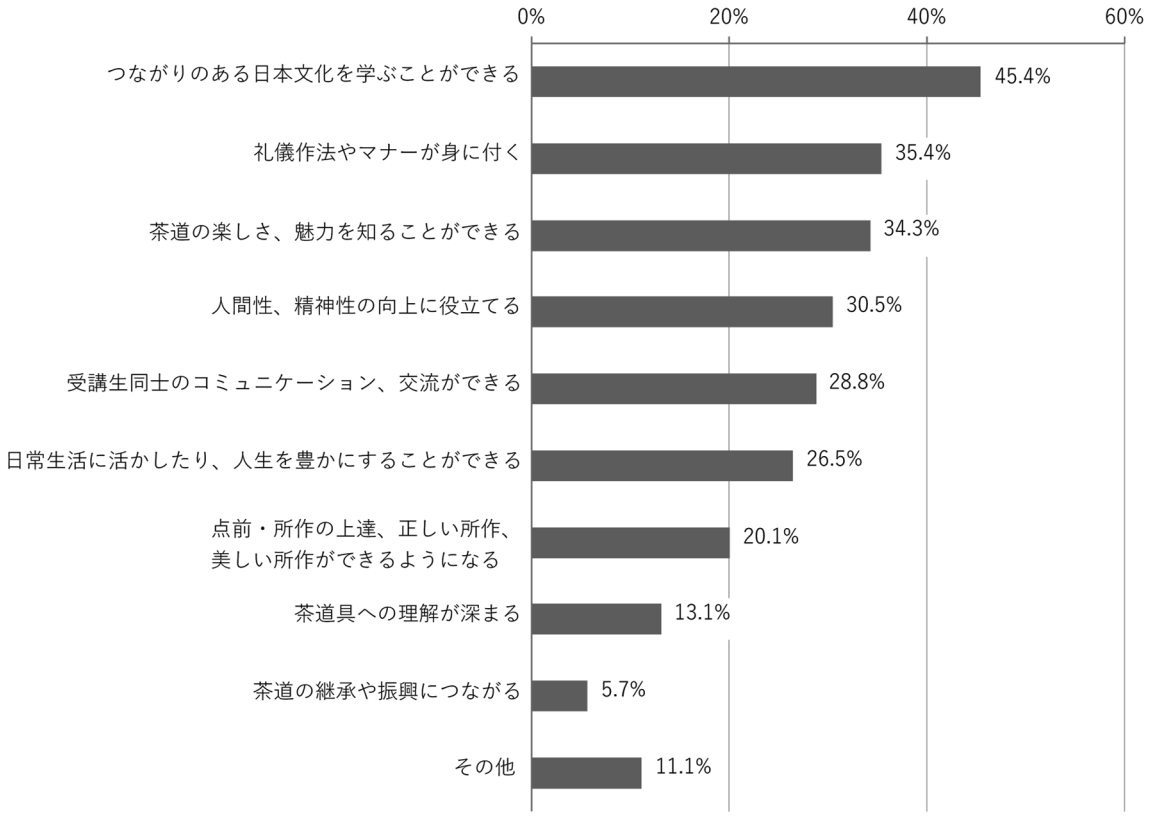
（N=401　※自由回答を分類）

（その他の回答）

- 資格取得等の目標をつくる
- 上達を認め、やる気を引き出す
- 受講生の保護者・家族等を招待する
- 同世代ばかりではなく、多世代でそれぞれの役割を連携しながら行う
- 所作がスムーズに行えるように身体を鍛える
- 自ら手本を示し、一緒に実践する
- 茶道に関する情報提供、茶事・茶会等への参加の勧めを行う　等

⑦　教育や指導によってもたらされる効果や成果

教育によってもたらされる効果については、「つながりのある日本文化を学ぶことができる」という趣旨の回答が最も多い。次いで「礼儀作法やマナーが身に付く」、「茶道の楽しさ、魅力を知ることができる」が多く回答されている。



（N=548　※自由回答を分類）

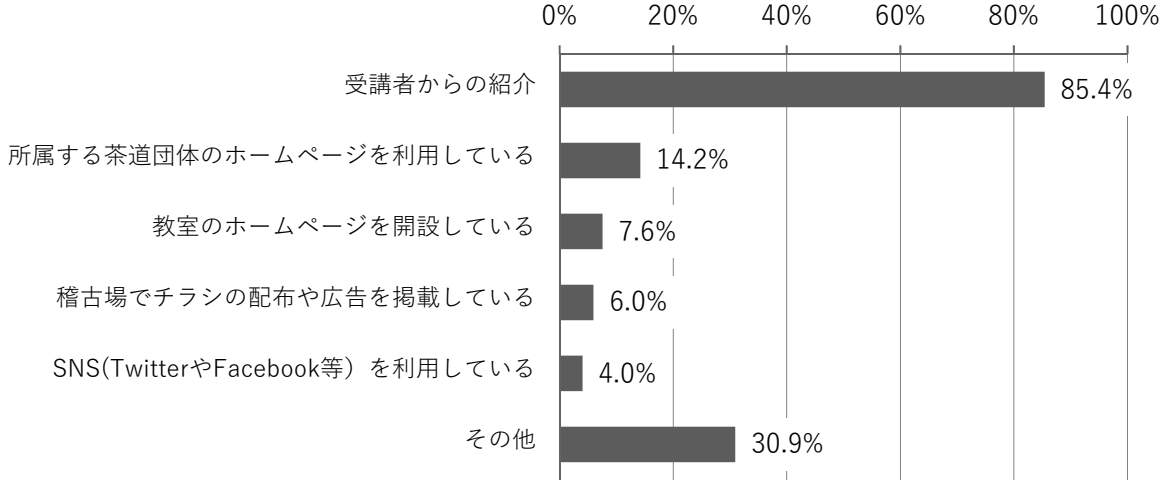
（その他の回答）

- 茶事・茶会に参加したり、もてなしたりすることができる
- 和室での振る舞い方が分かる、日本建築への理解が深まる
- 和服を着たり、着る楽しみを味わうことができる
- 立ち座りの動作をするため身体が鍛えられる、呼吸が整うため健康に良い
- 練習や努力の大切を学び、達成感を得ることができる
- 集中力が身に付く　等

（3）　教室の運営について

①　生徒の募集方法

生徒の募集方法としては、「受講者からの紹介」が 85.4%と最も多く、次いで「所属する茶道団体のホームページを利用している」が 14.2%となっている。



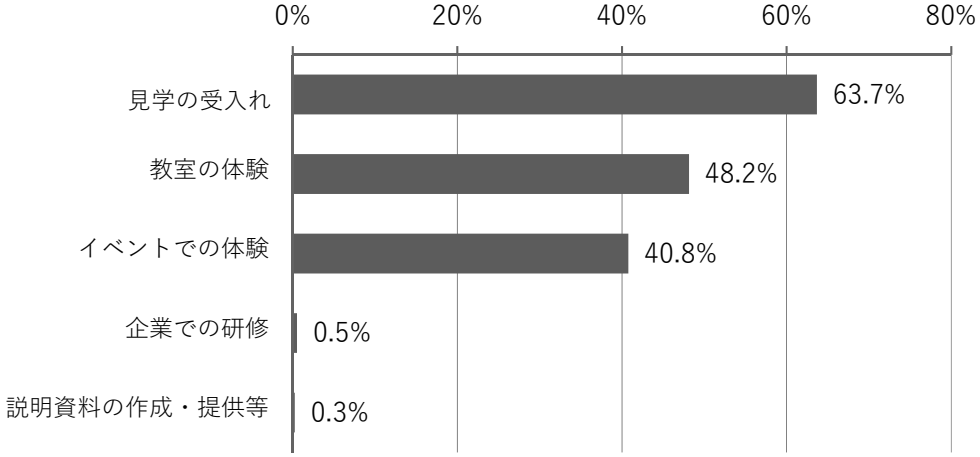
（N=569）

（その他の回答）

講師同士の紹介、本部からの紹介、活動している場所（寺など）からの紹介、指導者が所属する企業の社内報、学校へのチラシ配布、市の広報への掲載、スポンサーを通じた紹介　等

②　教室見学や茶道を体験する機会の提供等

教室見学や茶道体験の機会の提供等については、「見学の受入れ」という回答が 63.7%と最も多く、次いで「教室の体験」48.2%となっている。

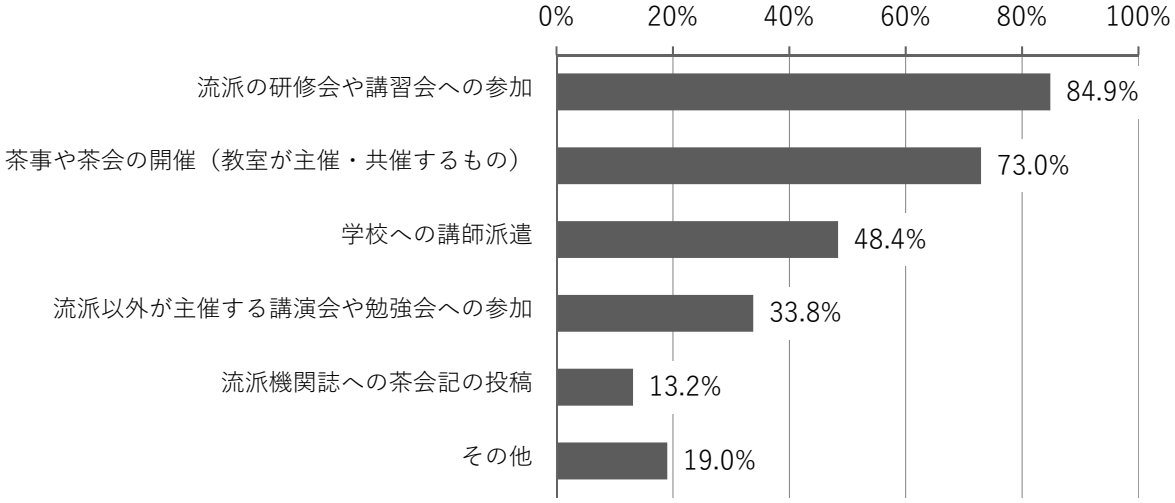


（N=265　※自由回答を分類）

（4）　教室外との関わりについて

①　教室外での活動

「流派の研修会や講習会への参加」が 84.9%と最も多く、次いで「茶事や茶会の開催」が 73.0%となっている。



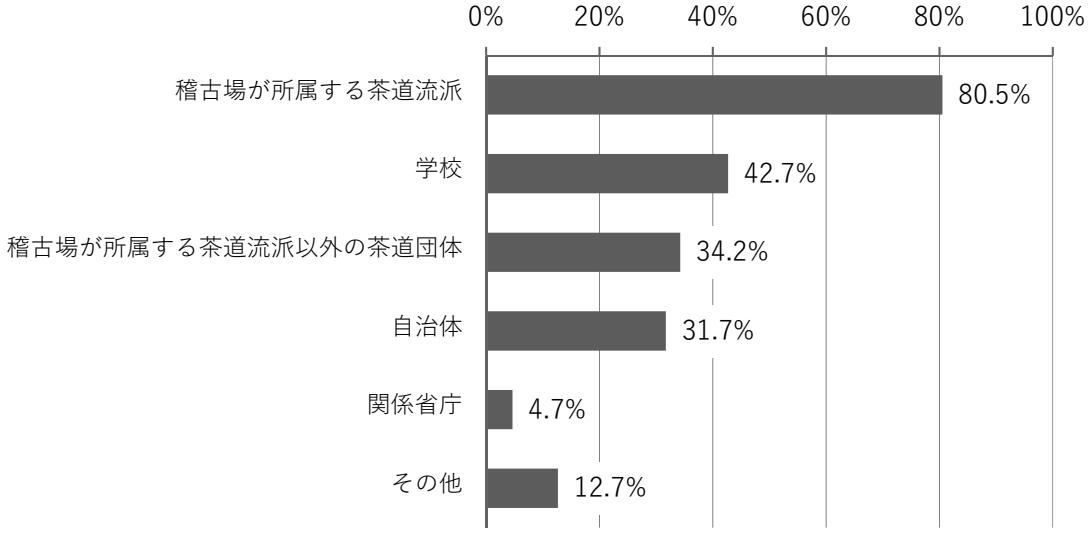
(N=562)

（その他の回答）

窯元めぐり・作陶、献茶式への参加、美術館訪問、着付、本部へ奨励賞の依頼（家元より贈ることができる）、地域活動（地元のイベントへの参加、地域の保育園での指導）、舞台の前後でのお茶席、ギャラリーで基本点前レクチャー、メディア取材対応、行政の依頼による茶道デモンストレーション、国際協力活動、茶道文化検定受験、客船内において簡単な茶道体験、職場で茶道の接待、老人ホーム茶会　等

②　外部組織との連携状況

「稽古場が所属する茶道流派」が 80.5%と最も多く、次いで「学校」が 42.7%、「稽古場が所属する茶道流派以外の茶道団体」が 34.2%となっている。



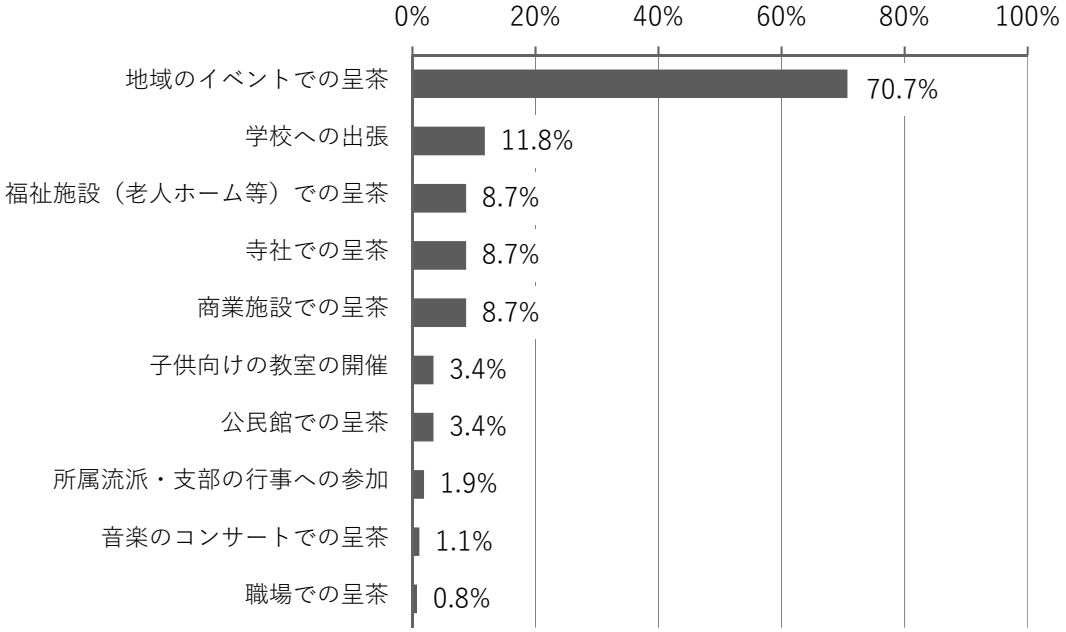
(N=473)

（その他の回答）

企業、病院・介護施設、幼稚園・こども園、町内会、敬老会、祭り実行委員会、青年会議所、商工会、ボーイスカウト、寺社の献茶会、国際協力団体、JA、カルチャーセンター、ホテル、美術館、デパート、公民館・福祉会館　等

③　地域コミュニティとの連携状況

地域コミュニティとの連携状況として、「地域のイベントでの呈茶」が 70.7%と非常に多くなっている。



（N=263　※自由回答を分類）

（5）　稽古上の課題について

運営上の課題としては、指導者・会員の減少と高齢化、道具の費用負担や会費の減収がもたらす財政の悪化、道具の生産が減っていることに起因する道具の確保、会場（とくに炭を用いた稽古を行うことができる火気禁止ではない茶室、費用の安い公共施設の会場）確保の難易度上昇、情報発信不足、稽古や茶会の時間の調整（子育て世代の忙しさや、平日では会社員の会員の参加が困難）といった課題があった。

２－３　まとめ

■　教室の構成

・生徒の年齢構成は 60 代、70 代が最も多く、女性が圧倒的に多いのは、「社会生活基本調査」やこれまでの文化庁調査と同様の傾向である。

■　教室での指導目的と効果や成果

・所作（点前）を軸として、茶道具の取扱い方、茶事や茶会の流れについては、回答があった教室のほとんどが指導を行っている。
・教育や指導目的としては、点前・所作の上達や正しい所作の習得を基本として、その先にある茶道の楽しさや魅力を知ってもらうことをより重視している。
・型を守り伝え、茶事・茶会を実践することで、そこに内包されている日本文化のつながりを学ぶ機会が生まれている。

■　教育や指導内容における主な工夫点

・受講者の習いやすい時間帯で教室を開くといった時間の融通を利かせることや、時間や回数を増やしたり、個人の希望・レベルや個性に合わせた丁寧な指導といった生徒を最優先に考えた取組が多く見られる。
・自然の有り様や季節感を大切にしたしつらえや背景・関連知識を合わせた指導により、効果を高めながら稽古の質を向上させるといった取組が見られる。
・稽古場に出入りする様々な人同士の交流や礼儀を尊重した明るい雰囲気づくりによる教室の調和の形成が目指されている。

■　その他

・団体アンケートで課題として挙がった「学校との連携状況」は 4 割程度で、「学校への講師派遣」は約 5 割であり、また、地域コミュニティとの連携状況として、「地域のイベントでの呈茶」が 7 割を超えている。これらのことから、外部と関わる活動が多く実践されていることが分かる。
・運営上の課題としては、指導者・会員の減少と高齢化、道具や会費等の費用負担、材料や会場確保の難易度上昇、情報発信不足、稽古や茶会の時間の確保といった課題があった。

結　本調査研究事業のまとめ

1　茶道で継承されてきたこと

16 世紀、茶室において軽食と茶道具鑑賞を伴う喫茶の形式、「茶の湯」が成立し、千利休の没後には、茶人の個性に基づく多様な茶の湯が展開していった。そして、それぞれの流派を率いる家元組織が形成され、江戸時代中期頃までは分派が繰り返されながら広まっていった。また、精神修養を目的とする茶の湯として、「茶道」の呼称が用いられるようになった。江戸中期以降、家元制度は、多くの権限を後嗣にのみ継承させる方向へと転換していったが、このことは権能の集中という面を持つ一方で、点前・作法の確実な継承を目指すものでもあったといえ、組織拡大に伴って、中間教授者層が整備されていった点からも裏付けられる。

明治維新によって、流派の家元が大名家からの経済的支援を失う一方、明治時代以降は女子教育と結び付いた結果、男性中心であった茶道が、次第に女性のたしなみとして認識され、かつ、女性が師範となって生計を立てる道が切り開かれた。また、外国人の接待を想定した立礼式の創案など、様式面で新たな工夫も取り入れられた。このように、時代の変化に柔軟に応じていきながら、茶道は今日まで継承されてきている。しかしながら、時代の変化に応じても、点前・作法は基本的に茶室などの畳の空間を前提として現代まで伝えられ、また、その美意識をはじめとする価値観は代々受け継がれてきた茶道の精神によりながら継承が図られている。さらに、現代において、茶道は、正座やお辞儀の仕方、襖の開け方や歩き方などを身に付ける機会ともなっており、日本の特徴的な生活文化を包括し、現代日本人に伝える役割も担っている。

これらは、茶道団体のアンケート結果からも明らかなように、茶道団体が点前・作法といった流派等に代々伝わる型や技を大切に守りながら活動を続けていることによって継承されてきている。型や技の伝承は、単に形式的なものとしてではなく、それらの稽古を通じて精神修養に結び付くことが求められ、また、これらの集大成として茶事・茶会が実践されている。亭主が客をもてなし、一服のお茶を通じて亭主と客とが心の交流を豊かに深めることが茶事・茶会の目的であり、茶道の目指すべき姿とされている。

2　茶道具や茶室の継承

茶道具は、当初、唐物の優品を名物としてきたが、珠光や千利休以降は、これとは対照的に下手に分類される、後に「わび」と呼ばれるような美意識と結び付いたものが好まれるようになった。茶道具には、濃茶と薄茶の点前に用いる茶入・釜・茶碗・茶杓等、炭点前に用いられる炭斗・香合・火箸・灰器等があり、工芸の種類としては、鋳物、陶磁器、漆器、染織等、ほぼ全ての日本工芸のジャンルを網羅しているといわれている。今日において茶道具は、日本の伝統工芸の粋を集めた芸術性の高い作品としても評価され、美術館等で展示が行われている。また、それらのうち古作の茶道具は、国宝や重要文化財に指定されているものもある（国宝「志野茶碗（銘卯花墻（うのはながき））」など）。

茶道は、その一つの特徴として、茶道の道具を専門に製作する「職方」等といわれる職人が

存在していることが知られている。茶碗等、職方以外が製作した道具を用いることもある。

これらの茶道具は、主に茶事・茶会の際に用いられる。茶道具の取り合わせ等が亭主の趣向に応じて考えられ、準備される。ところが、現在においては、正式な茶事・茶会を行う機会が減少しており、また、茶会を簡略化して実施されることもあるなど、茶道具をお披露目する機会が徐々に減少している。さらに、茶道具は、所有や保管のコストの高さに加え、若年層が関心を持たなくなったこと等も指摘されている。

このように、本格的な茶道具を用いる機会が減っていることは、茶道具製作を行っている職人等の生業の継続に多大な影響を与えるばかりか、その製作技術の継承の上でも切実な問題であり、一度その技術が途絶えると、復興するのは非常に困難である。希有な例として、17 世紀頃までに一度途絶えた「芦屋釜」が、平成に入り、地域活性化に向けたふるさと創生の一環で途絶えた技術の復興を図っているが、需要がなければ今後の継承は困難となってくるため、今後の需要の掘り起こしについては、ほかの茶釜製作者とも共通する課題がある。

それとともに、茶道具の取り合わせ等は、わびなどの美意識を表すものとされており、実践的に道具に触れていかない限りは、表現していくことが難しいものである。茶室において本格的に茶道具を用いていくことによって、それらの美的感覚が磨かれていくため、茶道具への関心の喚起や使用機会の確保等は課題となっている。

茶室についても、国宝・重要文化財に指定されたものが数々存在し、国宝の「妙喜庵書院及び茶室（待庵）」もその一例で、文化財に指定された茶室の保存・継承の重要性は言うまでもないが、茶道を茶道たらしめる和の空間でありながら、現在は、茶室そのものの数が減っており、茶事・茶会の会場の確保は、他の利用者やコストの面で各団体の大きな悩みの種となっていることも団体アンケートから切実に受け取れた。このことへの対応として、既に指定等を受けている文化財以外にも、現存する茶室に財政的な支援を行うことによって、それらの保存・継承を図るとともに、今後、公的施設において、和の空間を積極的に設けること等によって、茶事・茶会の機会が設けやすくすることなども、行政に期待する役割として挙げられていた。また、これに関連することとして、公的施設等から会場を借用する場合、火気の使用を不可とする場合もあり、炭を用いた稽古等を行うことが難しいなどの声があがっている。

このほか、茶炭などの原材料についても、近年生産量が大幅に減っていることなども分かっており、茶道具、茶室、原材料は、茶道の継承のために欠かせないものであるにもかかわらず、生活環境の変化、茶道人口の減少等の影響を著しく受けており、存続が危ぶまれている。今後一層その維持や継承のための取組が求められているところである。（茶道具の課題等の詳細は巻末参考資料参照。）

3　アンケート結果から見た今後の団体・教室活動の方向性と課題

国民意識調査では、茶道経験者が茶道に興味を持つきっかけとして、お茶が好きであるということ、お茶を飲んで楽しむことができるという魅力があることが挙げられ、また、礼儀作法や伝統文化への造詣が深まることなどを魅力として挙げていた。茶道の経験がないが、興味関心がある者は、条件等が整えばやってみたいと答える割合が高く、その「条件等」としては「誰もが気軽に参加できる体験教室・イベントがあれば」、「行きやすい時間帯で通える教室があれ

ば」等が高い割合で挙げられた。一方、経験をしたことがなく、かつ、興味関心がない者は、茶道に対して、「礼儀や作法等に厳しそう」、「普段の生活に必要性を感じない」、「教室の月謝や道具等にお金がかかりそう」といったマイナスのイメージを強く持っていることが分かった。これらのことから、茶道人口を増やしていくためには、気軽に参加できる体験教室やイベントを実施する等、茶道の楽しい側面を知ってもらう機会を設け、興味を持たない者も含めて、入口の間口を広く取るような取組が有効であることが分かった。

茶道指導者へのアンケートでは、その指導目的として、茶道の楽しさや魅力を知ってもらうことが最も上位に上がっており、また、教育の成果や効果として、つながりのある日本文化を学ぶことができる、礼儀作法やマナーが身に付くといったことが上位に挙がっており、国民意識調査の茶道経験者の回答の方向性とほとんど齟齬のないものとなっていることが分かった。教室外での活動も、茶事や茶会の開催や地域のイベントでの呈茶などを行っており、地域コミュニティでの存在感はある程度出しながらも、高齢化や会員の減少が課題となっている中で、生徒募集の方法が受講者からの紹介である割合が高いなども課題である。併せて、国民意識調査で月謝等お金がかかりそうなことが、興味を持たない人のイメージとして比較的高い割合だったことからも、月謝等の明瞭化について検討していくことも有効なのではないかと考えられる。

茶道団体のアンケート調査では、大事に考えている団体としての活動を着実に継続しようとしつつも、茶道人口の減少や指導者や会員の高齢化、環境の変化等によって様々な活動の制約や負担の増加等が生じていることも明らかとなった。細かくは、団体によって違いがあるが、全体の傾向としては、本格的な茶事・茶会の実践の機会は減少傾向にあり、このことは、点前・作法の確実な継承を困難にしていく可能性がある。実際、地方の支部組織においては、流派内部での組織横断的な活動を要望しているところもある。

会員獲得だけでなく、会員内での情報共有のため、広報活動を重視している団体が多かった。地域で発行する広報誌への掲載も含めて、紙媒体による発信とオンラインによる発信とを使い分けながら広報活動を行っていることが実を結び、会員獲得等につながっている例もある一方で、高齢者に向けてはオンラインでの広報が受容されにくい部分もあり、対象者等によって媒体を変える等の有効性は一定程度認識されながらも、広報に携わることができる会員が限られている、デザイン性を持たせようとする場合は費用がかかる等、広報活動を充実するには課題とするところが多いことも分かった。

4　茶道を次世代に継承するために

茶道団体は、家元をその継承の頂点としつつ、茶室・露地などの伝統的な和の空間において、茶事・茶会を催し、亭主と客が、一服のお茶を通じて時間や空間、価値観を共有することによって、心の交流を深めるという究極の目的に辿り着くために、点前・作法の稽古等を重ねている。亭主のもてなしには美味しいお茶の提供のみならず、四季に応じた、あるいは、行事に応じた茶道具の取り合わせの工夫等も含まれる。

茶道は、流派等によって代々伝えられてきた点前・作法といった型や技が無形の文化的所産であると同時に、茶室、茶道具は、国の有形文化財の中でも国宝や重要文化財として指定等されているものも少なくなく、茶事・茶会に応じて、茶室のしつらえや茶道具の取り合わせを変えること等によって、様々な世界観を創り出すことができることなどから、有形・無形を超えた総合性を持ったものとして捉えることができる。

また、茶道はその自然観、精神性、芸術性が日本独自の文化として古くより海外からの訪問者の目に留まり、また、岡倉覚三など日本人が日本文化を語る上でも大変重要な役割を果たしてきた。現在でも、海外への日本文化の普及や、国際文化交流のため、茶道家が多く海外派遣されており、海外からの関心も高い。加えて、茶道の普及や振興に取り組んできた茶道家が国の表彰等を受けていることなどから、我が国の芸術文化として茶道が果たしている役割の大きさがうかがえる。

しかしながら、近年は、茶道人口の減少や指導者の高齢化、会員の高齢化が課題となっている。また、畳や床の間といった和の空間が急速に失われつつある日本の現代社会において、正座やお辞儀の仕方、襖の開け方や歩き方などを身につける機会もなくなってきている。その上、昨年度からは、新型コロナウイルス感染症の拡大により、対面での稽古の実施、茶事・茶会の開催等が中止・延期を余儀なくされ、現在も稽古再開の見通しが立たず、茶道の継承に危機感を募らせる状況が生じている。

茶道人口の獲得の面からは、それぞれの団体や教室において、３で述べたような対応などが考えられるが、国や地方公共団体においても、上記のような茶道の役割を踏まえ、適切に評価し、支援していくことが必要である。

評価の観点からは、これまで同様に茶道家等への顕彰に加え、無形文化財としての保護の観点から、登録無形文化財制度の活用等も早急に検討していく必要がある。その際には、これまで各団体や教室等で取り組まれてきた自主的な活動を妨げるようなことのないよう、配慮していくことも必要である。国や地方公共団体の保護措置を講ずるに当たっては、民間活動における自主的な取組を尊重しつつ、茶道の普及・啓発等の支援について、流派にこだわることなく行うなどが考えられる。一方で、文化芸術基本法に基づく生活文化の振興という観点からも、日本の特徴的な生活文化を包括し、現代の日本人に伝えることのできる茶道を活性化させる新たな取組への支援策の実施も検討が必要である。

これらを踏まえ、茶道を次世代に継承するために、家元を中心とする団体や教室における自主的活動を尊重しつつ、コロナ禍における臨時的措置も含め、国や地方公共団体においても、適時適切な支援を図っていくことが重要である。

参考資料　文化創造アナリスト(茶道)及び有識者会議検討経過

1　文化創造アナリスト

本調査研究事業は、茶道に関する豊富な識見を有する者を「文化庁文化創造アナリスト(茶道)」として委嘱し、調査研究及び報告書に対して助言等を頂いた。

【名簿】※　50 音順、敬称略、令和 3 年 1 月 21 日現在

宮武 慶之　　同志社大学京都と茶文化研究センター 共同研究員

依田 徹　　遠山記念館 学芸課 学芸課長

2　有識者会議(文化創造アナリスト会議)経過

(1)第 1 回有識者会議

●開催日

2020 年 10 月 5 日

●主な内容

・「生活文化調査研究事業(茶道)」概要について

・「生活文化調査研究事業(茶道)」アンケート内容について

・今後のスケジュールについて

(2)第 2 回有識者会議

●開催日

2020 年 12 月 23 日

●主な内容

・「生活文化調査研究事業(茶道)」報告書(案)について

(3)第 3 回有識者会議

●開催日

2021 年 1 月 21 日

●主な内容

・「生活文化調査研究事業(茶道)」報告書(案)について

3　受託事業者

本調査研究事業はランドブレイン株式会社が受託事業者として以下の業務を行った。

・茶道の歴史及び茶道具に関する文献等の調査

・茶道団体及び茶道教室アンケートの発送等作業、茶道具業者のヒアリング補助

・有識者会議等の調整、運営などの業務

・報告書（案）の作成

参考資料　茶道具について

（1）概要

茶道に用いられる道具等は多岐に渡るが、茶事・茶会における意味や役割から、大きく以下の分類で捉えることができる。

茶室をしつらえ、茶を点てるために用いる道具と、茶会の目的でもある茶そのもの、また茶を美味しく飲むために客へともてなす菓子（場合によっては、懐石等軽い食事）、茶を点てるために湯を沸かし、茶室の温度調節をするための炭といった消耗品がある。

＜茶道具の分類＞

	分類	茶会・点前における意味・役割	代表的な道具
道具	床荘り	茶席の趣旨や目的、亭主の心構えや季節感といったテーマを演出する	掛物、花入　等
	釜・風炉・炉	茶会を催すことを「釜を懸ける」というように、釜は茶会を象徴する道具であり、風炉・炉と併せて茶室の空間の在り方を決める中心となり、その姿に加え、湯の沸く音も茶室の演出の一つとなる	釜、風炉、炉　等
	台子と皆具・茶碗・茶器・茶杓	茶席の雰囲気や格を演出し、亭主の好みや季節感を表す	台子、水指、杓立、建水、蓋置、茶碗、茶入、仕覆、薄茶器、茶杓　等
	茶筅と柄杓	湯を汲み、茶を点てるために用いる	茶筅、柄杓、茶巾　等
	炭道具と香合	湯を沸かすための火を起こす他、茶室の温度調節、香や炭・灰の景色といった空間の演出を行う	炭道具（炭斗、羽箒、火箸、灰さじ等）、香合　等
消耗品	抹茶	茶会の目的である一服の茶を点てて飲むことそのものであり、濃茶席ではお詰め（茶の製造元）や茶銘が茶会の話題にもなる	抹茶
	菓子	客へのもてなしであり、菓子を作った店や、菓子の銘が茶会の話題にもなる	主菓子（濃茶席）、干菓子（薄茶席）
	茶炭と灰	湯を沸かす、茶室の温度調節をする、茶席の時間を測る目安となるといった役割に加え、その熾りようや白い灰になる様等も鑑賞の対象となり、茶室の雰囲気を演出する	炭（菊炭）、白炭、枝炭、風炉灰、藤灰、藁灰　等

出典：主婦の友社編『茶の湯全書』（主婦の友社、昭和 34 年）及び、淡交社編集局編『茶道具ハンドブック』（淡交社、平成 24 年）を参照し受託事業者が作成した

■ **千家十職**

茶道の各流派で、それぞれに出入りする職人が各道具で存在するが、代表的な茶道の流派である三千家の場合、特に千家好みのものをつくる職人の家柄の総称として「千家十職（せんけじっしょく）」がある。

「千家十職」とは、茶道に関わり三千家に出入りする塗師・指物師など十の職家を示している。三千家に出入りする職人は、千家十職に限られているわけではないが、千家の家元の流れを汲む茶道具を調製する家柄として公認されている。

茶道は茶室という狭い空間の中で行われる上、独特の作法が存在することから、使用する道具には工夫が必要とされること、茶人の独自の美意識・好みに沿った茶道具が求められたことから、特に千利休、千宗旦等が職人を指導したことから始まっている。

代々の家元によって、三千家に出入りする職家は数が変動してきたが、三千家の年中行事や年忌、大規模な茶会等における役割を担うことのできる千家好みの茶道具を作れる職人は限定されていることから、明治期には以下の十職となった。

＜千家十職の名称とその概要＞

千家十職	名称	概要
茶碗師	樂吉左衛門	京都において楽焼の茶碗をつくる樂家が襲名。楽焼茶碗、水指、香合、蓋置、花入など陶器を製作
釜師	大西清右衛門	京都の三条釜座に工房がある京釜師の家。釜、五徳、鉄瓶等を製作
塗師	中村宗哲	京都の型物塗師といわれる茶道具専業の塗師の家。各種棗、盆、香合、長板、棚物等を製作
指物師	駒沢利斎	棚や香合、炉縁などを製作する指物師（現在は空席）
金物師	中川浄益	錺師ともいわれ、金工の精巧な茶道具を得意とする。皆具、火箸、鉄瓶、火入、灰さじなどを製作
袋師	土田友湖	茶入の仕覆や、服紗、角帯などを製作
表具師	奥村吉兵衛	軸装や風炉先屏風、釜の敷物の一種である「紙釜敷」の製作などを行う
一閑張細工師	飛来一閑	棗や香合などの道具を納めてきた細工師。棗、長板、盆、炭斗、香合等を製作
竹細工・柄杓師	黒田正玄	茶杓、柄杓の他、台子、香合、花入など竹を使う茶道具を製作
土風炉・焼物師	西村（永樂）善五郎	土風炉、茶碗などを製作。永楽茶碗、水指、皆具、花入その他陶器を製作

出典：表千家不審菴 HP（URL：http://www.omotesenke.jp/list6/list6-3/list6-3-3/）を参照し受託事業者が作成した

＜参考＞

・主婦の友社編『茶の湯全書』主婦の友社、昭和 34 年
・淡交社編集局編『茶道具ハンドブック』淡交社、平成 24 年
・茶道資料館編『茶道具の鑑賞と基礎知識』淡交社、平成 14 年
・田中仙翁『茶道ハンドブック新版』三省堂、平成 19 年

（2）調査対象

本調査では、茶会の目的そのものである「茶」と、茶を点てるための湯を沸かす道具であり、かつ「釜を懸ける」、「在釜」といった言葉が茶会を催すことを指すように茶会の中心的な存在である「釜」及び熱源となる「茶炭」を取り上げる。

（3）調査結果

①茶（抹茶）

ア）概要及び現状

■ 起源と歴史

12 世紀後期までに、日本には中国から露地栽培の「抹茶」に湯を注いで飲む「点茶法」が伝えられ、16 世紀初期、「茶の湯」が登場した。その後、16 世紀後半に茶の湯が起こる以前より茶の生産について天皇家や将軍家からの庇護を受けていた宇治で、同時期茶園全体に葦や藁で覆いをかけ遮光する覆い下栽培が始められ、日本固有の抹茶の生産が始まった。

露地栽培による茶葉を挽いた抹茶は渋みが強いのに対し、覆下栽培では、良質な有機窒素質肥料（京都からの豊富な菜種油粕、干鰯、下肥等）を大量に供給することにより、鮮やかな濃緑色と旨味の強さを特徴とする。

17 世紀以降、宇治で生産される抹茶は徳川将軍家の庇護を受け、毎年将軍家が飲む新茶を宇治から江戸まで運ばせる「御茶壺道中」が制度化された。宇治の抹茶を製造・販売する茶師は、「合組」といわれるブレンドを行ない、京都をはじめとする茶人の好みに合わせた茶を作るなどの創意工夫を重ねた。また、抹茶の栽培は 19 世紀後期までは宇治茶師のみにしか認められていなかった。

近代に入り、宇治で培われてきた覆い下栽培の技法や、てん茶を挽いて抹茶にするてん茶機、茶葉を保存するための茶箱の生産等とともに、抹茶の生産・製造は全国各地へと広がっていった。

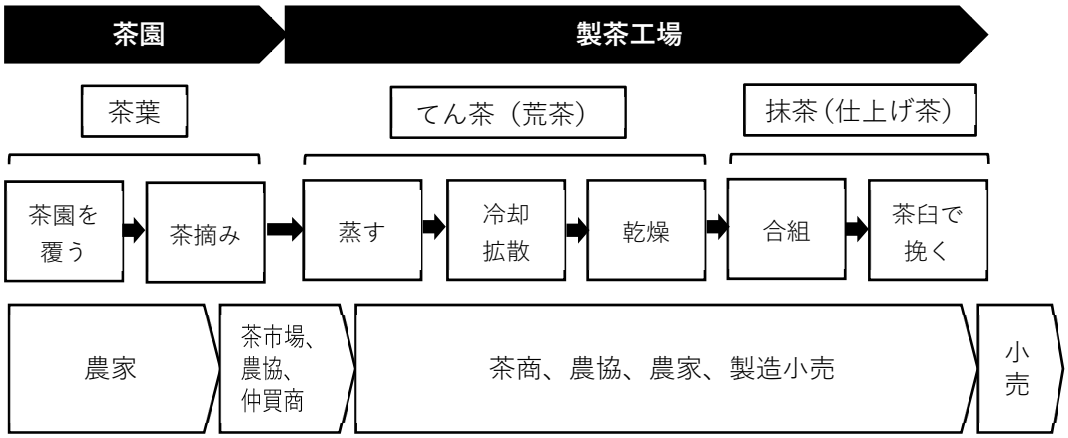
■ 原材料の種類と特徴等

抹茶は、てん茶を石臼で挽いて粉末状にしたものである。てん茶とは、茶を摘採まで少なくとも 20 日以上被覆し（覆い下栽培）、生葉を蒸して揉まずに乾燥したものである。香気は独特のかぶせ香があり、適度に香ばしい。茶葉の中でもテアニンというアミノ酸の一種（グルタミン酸の誘導体）を多く含み、リラックス・集中力を高める効果がある。

茶道で用いられる抹茶は、茶師により合組が行われ、茶人の好みに合わせて製造される。現在茶道用として使われているものは、一番茶、手摘み、石臼で挽いた高級なものが中心となっている。

また、各家元の好みで合組された抹茶については茶銘が与えられ、茶席の話題の一つにもなる。

＜抹茶の製造工程と流通＞

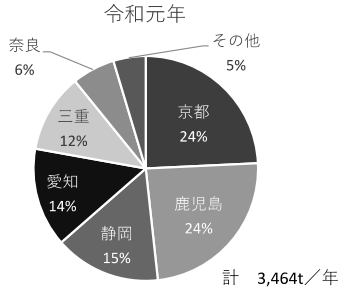


出典：全国茶主産府県農協連連絡協議会 HP を参照し受託事業者が作成した

■ **生産地、生産量等について**

抹茶の原材料であるてん茶は、令和元年では全国で年間 3,464t 生産されており、京都府が 864t と全国第１位の生産量となっている。てん茶のうち、茶道向けの抹茶の全体量を把握した統計調査等はないが、ヒアリング調査によると、８～９割が京都府、特に宇治で生産・製茶されたものが使用されており、その多くが手摘み・一番茶の高品質なものである。

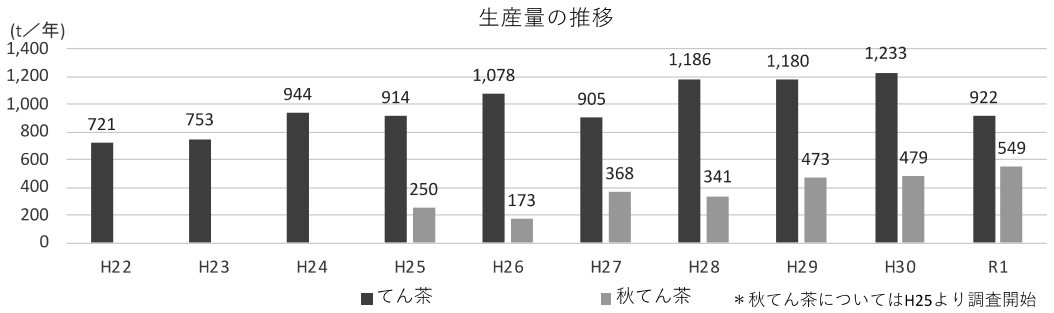
＜産地別てん茶の生産量＞



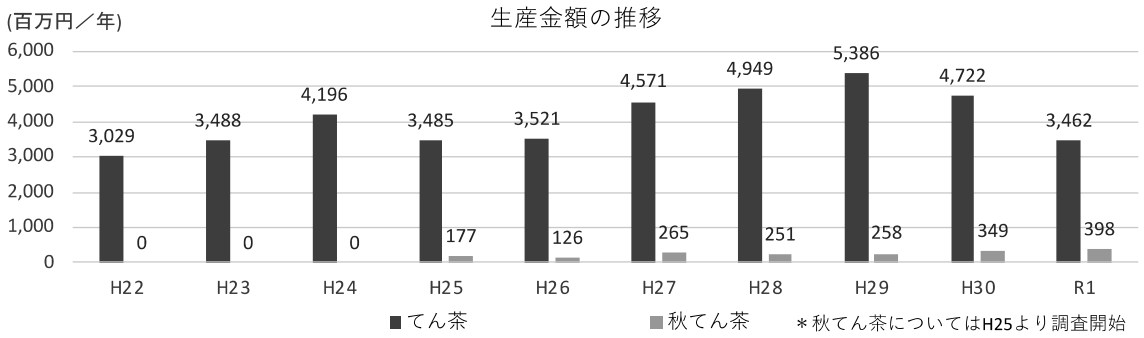
出典：全国茶生産団体連合会・
全国茶主産府県農協連連絡協議会 HP

京都府のてん茶の生産動向を見ると、生産量は平成 30 年の 1,233t／年まで増加傾向にある。また、食品加工用の抹茶となる秋てん茶の生産量については、調査が開始された平成 25 年以降概ね増加傾向を続けており、令和元年には過去最高の 549t／年となっている。この背景には、抹茶スイーツのブームにより、安価な抹茶へのニーズが高まっていることが挙げられ、秋芽を活用したてん茶生産を始める農家が京都府下においても増えている。

＜京都府のてん茶の年間生産動向＞



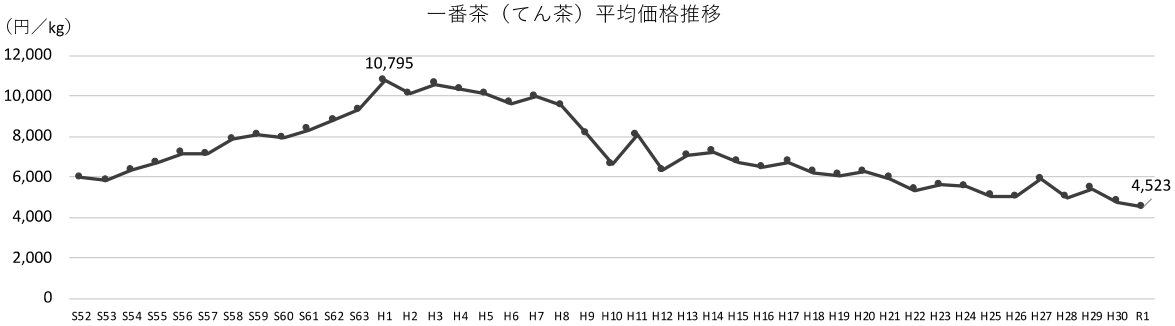
出典：「令和元年度京都府産茶の生産・流通状況等に関する資料（旧京都府茶業統計）」



出典：「令和元年度京都府産茶の生産・流通状況等に関する資料（旧京都府茶業統計）」

また、てん茶の平均価格の推移を見ると、バブル期の 10,000 円／kg 以上をピークに長期的な下降を続けており、令和元年には 4,523 円／kg となっている。てん茶の価格低下の要因は、茶道人口の減少による高級抹茶の消費の減少、消費者の茶離れ、国内不況による高級茶の贈答品需要の低迷等が挙げられる。

＜京都府のてん茶の平均価格の推移＞



出典：「令和元年度京都府産茶の生産・流通状況等に関する資料（旧京都府茶業統計）」

イ）課題

■ てん茶の生産について

茶道向けの抹茶に求められる高い品質を実現するためには、古葉や茎等の混入が極めて少ない手摘み、一番茶のみの使用、設備や肥料、手間暇を必要とする覆い下栽培といった条件が必要となる。これらの条件を満たした経営には人件費をはじめコストがかかるため、需要量が減少し、単価も低迷する中では、経営環境は非常に厳しくなっている。

また、茶園や茶商の経営者の高齢化や後継者不足も生産量の減少要因となっている。

さらに、近年では抹茶スイーツのブームを背景として、食品加工向けの安価なてん茶に対するニーズが高まっており、機械摘み・秋てん茶等、品質の劣る茶葉の生産・製造へと切り替える生産者が増えている。食品加工向けのてん茶が多く出回る中、茶道向けの抹茶の品質や付加価値をしっかりと消費者へと伝えていくことが課題となっている。

■ 茶道向けの抹茶の需要の現状について

茶道人口の減少に加え、新型コロナウイルスの感染拡大により、茶会が激減した。例年３～５月の春の献茶会の時期に、各流派が抹茶を大量に消費することで、次の年の新茶を生産する流れとなっていたが、令和元年度については抹茶の需要が大幅に落ち込んだ。ウィズコロナの新しい生活様式の中で、茶道向けの高級抹茶を飲むシーンをいかに増やし、流通量を増やしていくかが課題となっている。

また、茶園へのヒアリングでは、抹茶に対して、「苦い」、「作法が分からない」というイメージが持たれているので、まずは飲むきっかけをどのようにつくるかを考える必要があるという話も聞かれ、抹茶を飲む機会を増やすための取組が検討されている。

■ 茶道向けの抹茶の製造に係る技術の継承について

茶道向けの抹茶の生産・製造は、覆い下栽培、摘み子による手摘み、石臼挽き、茶師による合組等、伝統的な技術によって行われる。これら技術の継承は、各流派の家元が好みの味・香り・色等を出入りの茶商に求め、生産者・製造者がそれに応え、できた抹茶が流通することで可能となる。茶道向けの抹茶の流通量が減少する中、生産・製造に係る技術の継承を図る必要性も高まっている。

＜参考＞

・公益社団法人　京都府茶業会議所 HP（URL：https://www.ujicha.or.jp/）
・全国茶生産団体連合会・全国茶主産府県農協連連絡協議会ＨＰ
（URL：https://www.zennoh.or.jp/bu/nousan/tea/）
・主婦の友社編『茶の湯全書』主婦の友社、昭和 34 年

②茶炭

ア）概要及び現状

■ 起源と歴史

茶道では、茶釜の湯を沸かすために、点前の前に風炉や炉に炭をつぎ足すが、これを「炭点前」という。客を招いて濃茶席の前に炭を直す点前を「初炭」、次に中立を経て薄茶席の前に炭をつぎ足す点前を「後炭」という。

炭をついだり直したりする行為は、茶の湯において当初点前として成立していなかったが、千利休が客の鑑賞に堪える振る舞いとして形式を完成させ、亭主の作法とされる点前へと発展させた。

■ 種類、原材料、求められる品質等

茶炭には、道具炭と枝炭がある。道具炭は茶炭の主体となる炭で黒炭の一種であり、胴炭、輪炭、割炭、毬打炭、管炭などがある。また、大きく分けて風炉用と炉用があり、茶道の流派によって、名称や寸法など細かく規格が定められている。枝炭は、炭をついだときの装飾として、また火移りを早くする導火線として用いられる。

道具炭の原木は、クヌギ、ミズナラ、コナラ、カシなどがあるが、特にクヌギが火力や美しさの点で好まれる。

＜茶炭の種類と形状・用途等、原材料＞

種類	形状・用途等	原材料
胴炭	最も大きな炭で炉、風炉用の初炭に使う	クヌギ、ミズナラ、コナラ、カシ等（黒炭）
丸管	胴炭と同じ長さの細い炭	
割管	丸管を縦に半分に割った炭	
丸毬打	古来の遊戯である毬打に見立てた呼び名といわれている。胴炭、管炭の半分の長さ	
割毬打	丸毬打を縦半分に割った炭	
点炭	丸管の半分の長さの炭。炭点前の最後につぐ炭で止炭とも添炭ともいう	
輪胴	胴炭のように太い炭で後炭に使う	
香合台	丸毬打の太めの炭で香合をのせるのに使う。実際には燃やさない	
枝炭	小楢の枝などを焼き、胡粉を塗って白く化粧した炭。景色炭として、火の導火線としての役割	ツツジ、ツバキ、クヌギ、コナラ等

出典：日本特用林産振興会編『茶の湯炭に関する調査報告書』（日本特用林産振興会、平成 18 年）を参照し受託事業者が作成した

茶炭に求められる品質は、①しまりがあること、②樹皮が密着していること、③炭の切り口が菊の花のように割れており、割れ目が細かく均一であること、④断面が真円に近いこと、⑤樹皮が薄いこと、⑥適度にネラシがきいていることが挙げられる。

＜茶炭に求められる品質＞

項目	品質の内容
しまり	重量が重く、握ったり叩いたりしても簡単には崩れないこと
樹皮の密着度合い	炭を握って絞り上げた時に皮が剥がれ落ちないこと
切り口・割れ目	茶道において、炭は鑑賞の対象にもなり、割れ目が均一で切り口が菊の花のように綺麗になっている様が喜ばれる
断面	茶道において、炭は鑑賞の対象にもなり、真円に近い断面が喜ばれる
樹皮の薄さ	皮が薄いことにより規定の長さに切りそろえやすく、燃焼の際の爆跳減少が抑えられる
ネラシ	ネラシとは、炭化の終わりに炭窯の内部に空気を入れて燃焼温度を上げ、炭の中のガスを抜き、焼きしめる工程であり、適度なガスが保たれることにより、程よい火付きと火持ちをさせる

出典：日本特用林産振興会編『茶の湯炭に関する調査報告書』（日本特用林産振興会、平成 18 年）を参照し受託事業者が作成した

■ 生産地、生産量等について

クヌギを原木とした茶炭の産地として、古くから知られているのは、大阪府池田市、箕面市、豊能町、能勢町、兵庫県川西市一帯で生産されるクヌギ黒炭「池田炭」をはじめ、千葉県佐倉市の「佐倉炭」、愛媛県大洲市の「伊予の切り炭」、三重県松坂市、岡山県真庭市等がある。その他、現在の主な産地としては、岩手県一関市、藤沢町、福島県矢吹町、栃木県市貝町、那須烏山市、愛媛県大洲市、内子町等が挙げられる。

特に、「池田炭」については、茶道において最上のものとされ、1700 年代の多くの書物にも紹介されており、古くから知名度が高かったことが分かるほか、千利休が好んで使用していた記録も残されている。

生産量、需要量についての統計はないが、ヒアリング調査や各種文献等からは、製炭をする職人の高齢化や原材料となるクヌギ等の減少により、茶炭の生産量が減少していることがうかがえる。また、近年では東日本大震災の影響により、茶炭の原材料であるクヌギの主な生産地であった福島の風評被害により、原材料不足が更に進んだほか、炭焼きを廃業する製炭者が生じた。これにより、茶炭の生産量の減少がより進んでいるものと推察される。

茶炭の流通形態については、産地問屋・消費地問屋のいずれかが加工・梱包を行い生産者は生産のみを行う旧来からのケースと、インターネットによる消費者への直接販売等、生産者が加工・梱包も行い直接販売を行うケースがあり、近年では後者が増えている。特に、インターネットによる販売は、生産者、問屋、小売店いずれも実施することが増えている。

イ）課題

■ 茶炭の国内生産について

昭和 30 年代の燃料革命以降の旧薪炭林の高林齢化によるクヌギ等原料の不足や、製炭者の高齢化、近年では主要な原材料産地であった福島県での東日本大震災以降の風評被害により、茶炭の生産については減少が著しい。

炭問屋へのヒアリングでは、茶炭の需要自体も減少傾向にある中で、販売に制限をかけざるを得ない状況もあったとの話が聞かれ、このことから需要以上に生産量が減少している可能性が推察される。

また、クヌギ等の原材料を産出することのできる広葉樹林においては、木質バイオマスへの活用が増加しているため、チップへの加工を前提とした荒い施業が増える傾向にある。そのため、茶炭に求められる品質を保った原木の生産技術の継承が難しくなっている。

茶炭の生産は、従来クヌギ等の原材料を産出する広葉樹林の造林と集材といった林業、原材料を調達して炭を焼く製炭業、茶道で求められる大きさへの加工や品質管理等を行う問屋と分業体制で生産ラインを構築することで成立していた。しかし、上記のように燃料革命等により原材料の生産を担っていた部分がなくなり、茶炭の生産量が著しく減少した経緯を踏まえると、分業体制の保存はリスクを包含しており、茶炭の生産そのものや技術の継承に向けては、サプライチェーン全体を巻き込んだ取組が重要であることが推察される。

■ 茶炭の国内での需要について

茶炭の需要については減少傾向にある。背景としては、茶道人口の高齢化により、茶道教室の閉鎖が相次いでいることや、茶道をたしなむ人は多くても、実際に茶炭を使う人口は茶道師範等限られていること等が挙げられる。また、住環境の変化により、マンション等、炉を切った茶室の確保が難しい、炭や火鉢といった火気の扱いが火災等への配慮から難しく電熱を利用する教室が増加していることも要因と考えられる。なお、ヒアリングでは、猛暑日が増えたことで夏場の稽古や茶会が減ったため、夏の時期の茶炭の需要が減っているなどの状況もうかがえる。

茶炭の生産量が需要を上回るペースで減少していることを背景に、販売に制限がかかる場面もあることが、茶道指導者の炭離れを加速し、悪循環に陥っている。

■ 茶炭に関する文化の継承について

茶炭の使用自体が減少するということは、茶道における炭点前の衰退に直結する。炭点前には、形式や所作といった型に加え、炭の美しさや火の熾り、灰形を拝見するといった美意識をはじめ、香合等嗅覚による演出等が含まれており、それらを実践、継承される機会の減少が危惧される。

＜参考＞

・日本特用林産振興会編『茶の湯炭に関する調査報告』日本特用林産振興会、平成 18 年
・主婦の友社編『茶の湯全書』主婦の友社、昭和 34 年
・淡交社編集局編『茶道具ハンドブック』淡交社、平成 24 年

③茶釜

ア）概要及び現状

■ 起源と歴史

茶釜は、古くは奈良時代から喫茶文化の伝来とともに日本に伝わっていた。国内での茶釜の生産がいつから始まったかは定かではないが、南北朝時代には、既に現在の福岡県芦屋や、栃木県天明にて作られた茶釜が、京の貴人たちの間で人気を博していたことが記録に残っている。

14 世紀から 17 世紀初頭頃まで、芦屋で作られた芦屋釜は「古芦屋」と呼ばれ、現在も茶道において珍重されている。ただ、芦屋釜は庇護者であった大内氏の滅亡や、他産地での茶釜生産の増加等により、江戸時代の初期には廃絶した。

天明釜は、15 世紀の多くの茶会記に登場しているが、江戸時代には梵鐘や日常の鍋等、鋳物業の産地となるにつれ生産は少なくなった。16 世紀後半に茶の湯が発展する中、千利休が職方に好みに合った道具をつくらせたように、茶人が釜師に茶釜を注文する関係が増えるにつれ、茶釜の主産地が京都へと移っていった。

芦屋釜と天明釜の需要が衰退して後は、茶人が多く集まっていた京都での茶釜づくりが本格化した。特に、京都の三条釜座では、多くの釜師が集まり、「座」といわれる同業組織を形成し、明治時代までにかけて茶釜に限らず鋳物の製造・販売について公許され専売を行う組織へと発展させた。

茶道の家元制度が確立されていくにつれ、各流派の家元が、それぞれの好みの道具を納める職人をある程度限定することでその流派の伝統的茶風を守る動きをする中、三条釜座にも、代々家元と結び付いての釜づくりを生業とする家系、名越家、西村家、辻家、大西家等が生まれていった。そのうち大西家は千家好みの茶釜を製作する職方の家「千家十職」の一つである。なお、明治以降に三条釜座は消滅したが、大西家、高木家が釜師として現在も茶釜の製作を続けている。

また、江戸幕府や各地方の大名も、柳営茶道といわれる武家の茶道をたしなんでおり、茶道方等の職掌もあったことから、その御用達として釜師が各地域に招聘された。具体的には、江戸では江戸名越家、江戸大西家、堀家、加賀藩（石川県金沢市）では宮崎寒雉、現在は鋳物の産地となった南部藩（岩手県盛岡市、奥州市）、出羽山形藩（山形県山形市）等が釜づくりの製作の地となり、現代に至るまで技術が継承されている。

また、平成に入ってからは、福岡県芦屋町が地域活性化に向けた「ふるさと創生事業」として、芦屋釜の復興を行うことを決め、芦屋釜の調査・研究に基づく技術の復元と、復興工房の建設、鋳物師の養成に着手し、400 年前に途絶えた技術を復興させている。

■ 原材料、茶釜の種類と特徴等

茶釜の素材は、砂鉄を木炭で精錬して取り出した鉄である和銑（わずく）である。和銑は鉄の純度が高く錆びにくい一方、硬く割れが生じやすいという特性があり、鋳造が難しい原材料でもある。茶釜の原材料である和銑の生産は、鉄鋼業の近代化によって、大正時代に一時途絶えたが、現在は日刀保たたら等で生産が行われている。

茶釜の釜膚には、漆とベンガラを配合した塗料が焼き付けられ、錆色に色付けされることが多い。また、割れ等の修理の際にも、漆を原材料とした接着剤が用いられることが多い。

釜膚の漆は何度も使用するうちに黒錆（酸化皮膜）へと取って代わるように剥がれていくことが良いとされている。黒錆は鉄を腐食させ、ボロボロの状態にする性質のある赤錆が付くことを防ぎ、釜の仕舞いをする際、釜膚が熱い内に柄杓で湯を何度もかけることによって付けることができる。

茶釜は茶会の最初から最後まで客前にある道具であることから、形や各部位の形状や意匠、風合い等に好みや見どころがあり、鑑賞の対象となっている。

＜茶釜の形と各部位の主な種類＞

形・部位	主な種類
形	①古格を表す基本的な形（真形釜） ②釜の形状によるもの（丸釜、四方釜、肩衝釜、平釜、尻張釜、筒釜） ③口造りによるもの（操口釜、立口釜、甑口釜、姥口釜、田口釜、十王口釜、広口釜） ④他の物の形状名が付されたもの（富士釜、兜釜、鶴首釜、乙御前釜、塩屋釜、瓢箪釜、唐犬釜、車軸釜、矢筈釜、蒲団釜） ⑤用途によるもの（茶飯釜、手取釜） ⑥文様・文字によるもの（雲龍釜、霰釜、大講堂釜、柏釜） ⑦人名やその他の由来によるもの（万代屋釜、阿弥陀堂釜、野溝釜）
文様	動植物、風景、七宝文、亀甲文、霰文　等
釜膚	挽肌、鯰肌、砂肌、絹肌、布肌、霙肌、石目肌、岩肌、荒肌、石垣肌、柚肌、蜜柑肌、梨肌、弾肌、巣肌、刷毛目肌、筆肌、糸目肌、筅肌、縮緬肌、時雨肌　等
鐶付	鬼面、遠山、常張、蝉、蛙、松笠、蕨、傘、竹節、海老、鯰　等
釜の羽	直羽、一文字羽、折羽、角羽、箱羽、錣羽、反羽、スカシ羽、おほだれ羽、蛤羽、羽落（羽を打ち落としたもの）、毛切（羽の位置にある筋）、尾垂（羽の部分が不規則な波形に欠けて垂れているもの）　等
釜の底	丸底、平底、角底、上底、利休底、道安底、織部底、遠州底　等
釜の蓋	一文字蓋、打込蓋、恵明蓋、掛子蓋、掬蓋、盛蓋、薄盛蓋、神輿蓋、毛織蓋、古鏡蓋、石目蓋　等

出典：新郷英弘『茶道教養講座 10　釜と金工品』（淡交社、平成 29 年）を参照し受託事業者が作成した

茶釜の特徴を代表する芦屋釜と天明釜は特徴や見どころが対象的である。芦屋釜は滑らかな釜膚に施された絵画的な美しい文様と、「真形（しんなり）」と言われるシンプルで端正な形、薄造りといったところに見どころがある一方、天明釜は、ざっくりとした素朴な膚合いと自由な造形に魅力がある。京都で生産される茶釜は総じて「京釜」と呼ばれるが、中でも大西家の茶釜は茶会でも使用されることが多く、作風は「きれいさび」とも称され、侘びた中にも釜膚や文様の美しいものが代々製作されている。

＜芦屋釜と天明釜の特徴＞

	芦屋釜	天明釜
形状	真形	様々（丸、車軸、笠、提灯等）
口造り	繰口	様々（甑口、立口、十王口等）
鐶付	細部まで表現された鬼面	様々（遠山、常張、蛙、蝉、鬼面等） ＊細部の表現を省く
釜膚	鯰膚	荒膚
文様	絵画的、幾何学的な文様	文様が入るものは少ない

出典：新郷英弘『茶道教養講座 10　釜と金工品』（淡交社、平成 29 年）より抜粋

■ 生産地、生産量等について

現在茶釜は全国の鋳物師により製作されているが、生産地として古くから知られているのは芦屋、天明、京都である。その他にも金沢、盛岡、奥州、山形、水沢、河内等から釜師が大名等に招聘されたり、鋳物師の活躍する町で生産されたりと、近世から現代にかけて、各地に製作現場は広がっている。なお、芦屋については、400 年前に一旦生産が途絶えたが、平成に入ってから技術が復元され、現在また茶釜の生産が行われている。

茶釜の製作は、千利休の頃から茶人が鋳物師に好みのものを依頼して製作することが多く、現在も受注生産が中心である。茶釜全体の生産量を把握したような統計はない。茶釜の製作は構想から仕上げまで、短くても 3 箇月はかかるほか、鋳込むのが難しい和銑を原材料とするため成功率も低く、年間の製作個数は限られている。

各地の茶釜の生産体制はそれぞれ異なっている。天明、京都等、古くから「釜師」の家が続いているケースでは、基本的に一子相伝で技術の継承が各家において行われ、修行期間を経てからの襲名が行われている。一方、盛岡、奥州等、日用品の鋳物生産を中心としているケースでは、企業等に雇用された形で職人が育成され、他の製品を製造しながら茶釜の受注も受ける等の体制が取られているものと推察される。

芦屋については平成に入ってから町の政策として、400 年前に途絶えた技術を復興させる事業が行われており、生産体制は他の生産地と比べて特殊ではあるが、技術の復元等調査研究は学芸員が担い、職人は町の職員として雇用し、養成期間である 16 年間を経てから独立する流れとなっている。

イ）課題

■ 茶釜の生産について

茶釜の生産技術は習得するまでに多くの歳月がかかる他、茶釜の生産そのものも、一人の職人が手掛けられるのは年間数個と限られている。茶釜に対する需要自体が減少傾向にある中、茶釜の製作のみで職人が生計を立てるのは難しく、現在の主要な生産地である芦屋、天明、京都では、それぞれの方法が模索されている。芦屋においては、行政が直接人材を雇用し全面的なバックアップ体制を取りながら職人の育成に取り組んでおり、天明では茶釜以外の鋳物製造を中心に展開しつつ、職人が保存会を立ち上げて技術の保存に取り組んでいる。また、京都においては、釜師の家が美術館を設立するなど、茶釜に関する普及活動を行いながら、技術の復元・継承に関する研究や古作釜の保存等を行うような事例も見られる。

茶釜の生産過程や技術の特殊性等から、生産機会や作り手が限られざるを得ないという前提の中、確実に今後も生産ができる状況をどのような体制でつくっていくかが課題となっている。

■ 茶釜の需要について

茶道人口が高齢化、減少しているため、茶釜の需要も過去に比べると減少している。また、道具を扱うことへのハードルが高く、稽古等の場面で茶釜に触らなくなっている傾向も見られ、茶釜を購入、所有する茶人がますます少なくなっている。

さらに、古作釜がかなり安価で流通しており、新作の茶釜の流通環境としては厳しい状況にある。

各流派の茶人に、古作の道具だけではなく、現代の職人が製造したものを使うことや、地域で生産されたものに親しむことに意義や面白さを感じてもらう等、需要を広げていくための取組が重要になっている。

また、釜の製造元へのヒアリングでは海外では富裕層を中心に茶道人口が増えており、良質な茶道具を求める海外の茶人へと、茶釜の需要を広げていくことについても検討しているという話もあった。

■ 茶釜の技術の保存について

茶釜の技術の保存に向けては、芦屋、天明、京都のほか、各地域でそれぞれに取組が進められているが、過去の茶釜の製作において使用されていた鋳型や道具、設計図等の保存や技術の伝承はいずれの地域においても必要な取組である。

これら保存活動には、調査研究や維持管理等の経費がかかる。芦屋においては町の事業として、天明においては会員組織である保存会の活動として、京都においては釜師の家を中心に設立された公益財団法人の活動により、様々な方法で保存活動にかかる費用を捻出している。いずれも茶釜の生産で得られる利益のみから保存活動の費用を賄えているわけではなく、今後も各方面からの支援を得ていくことが必要となっている。

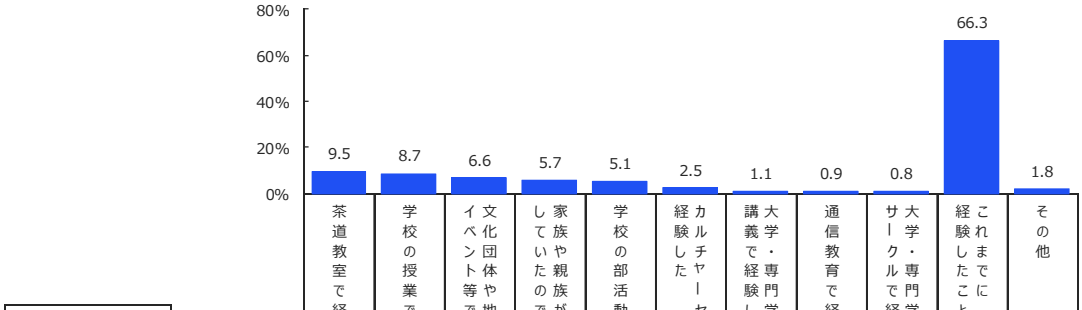
なお、茶釜製作は、現在のところ地方公共団体による保護や、文化財保護法による指定・選定を受けていないため、保存・継承に係る公的支援を受けていない。茶道を支える重要な茶道具の製作技術が途絶えることのないよう、支援等について適時適切に検討していく必要がある。

＜参考＞

・新郷英弘『茶道教養講座 10　釜と金工品』淡交社、平成 29 年
・黒田宗光『新版・茶道具鑑賞便利帳』淡交社、平成 16 年
・淡交社編集局編『茶道具ハンドブック』淡交社、平成 24 年
・茶道資料館編『茶道具の鑑賞と基礎知識』淡交社、平成 14 年
・田中仙翁『茶道ハンドブック新版』三省堂、平成 19 年

参考資料　国民意識調査の結果

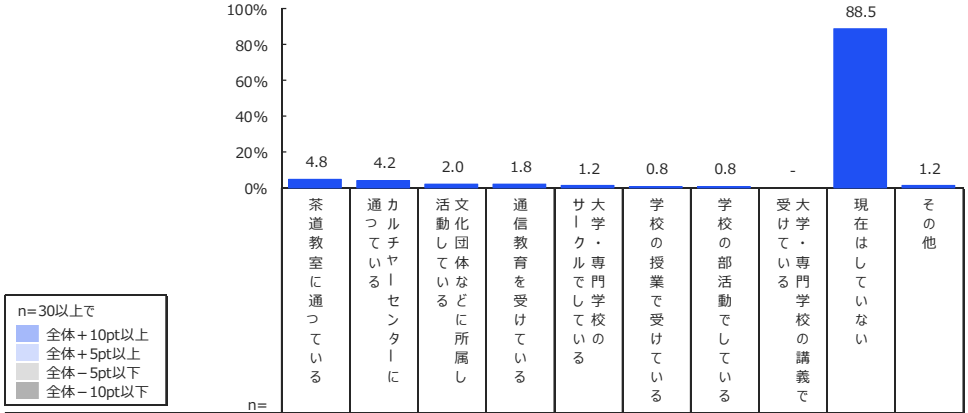
Q１：過去の茶道経験、経験内容【全調査対象者への設問】



		n=	茶道教室で経験した	学校の授業で経験した	文化団体や地域のイベント等で経験した	家族や親族がしていたので経験した	学校の部活動で経験した	カルチャーセンターで経験した	大学・専門学校の講義で経験した	通信教育で経験した	大学・専門学校のサークルで経験した	これまでに経験したことがない	その他
全体		1,500	9.5	8.7	6.6	5.7	5.1	2.5	1.1	0.9	0.8	66.3	1.8
性別	男性	750	3.2	6.8	4.7	5.3	2.4	1.3	0.7	0.8	0.8	78.5	0.5
	女性	750	15.7	10.7	8.5	6.1	7.7	3.6	1.5	0.9	0.8	54.1	3.1
年代	12－14歳	100	4.0	12.0	9.0	4.0	5.0	2.0	-	1.0	-	68.0	3.0
	15－19歳	200	5.5	16.0	7.5	3.5	8.0	0.5	1.5	1.5	1.0	63.5	2.5
	20－29歳	200	7.5	15.0	4.5	2.0	6.5	3.0	3.0	1.5	-	63.5	2.5
	30－39歳	200	3.5	8.5	5.5	6.0	4.5	1.5	-	1.5	0.5	76.0	-
	40－49歳	200	7.0	7.5	6.5	5.0	2.5	2.0	0.5	-	1.0	73.5	2.0
	50－59歳	200	8.5	6.0	5.5	8.5	3.5	4.5	1.5	1.0	-	70.0	1.0
	60－69歳	200	15.0	3.0	7.0	6.0	4.0	2.0	0.5	-	2.5	61.5	2.0
	70歳以上	200	22.0	3.5	8.5	10.0	6.5	4.0	1.0	0.5	1.0	55.5	2.0

※全体の値を基準に降順並び替え

Q２：現在の茶道経験、活動内容【茶道経験者への設問】



		n=	茶道教室に通っている	カルチャーセンターに通っている	文化団体などに所属し活動している	通信教育を受けている	大学・専門学校のサークルでしている	学校の授業で受けている	学校の部活動でしている	大学・専門学校の講義で受けている	現在はしていない	その他
全体		505	4.8	4.2	2.0	1.8	1.2	0.8	0.8	-	88.5	1.2
性別	男性	161	6.8	6.2	3.1	2.5	1.9	1.9	-	-	82.6	1.9
	女性	344	3.8	3.2	1.5	1.5	0.9	0.3	1.2	-	91.3	0.9
年代	12－14歳	32	6.3	3.1	3.1	6.3	-	-	-	-	87.5	3.1
	15－19歳	73	5.5	4.1	-	5.5	2.7	5.5	5.5	-	83.6	-
	20－29歳	73	12.3	6.8	6.8	2.7	-	-	-	-	79.5	-
	30－39歳	48	4.2	4.2	4.2	-	-	-	-	-	89.6	-
	40－49歳	53	3.8	1.9	-	-	-	-	-	-	90.6	3.8
	50－59歳	60	6.7	5.0	-	-	3.3	-	-	-	88.3	-
	60－69歳	77	-	5.2	1.3	-	1.3	-	-	-	92.2	1.3
	70歳以上	89	1.1	2.2	1.1	1.1	1.1	-	-	-	95.5	2.2

※全体の値を基準に降順並び替え

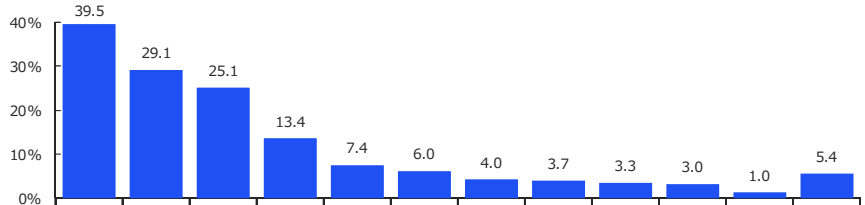
Q３：茶道を辞めている理由【茶道経験者で現在茶道活動をしていない人への設問】

(%)

		n=	興味関心が無くなったから	教室等に通い（資格取得など）目標を達成できたから	学業・仕事が忙しくなったから	家事や介護などで時間が取れなくなったから	経済的な余裕が無くなったから	他に趣味やお稽古などを始めたから	環境が変わり、茶道を続けられなくなったから	学校を卒業したため、する機会が無くなったから	その他
全体		447	26.2	0.9	12.8	5.6	4.5	5.4	19.9	19.9	4.9
性別	男性	133	33.8		9.8	2.3	3.8	6.8	18.0	22.6	3.0
	女性	314	22.9	1.3	14.0	7.0	4.8	4.8	20.7	18.8	5.7
年代	12－14歳	28	25.0		35.7				17.9	10.7	10.7
	15－19歳	61	24.6		14.8	1.6	11.5		39.3		8.2
	20－29歳	58	32.8		22.4		1.7	3.4 1.7	8.6	25.9	3.4
	30－39歳	43	25.6		9.3	4.7	7.0	4.7	20.9	25.6	2.3
	40－49歳	48	20.8		12.5	8.3	6.3		18.8	27.1	6.3
	50－59歳	53	24.5		15.1	7.5	9.4	1.9	20.8	13.2	7.5
	60－69歳	71	32.4		1.4	5.6	8.5	7.0	7.0	25.4	9.9	2.8
	70歳以上	85	22.4	3.5	3.5	9.4	2.4	10.6	31.8	10.6	5.9

※n=30未満は参考値のため灰色。

Q４：茶道を始めたきっかけ【茶道経験者(興味関心がなくなった人、あるいは、学校を卒業し現在茶道活動をしていない人を除く)への設問】



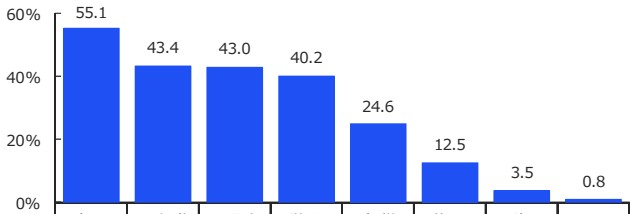
n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以上
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	お茶（抹茶）が好きだから	家族や親族、友人から勧められて興味関心を持ったから	茶会や茶道のイベント等に参加して興味関心を持ったから	興味はないが家族や親族、友人から勧められたから	茶道教室に通って興味関心を持ったから	学校の部活動や大学のサークルで興味関心を持ったから	雑誌や漫画、テレビ等で興味関心を持ったから	資格等取得のため	学校の授業で興味関心を持ったから	カルチャーセンターに通って興味関心を持ったから	興味はないが学校の授業で仕方なく	その他
全体		299	39.5	29.1	25.1	13.4	7.4	6.0	4.0	3.7	3.3	3.0	1.0	5.4
性別	男性	86	37.2	27.9	29.1	17.4	4.7	4.7	7.0	4.7	3.5	4.7	2.3	2.3
	女性	213	40.4	29.6	23.5	11.7	8.5	6.6	2.8	3.3	3.3	2.3	0.5	6.6
年代	12－14歳	22	22.7	27.3	31.8	13.6	4.5	4.5	4.5	4.5	18.2	4.5	9.1	4.5
	15－19歳	34	52.9	29.4	32.4	11.8	5.9	11.8	5.9	8.8	8.8	2.9	-	8.8
	20－29歳	39	53.8	28.2	25.6	7.7	-	-	10.3	5.1	2.6	-	2.6	5.1
	30－39歳	26	42.3	42.3	34.6	15.4	3.8	11.5	11.5	-	3.8	3.8	-	-
	40－49歳	30	53.3	10.0	10.0	16.7	6.7	6.7	-	3.3	-	3.3	-	10.0
	50－59歳	40	27.5	25.0	30.0	15.0	5.0	2.5	2.5	-	-	7.5	-	-
	60－69歳	47	29.8	38.3	17.0	17.0	10.6	6.4	-	4.3	-	2.1	-	4.3
	70歳以上	61	36.1	29.5	24.6	11.5	14.8	6.6	1.6	3.3	1.6	1.6	-	8.2

※n=30未満は参考値のため灰色。

※全体の値を基準に降順並び替え

Q５：茶道の魅力・面白さ【茶道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在茶道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】

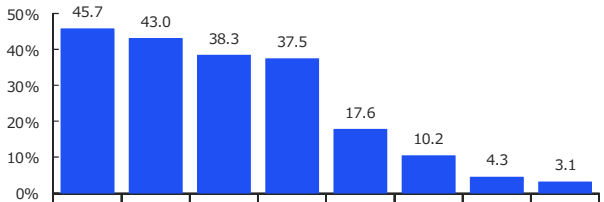


n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以上
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	お茶（抹茶）を飲んで楽しめること	集中力を高める、心を落ち着けることができること	伝統的な日本文化への理解を深めることができること	わびさび等の美意識を学ぶことができること	様々な茶道具を楽しむことができること	これまでと違う新たな仲間ができること	資格等を取得できること	その他
全体		256	55.1	43.4	43.0	40.2	24.6	12.5	3.5	0.8
性別	男性	69	43.5	44.9	26.1	36.2	21.7	20.3	1.4	-
	女性	187	59.4	42.8	49.2	41.7	25.7	9.6	4.3	1.1
年代	12－14歳	17	41.2	47.1	29.4	35.3	29.4	35.3	-	-
	15－19歳	30	66.7	36.7	43.3	43.3	30.0	6.7	6.7	3.3
	20－29歳	35	54.3	37.1	14.3	45.7	8.6	14.3	5.7	-
	30－39歳	22	54.5	50.0	40.9	36.4	13.6	18.2	4.5	-
	40－49歳	25	64.0	44.0	52.0	48.0	24.0	4.0	4.0	4.0
	50－59歳	34	47.1	38.2	41.2	29.4	35.3	5.9	-	-
	60－69歳	39	56.4	46.2	43.6	38.5	25.6	15.4	5.1	-
	70歳以上	54	53.7	48.1	63.0	42.6	27.8	11.1	1.9	-

※n=30未満は参考値のため灰色。　※全体の値を基準に降順並び替え

Q６：茶道をすることで得られるもの【茶道経験者(興味関心がなくなった人、学校を卒業し現在茶道活動をしていない、仕方なく学校の授業でやっている人を除く)への設問】

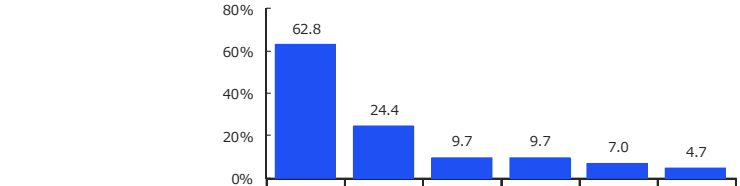


n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以上
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	礼儀作法などが身についた	伝統的な日本文化への興味関心が深まった	普段の集中力や心の落ち着きが高まった	わびさび等の美意識を学ぶことができた	これまでと違う新しい仲間ができた	他国の文化に興味関心が芽生えた	資格等が取得できた	その他
全体		256	45.7	43.0	38.3	37.5	17.6	10.2	4.3	3.1
性別	男性	69	29.0	31.9	44.9	33.3	29.0	13.0	4.3	1.4
	女性	187	51.9	47.1	35.8	39.0	13.4	9.1	4.3	3.7
年代	12－14歳	17	29.4	47.1	58.8	29.4	41.2	23.5	-	-
	15－19歳	30	53.3	50.0	20.0	40.0	23.3	16.7	10.0	3.3
	20－29歳	35	8.6	25.7	34.3	57.1	20.0	11.4	5.7	-
	30－39歳	22	31.8	45.5	45.5	31.8	22.7	13.6	9.1	4.5
	40－49歳	25	36.0	44.0	36.0	52.0	20.0	4.0	4.0	12.0
	50－59歳	34	47.1	35.3	29.4	32.4	17.6	8.8	-	2.9
	60－69歳	39	66.7	43.6	30.8	28.2	15.4	10.3	5.1	2.6
	70歳以上	54	64.8	51.9	53.7	31.5	3.7	3.7	1.9	1.9

※n=30未満は参考値のため灰色。　※全体の値を基準に降順並び替え

Q７：茶道への興味関心を持ったきっかけ【茶道未経験者あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心がある人への設問】

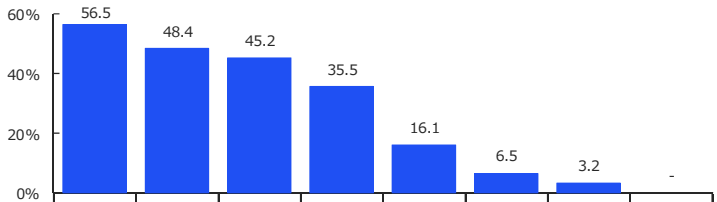


n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以上
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	お茶（抹茶）が好きだから	雑誌や漫画、テレビ等で興味関心を持つたから	家族や親族、友人から勧められて興味関心を持つたから	学校の授業で興味関心を持つたから	茶会や茶道のイベント等に参加して興味関心を持つたから	その他
全体		258	62.8	24.4	9.7	9.7	7.0	4.7
性別	男性	134	63.4	26.9	11.9	8.2	6.0	3.7
	女性	124	62.1	21.8	7.3	11.3	8.1	5.6
年代	12－14歳	9	33.3	44.4	-	11.1	33.3	-
	15－19歳	46	71.7	17.4	10.9	10.9	4.3	8.7
	20－29歳	33	81.8	3.0	9.1	15.2	3.0	3.0
	30－39歳	43	74.4	18.6	4.7	14.0	4.7	4.7
	40－49歳	43	39.5	46.5	9.3	9.3	7.0	2.3
	50－59歳	25	68.0	24.0	8.0	4.0	4.0	-
	60－69歳	30	50.0	33.3	16.7	6.7	3.3	3.3
	70歳以上	29	62.1	20.7	13.8	3.4	17.2	10.3

※n=30未満は参考値のため灰色。　※全体の値を基準に降順並び替え

Q８：茶道をやってみたいと思う理由【茶道未経験者あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心がある人への設問】

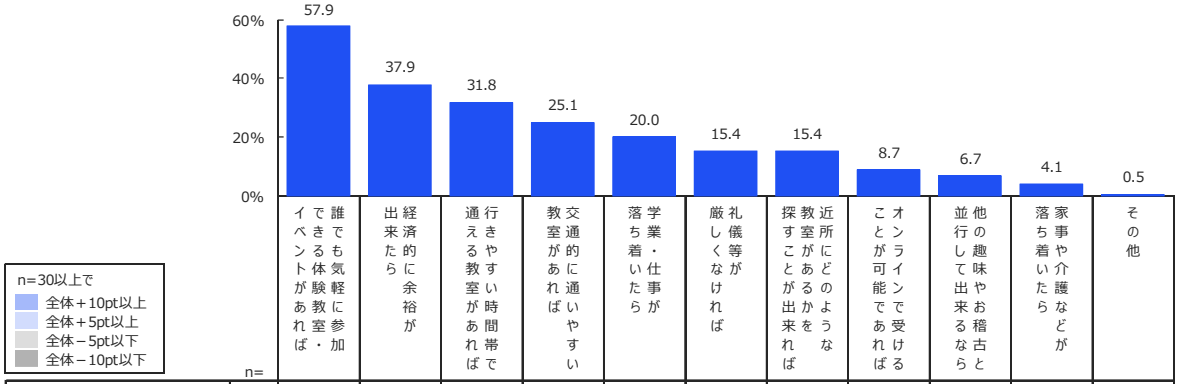


n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以下
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	お茶（抹茶）を、自分で点てられるようになりたい	集中力を高めたい、心を落ち着けたい	わびさび等の美意識を学びたい	伝統的な日本文化への理解を深めたい	これまでと違う新たな仲間を作りたい	様々な茶会に参加してみたい	資格等を取得したい	その他
全体		62	56.5	48.4	45.2	35.5	16.1	6.5	3.2	-
性別	男性	33	48.5	42.4	54.5	42.4	18.2	3.0	3.0	-
	女性	29	65.5	55.2	34.5	27.6	13.8	10.3	3.4	-
年代	12－14歳	6	50.0	-	16.7	66.7	16.7	-	-	-
	15－19歳	12	75.0	50.0	33.3	33.3	8.3	-	-	-
	20－29歳	13	53.8	61.5	38.5	38.5	15.4	23.1	7.7	-
	30－39歳	14	57.1	64.3	57.1	14.3	14.3	7.1	7.1	-
	40－49歳	4	25.0	50.0	100.0	25.0	-	-	-	-
	50－59歳	7	42.9	42.9	57.1	42.9	42.9	-	-	-
	60－69歳	3	100.0	33.3	33.3	33.3	-	-	-	-
	70歳以上	3	33.3	33.3	33.3	66.7	33.3	-	-	-

※n=30未満は参考値のため灰色。　※全体の値を基準に降順並び替え

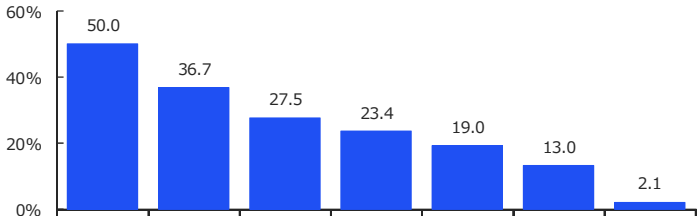
Q９：茶道意欲がある人のハードル【茶道未経験者あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心があり、条件等が整えば茶道活動をしたい人への設問】



		n=	誰でも気軽に参加できる体験教室・イベントがあれば	経済的に余裕が出来たら	行きやすい時間帯で通える教室があれば	交通的に通いやすい教室があれば	学業・仕事が落ち着いたら	礼儀等が厳しくなければ	近所にどのような教室があるかを探すことが出来れば	オンラインで受けることが可能であれば	他の趣味やお稽古と並行して出来るなら	家事や介護などが落ち着いたら	その他
全体		195	57.9	37.9	31.8	25.1	20.0	15.4	15.4	8.7	6.7	4.1	0.5
性別	男性	101	59.4	32.7	27.7	19.8	23.8	18.8	19.8	7.9	9.9	2.0	1.0
	女性	94	56.4	43.6	36.2	30.9	16.0	11.7	10.6	9.6	3.2	6.4	-
年代	12－14歳	3	66.7	-	-	-	-	-	33.3	-	-	-	-
	15－19歳	34	61.8	50.0	23.5	20.6	41.2	20.6	11.8	8.8	8.8	-	-
	20－29歳	20	50.0	35.0	30.0	10.0	15.0	5.0	5.0	15.0	-	-	-
	30－39歳	29	72.4	37.9	41.4	41.4	24.1	20.7	20.7	6.9	10.3	17.2	-
	40－49歳	38	60.5	47.4	36.8	31.6	18.4	15.8	15.8	10.5	2.6	2.6	-
	50－59歳	18	38.9	38.9	38.9	27.8	16.7	11.1	11.1	-	-	5.6	-
	60－69歳	27	51.9	33.3	37.0	22.2	14.8	14.8	18.5	11.1	7.4	3.7	3.7
	70歳以上	26	57.7	19.2	19.2	19.2	3.8	15.4	19.2	7.7	15.4	-	-

※n=30未満は参考値のため灰色。　※全体の値を基準に降順並び替え

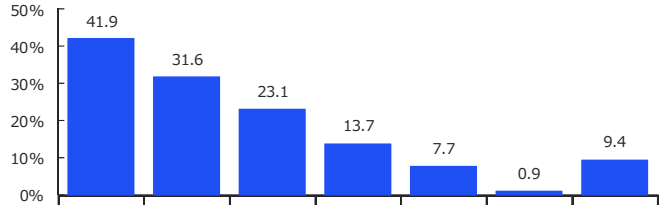
Q10：茶道に対する印象【茶道未経験者で茶道に興味関心がない、あるいは茶道経験者で学校を卒業し現在茶道活動をしていない人で茶道に興味関心がない人への設問】



		n=	礼儀や作法等に厳しそう	普段の生活に必要性を感じない	教室の月謝や道具等にお金がかかりそう	先生が厳しそう	技術的に難しそう	教室に入門しにくそう	その他
全体		826	50.0	36.7	27.5	23.4	19.0	13.0	2.1
性別	男性	485	50.3	34.8	23.5	22.9	21.2	13.8	2.3
	女性	341	49.6	39.3	33.1	24.0	15.8	11.7	1.8
年代	12－14歳	62	53.2	33.9	14.5	21.0	11.3	4.8	4.8
	15－19歳	105	53.3	29.5	21.0	37.1	36.2	9.5	3.8
	20－29歳	109	45.0	28.4	19.3	32.1	17.4	18.3	0.9
	30－39歳	120	48.3	42.5	31.7	29.2	24.2	19.2	1.7
	40－49歳	117	52.1	36.8	23.9	29.9	19.7	20.5	-
	50－59歳	122	41.0	27.9	31.1	18.0	21.3	13.9	3.3
	60－69歳	100	54.0	47.0	41.0	8.0	10.0	6.0	1.0
	70歳以上	91	57.1	49.5	33.0	6.6	5.5	4.4	2.2

※全体の値を基準に降順並び替え

Q11：茶道を辞めた人が当初持っていた興味関心【茶道経験者で現在茶道活動をしておらず、茶道に興味関心がなくなった人への設問】

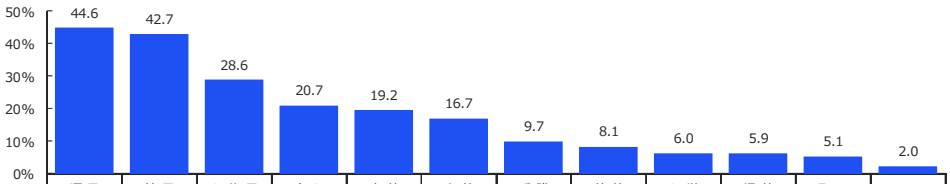


n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以上
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	伝統的な日本文化への理解を深めることができること	お茶（抹茶）を、自分で点てられるようになること	集中力を高める、心を落ち着けることができること	わびさび等の美意識を学ぶことができること	これまでと違う新たな仲間ができること	資格等を取得できること	その他
全体		117	41.9	31.6	23.1	13.7	7.7	0.9	9.4
性別	男性	45	37.8	24.4	22.2	17.8	8.9	-	8.9
	女性	72	44.4	36.1	23.6	11.1	6.9	1.4	9.7
年代	12－14歳	7	57.1	14.3	28.6	-	-	-	14.3
	15－19歳	15	20.0	33.3	26.7	13.3	-	-	13.3
	20－29歳	19	36.8	31.6	26.3	21.1	15.8	-	5.3
	30－39歳	11	54.5	-	18.2	-	9.1	-	18.2
	40－49歳	10	60.0	40.0	-	10.0	-	-	10.0
	50－59歳	13	38.5	53.8	38.5	7.7	-	-	7.7
	60－69歳	23	43.5	26.1	17.4	21.7	13.0	4.3	4.3
	70歳以上	19	42.1	42.1	26.3	15.8	10.5	-	10.5

※n=30未満は参考値のため灰色。　※全体の値を基準に降順並び替え

Q12：茶道が現在まで引き継がれている理由【全調査対象者への設問】



n=30以上で
- 全体＋10pt以上
- 全体＋5pt以上
- 全体－5pt以下
- 全体－10pt以下

		n=	日本の様々な伝統文化に深く関わり続けているから	日本独自の芸術性を持っているから	日本文化のもつ精神性や礼儀作法を追究するものであるから	お茶を点てる文化が生活に身近なものとなっているから	茶室や茶碗等、茶道の文化財等が残っているから	茶会等が行われ、発表、交流の場があるから	誰もが楽しめる趣味として受け入れられているから	茶道家が国内外で活躍して、茶道を発信しているから	学校で体験する機会があるから	茶道教室など、習うための場所がたくさんあるから	テレビなど様々なメディアで取り上げられているから	その他
全体		1,500	44.6	42.7	28.6	20.7	19.2	16.7	9.7	8.1	6.0	5.9	5.1	2.0
性別	男性	750	43.6	40.4	27.2	21.7	16.0	18.1	8.9	7.2	5.6	5.1	5.6	2.1
	女性	750	45.6	44.9	30.0	19.7	22.4	15.3	10.5	9.1	6.4	6.8	4.5	1.9
年代	12－14歳	100	35.0	33.0	20.0	14.0	16.0	11.0	8.0	1.0	11.0	4.0	5.0	4.0
	15－19歳	200	39.5	48.0	24.0	22.5	19.0	20.0	12.5	13.0	6.5	8.5	9.0	2.0
	20－29歳	200	38.0	34.5	16.0	25.5	15.0	20.0	14.0	6.5	10.5	6.5	5.0	-
	30－39歳	200	39.5	38.0	25.0	21.5	21.0	21.0	11.5	10.0	6.5	6.0	7.0	1.5
	40－49歳	200	43.5	43.0	28.5	19.0	13.5	19.0	6.5	9.0	4.0	6.5	4.5	4.0
	50－59歳	200	50.0	38.0	29.5	20.5	15.0	12.5	4.5	7.5	5.5	5.5	3.0	1.0
	60－69歳	200	46.0	48.0	35.0	20.0	23.0	12.0	10.5	8.5	4.5	3.5	5.0	2.5
	70歳以上	200	60.5	54.0	46.5	19.5	29.5	15.5	9.5	6.0	2.0	6.0	2.0	2.0

※全体の値を基準に降順並び替え

参考資料　茶道団体調査アンケート配布先

No.	団体名
1	一般財団法人不審菴
2	一般社団法人表千家同門会　※支部も含む
3	一般財団法人今日庵
4	一般社団法人茶道裏千家淡交会　※支部・青年部も含む
5	武者小路千家　※支部も含む
6	公益財団法人藪内燕庵
7	遠州茶道宗家
8	茶道宗徧流不審庵
9	松尾流
10	大日本茶道学会
11	一般財団法人半床庵文化財団
12	庸軒流　藤村正員派
13	庸軒流　宗積諦観派
14	庸軒流　近藤柳可派
15	茶道速水流
16	江戸千家宗家蓮華庵
17	茶の湯　江戸千家
18	一般財団法人不白流白和会
19	公益財団法人上田流和風堂
20	茶道石州流宗家
21	石州流茶道宗家
22	茶道鎮信流
23	御家流
24	式正織部流
25	志野流
26	志野流茶道　松風会
27	古市古流　清風会
28	南方流
29	公益財団法人松殿山荘茶道会
30	全日本石州流茶道協会
31	東京茶道会

令和２年度　生活文化調査研究事業(茶道) 報告書

発行日　令和３年３月23日
発　行　文化庁 地域文化創生本部事務局
〒605-8505
京都府京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町43-3